

社会学とともに

富永健一

富永健一先生の新しい門出を祝う会



富永健一先生近影

目次

I. 年 譜	1
II. 研究業績	9
1. 研究活動概要	10
2. 著作目録	12
A. 著 書	12
B. 共著書	12
C. 編著書	12
D. 共編書	13
E. 翻訳書	13
F. 論 文	13
G. 論説・時評・評論	25
H. 書評・文献紹介	27
I. 対談・シンポジウム	28
III. 富永ゼミの思い出	31
1. 富永ゼミ前史	32
原 征男 (1963〔昭和38〕年卒業)	32
2. 富永先生の初講義の印象	34
武井俊郎 (1964〔昭和39〕年卒業)	34
3. 富永ゼミの思い出	36
本間正人 (1982〔昭和57〕年卒業)	36
4. 難解な理論と悪戦苦闘した二年間	38
松村康史 (1986〔昭和61〕年卒業)	38
IV. 新しい門出に寄せられた 外国人研究者からのメッセージ	39
1. ロバート・E・コール (カリフォルニア州立大学教授)	40
2. メルヴィン・L・コーン (ジョンズ・ホプキンス大学教授)	43

3. エズラ・F・ヴォーゲル (ハーバード大学教授).....	49
4. フリードリッヒ・フルステンベルグ (ボン大学教授)	56
5. 董興華 (中国 瀋陽市)	63
6. 龐 鳴 (中国国家計画委員会)	68
 V. 戦後日本の社会学の発展をかえりみて 富永健一	73
1. 東大で過ごした日々	74
2. 私にとっての「社会学40年」	81
3. 戦後日本の社会学について考える	116

I. 年 譜

1. 東京大学文学部社会学科卒業まで

1931年 7月 1日 東京府豊多摩郡杉並町馬橋に父富永理、母郁子の長男として生まれる
(昭和6)

1937年 4月 1日 東京市世田谷区北沢小学校入学（翌日同区荏原小学校転入）

1941年 4月 父の転勤に伴い、満州国新京市春光国民学校に転入
(昭和16)

1944年 3月 同上卒業
4月 満州国新京市新京第一中学入学

1945年 4月 広島陸軍幼年学校入学
(昭和20)

9月 同校解散に伴い、東京都立第六中学に転入

1948年 4月 学制改革により東京都立新宿高等学校に移行

1950年 3月 同上卒業
(昭和25)

4月 東京大学文科二類入学

1955年 3月 同上文学部社会学科卒業
(昭和30)

2. 大学院時代

1955年 4月 東京大学大学院社会科学研究所修士課程入学
(昭和30)

1957年 3月 同上修了 社会学修士
4月 同上博士課程進学

1958年 4月 東京女子大学文学部非常勤講師（1967年3月まで）

1959年 9月 東京大学文学部助手就任のために東京大学大学院社会科学研究所博士課程中退

3. 助手・専任講師時代

1959年 10月 東京大学文学部助手
(昭和34)

1962年 4月
(昭和37)

東京大学文学部専任講師

1965年 9月
(昭和40)

経済審議会臨時委員（1968年1月まで）

10月

『社会変動の理論－経済社会学的研究－』出版（1967年に博士論文として提出）

1966年 8月

アメリカ合衆国出張（同年9月30日まで；読売新聞の求めで、ベトナム戦争下のアメリカの市民生活、黒人問題、企業の変化と労働組合の対応等の研究のため）

4. 助教授時代

1966年 11月
(昭和41)

東京大学文学部助教授

同月

日本経済新聞図書文化賞受賞（『社会変動の理論』に対して）

1967年 11月

社会学博士（東京大学）

1968年 2月

米国イリノイ大学労働産業関係研究所リサーチ・フェロウ（1969年2月まで、慶応－イリノイ・プロジェクトにより）

1969年 3月

米国ハーバード大学東アジア研究センターリサーチ・フェロウ（1969年8月まで）

1970年 6月

スイス、チューリッヒでの「ポスト工業社会（昭和45）（Post-industrial Society）会議」出席（ダニエル・ベル、ラルフ・ダーレンドルフ主宰の会議）

1971年 2月

経済審議会専門委員（1972年1月まで）

1972年 1月

経済企画庁国民生活審議会専門委員（1974年3月まで）

1974年 3月

オーストラリア国立大学社会科学リサーチ・スクールリサーチ・フェロウ（1975年3月まで）

8月

カナダ、トロントでの国際社会学会（International Sociological Association）に出席

1975年 4月

国民生活審議会専門委員（1980年3月（昭和50）まで）

- 12月 松永賞受賞(産業化と社会変動、経済行動の社会学的分析、社会階層と社会移動、社会システム理論などの一連の社会学研究に対して贈られる)
- 1976年9月 学術審議会日米教育文化協力事業委員会委員(1989年1月まで)
- 11月 経済社会学会理事(1984年以来常任理事)
- 1977年2月 文部省学術審議会専門委員(現在に至る)

5. 教授就任から現在まで

- 1977年4月(昭和52) 東京大学文学部教授(現在に至る)
- 同月 東京大学総長補佐(1978年4月まで)
- 7月 大学設置審議会専門委員(1979年6月まで)
- 9月 郵政省貯金局「郵便貯金に関する調査研究会」会員(現在に至る)
- 10月 組織学会常任理事(1989年6月まで)
- 1978年8月 スウェーデン、ウプサラでの国際社会学会出席「近代化の国際比較」のテーマで発表
- 1979年10月 産業構造審議会専門委員(1981年9月まで)
- 同月 日本社会学会理事(1982年10月まで)
- 1980年1月(昭和55) アメリカ、ハワイにて『社会階層の日米プロジェクト』会議に出席(アメリカの Social Science Research Council と日本学術振興会との間で行われた、日米の社会階層研究者交流プロジェクト)
- 9月 日本労働協会賞受賞(編者として『日本の社会階層』への受賞を代表)
- 1981年3月 西独ボッフム大学東アジア学部客員教授(1982年3月まで講義、東大ーボッフム大学交換プロジェクトによる)
- 1982年4月 米国国立精神衛生研究所(National Institute of

- Mental Health : ワシントン、D. C. 近郊)客員科学者(Visiting Scientist)(同年6月まで)
- 8月 メキシコ、メキシコシティでの国際社会学会に出席「社会階層リサーチ・コミティ」(Research Committee on Social Stratification)理事(Member of the Board)(1989年7月まで)
- 「経済と社会リサーチ・コミティ」(Research Committee on Economy and Society)理事(Member of the Board)(現在に至る)
- 9月 郵政省簡易保険局「簡易保険と郵便年金に関する調査研究会」会員(現在に至る)
- 1983年5月 東京大学学生生活実態調査専門委員(1988年4月まで)
- 7月 米国国立精神衛生研究所(National Institute of Mental Health)客員科学者(Visiting Scientist)(同年9月まで)
- 1984年4月 社会保障研究所専門委員として「社会保障パターンの国際比較」プロジェクトに参加(1987年3月まで)
- 11月 中国・天津 南開大学社会学系 客員教授(同年12月まで集中講義)
- 1985年10月(昭和60) 日本社会学会理事(1988年10月まで)
- 1986年4月 放送大学客員教授(現在まで継続)
- 6月 社会学史学会理事(現在に至る)
- 8月 インド、ニューデリーでの国際社会学会に出席、司会と発表
- 1987年5月 中国・天津 南開大学社会学系 客員教授(同年7月まで集中講義)
- 講義後、中国社会科学院社会学研究所、北京大学、西安社会科学院、杭州社会科学院などの中国各地で講演
- 8月 アメリカ社会学会第82回大会参加、発表(シカゴにて)
- 1989年4月 文部省学術国際局学術審議会専門委員

(平成元) 同月 中国・天津 南開大学社会学系 客員教授 (同年5月まで集中講義)

8月 西独チュービンゲン大学日本学科 客員教授 (1990年3月まで講義、東大-チュービンゲン大学交換プロジェクト) その間、ボン大学、マールブルク大学、デュースブルク大学、ベルリン自由大学、コンスタンツ大学、チュービンゲン大学、ケルン大学、ザールブリュッケン大学などで講演

1990年 8月 スペイン、マドリードでの国際社会学会出席、発表

9月 経済社会学会会長 (現在に至る)

1991年 11月 第2回漢字文化圏フォーラム「漢字文化圏の歴史と未来」出席、司会

6. 非常勤講師一覧

1958年 4月 東京女子大学文学部非常勤講師 (1967年3月まで)

1963年 4月 大阪大学経済学部社会経済研究施設非常勤講師 (翌年3月まで)

1964年 4月 東京大学経済学部非常勤講師 (1984年度まで隔年で担当)

1966年 7月 信州大学文理学部非常勤講師 (集中講義)

1970年 4月 慶応義塾大学文学部非常勤講師 (1972年3月まで講義)

1973年 4月 東京大学大学院理学系研究科、工学系研究科非常勤講師

1975年 6月 名古屋大学経済学部非常勤講師 (集中講義)

1976年 4月 名古屋大学文学部非常勤講師 (翌年3月まで、集中講義)

1977年 5月 埼玉大学大学院政策科学研究科非常勤講師 (集中講義)

7月 北海道大学文学部非常勤講師 (集中講義)

1979年 12月 埼玉大学大学院政策科学研究科客員教授 (翌年3月まで、集中講義)

1981年 3月 西独ボッフム大学東アジア学部客員教授 (翌年3月まで講義、東大-ボッフム大学交換プロジェクトによる)

1982年 11月 九州大学文学部非常勤講師 (翌年3月まで、集中講義)

1983年 4月 慶応義塾大学法学部・文学部・大学院社会学研究科非常勤講師 (学部は1986年3月まで、大学院は1987年3月まで、それぞれ講義)

1984年 11月 中国・天津 南開大学社会学系 客員教授 (同年12月まで集中講義)

1985年 4月 東北大学文学部非常勤講師 (翌年3月まで、集中講義)

1986年 1月 筑波大学大学院非常勤講師 (同年3月まで、集中講義)

4月 放送大学客員教授 (現在まで継続)

4月 東京大学教養学部非常勤講師 (同年9月まで)

1987年 5月 中国・天津 南開大学社会学系 客員教授 (同年7月まで集中講義)

10月 金沢大学非常勤講師 (同年3月まで、集中講義)

1988年 7月 北海道大学非常勤講師 (集中講義)

12月 山口大学非常勤講師 (集中講義)

1989年 4月 中国・天津 南開大学社会学系 客員教授 (同年5月まで集中講義)

8月 西独チュービンゲン大学日本学科 客員教授 (翌年3月まで講義、東大-チュービンゲン大学交換プロジェクトによる)

1990年 4月 慶応義塾大学大学院社会学研究科非常勤講師 (現在に至る)

八千代国際大学非常勤講師 (翌年3月まで)

1991年 4月 慶応義塾大学文学部非常勤講師

同上大学院社会学研究科非常勤講師

7月 北海道大学非常勤講師 (集中講義)

大阪大学非常勤講師 (集中講義)

II. 研究業績

1. 研究活動の概要

(1) 社会学原理論・学説史

とりわけマックス・ヴェーバーからパーソンズに至る行為理論、および、スペンサー、デュルケームからパーソンズ、マートンにいたる機能主義的社会理論の研究を行い（『現代の社会科学者』）、それらの影響のもとに、最終的に自分自身の社会学原理論（『社会学原理』）を構築した。

(2) 近代化、産業化・社会変動

1960～1970年代におけるアメリカ・西ドイツの近代化理論を下敷に、社会変動理論を構築した。またこれを日本に適用し、中国の近代化との比較をしながら、非西洋・後発社会近代化の理論を構築を行った（『社会変動の理論』、『日本の近代化と社会変動』）。

(3) 社会階層・社会変動

1955年以来10年毎に行われた日本における社会階層と社会移動（SSM）全国調査に参加。特に1975年第3回調査にはプロジェクトリーダーとして調査を主宰し、SSMデータの全面的コンピュータ化と計量分析化を果たした（編著『日本の階層構造』）。その後も1955年データと1965年データをコンピュータ化し、1985年調査を担当する次の世代を育成した。

(4) 経済社会学

マックス・ヴェーバー及びパーソンズの経済社会学を引き継ぐとともに、新古典派ミクロ経済学の理論と社会学の理論とを相互乗入れさせて、福祉の問題、経済発展の問題、企業の社会的責任の問題などを理論化した（『経済と社会』近刊）。また1970年代以来の社会指標運動にコミットし、「二基準点方式による福祉指標」を構築した。

(5) 組織理論

恩師尾高邦雄の産業社会学を引き継いで、これを企業の組織の分析へと理論化するとともに、企業を対象とする組織分析の実証データを時系列的に収集してコンピュータ化した。

(6) 福祉社会の研究

社会保障の国際比較、福祉国家のあり方の問題などについて研究した（『日本産業社会の転機』）。

2. 著作目録

A. 著 書

- [1] 『社会変動の理論—経済社会学的研究—』, 岩波書店, 1965 年.
- [2] 『新しい産業社会—産業化と社会変動—』, 鹿島研究所出版会, 1965 年.
- [3] 『産業社会の動態』, 東洋経済新報社, 1973 年.
- [4] 『現代の社会科学者—現代社会科学における実証主義と理念主義—』(世界の知的遺産 79), 講談社, 1984 年.
- [5] 『社会学原理』, 岩波書店, 1986 年.
- [6] 『社会構造と社会変動—近代化の理論—』, 放送大学教育振興会, 1987 年.
- [7] 『日本産業社会の転機』, 東京大学出版会, 1988 年.
- [8] 『日本の近代化と社会変動—チュービンゲン講義—』, 講談社, 1990 年.

B. 共著書

- [1] 『社会心理学の形成』(高橋徹・佐藤毅と共著), 培風館, 1965 年.
- [2] 『余暇と労働』(高橋武・梅沢正・井上甫と共著), 日本生産性本部, 1966 年.
- [3] 『池辺三山—ジャーナリストの誕生—』(池辺一郎と共著), みすず書房, 1986 年.

C. 編著書

- [1] 『経営と社会』(現代経営学全集第 15 巻), ダイヤモンド社, 1971 年.
- [2] 『経済社会学』(社会学講座第 8 巻), 東京大学出版会, 1974 年.
- [3] 『日本の階層構造』, 東京大学出版会, 1979 年.

D. 共編書

- [1] 『階級と地域社会』(倉沢進と共編), 中央公論社, 1971 年.
- [2] 『企業行動とコンフリクト』(土屋守章と共編), 日本経済新聞社, 1972 年.
- [3] 『社会学原論』(塩原勉と共編), 有斐閣, 1974 年.
- [4] 『基礎社会学』全 5 巻(安田三郎・塩原勉・吉田民人と共編), 東洋経済新報社, 1980—81 年.

E. 翻訳書

- [1] T・パーソンズ, N・スメルサー, 『経済と社会』(全 2 冊), 岩波書店, 1958—59 年.
- [2] R・ダーレンドルフ『産業社会における階級および階級闘争』, ダイヤモンド社, 1964 年.
- [3] マックス・ウェーバー「経済行為の社会学的基礎範疇」(世界の名著第 50 巻『ウェーバー』), 中央公論社, 1975 年, pp.295—484.

F. 論 文

1956 年

- [1] 「行為空間と位相運動の理論研究—パーソンズ・バイルズの体系均衡の新しいフォーミュラ」, 『社会学評論』第 6 巻第 4 号, pp. 88—97.
- [2] 「社会体系—その概念・モデル・測定—」, 『社会学評論』第 7 巻第 2 号, pp. 31—55.

1957 年

- [3] 「現代社会学における階級の理論」, 『思想』No.397, pp.125—136.

1958 年

- [4] 「職業と社会的移動」, 尾高邦雄編, 『職業と階層』, 毎日新聞社, pp.81—

140.

- [5]「職場におけるホワイトカラーの態度調査」(塩入力・宇津栄祐と共同執筆),『社会学評論』第8巻第2号, pp.34-60.

- [6]「行動の社会学的理論」, 福武直ほか編『講座社会学』第1巻, pp.68-108.

- [7]「意思決定の社会学理論」,『社会学評論』第8巻第3号, pp.52-84.

1959年

- [8]「階級構造」, 尾高邦雄編『階級社会と社会変動』(現代社会心理学 第8巻), 中山書店, pp.2-25.

1960年

- [9]「現代産業社会の構造把握の問題」(上・下),『思想の科学』No.14-15, No.14: pp.79-96, No.15: pp.85-96.

- [10]「都市家族の主婦における階層内同質性と階層間異質性」,『社会学評論』第10巻第2号, pp.50-86.

- [11]「技術革新の中の鉄鋼労働者」,『エコノミスト』10月11日号, pp.36-41.

1961年

- [12]「日本の経営と日本の社会」, 社会学評論, 第12巻第1号, pp.30-45.

- [13]「産業の高度化と社会構造」,『思想』No.448, pp.78-95.

1962年

- [14] "Occupational Mobility in Japanese Society: Analysis of Labor Market in Japan" The Journal of Economic Behavior, Vol.2 No.1, pp.1-37.

- [15]「都市化と産業化」,『都市問題』第53巻第4号, pp.15-25.

1963年

- [16]「社会学理論と「モデル」の役割」,『思想』No.467, pp.120-130.

- [17]「賃金決定における「経済的」要素と「非経済的」要素」(一・二),『日本労働協会雑誌』No.54-55, No.54: pp.1-8, No.55: pp.1-9.

1964年

- [18]「現代資本主義の社会学」,『中央公論』3月号, pp.178-189.

- [19]「現代社会とエリートの問題」,『中央公論』10月号, pp.48-80.

- [20]「社会科学の統合化」,『講座哲学大系』第5巻, 人文書院, pp.284-309.

- [21]「行動理論と社会科学」,『思想』No.482, 14-26.

- [22]「日本社会と労働移動」, 尾高邦雄編『技術革新と人間の問題』, ダイヤモンド社, pp.261-309.

1965年

- [23]「産業主義と人間社会」, 共著書 [1]『社会心理学の形成』所収, pp.1-200.

- [24]「社会開発のための基礎理論」,『中央公論』3月号, pp.63-79.

- [25]「社会学とヴェーバー」, 大塚久雄編『マックス・ヴェーバー研究』, 東京大学出版会, pp.9-38.

- [26]「階級理論の基礎的諸問題」, 尾高邦雄・福武直編『二〇世紀の社会学』, ダイヤモンド社, pp.139-171.

1966年

- [27]「専門職業の社会的地位」,『中央公論』2月号, pp.80-105.

- [28]「近代化」論批判」,『自由』2月号, pp.32-43.

- [29]「社会行動分析の基礎」,『思想』No.510, pp.24-39.

- [30]「労働と余暇時間」, 共著書 [2]『余暇と労働』所収, 日本生産性本部, pp.59-136.

1967 年

- [31] 「労使関係分析の社会学的基礎」, 『日本労働協会雑誌』 No.100, pp.5-15.
- [32] 「高田保馬と『社会学概論』」, 『中央公論』 10月号, pp.414-424.

1968 年

- [33] 「現代社会と社会変動」, 山根常男・森岡清美編『現代社会学の基本問題』, 有斐閣, pp.23-51.
- [34] 「消費行動の社会学的分析」(松原洋三他4名と共同執筆), 『社会学評論』 第19巻第1号, pp.18-68.
- [35] 「ヴェーバーの支配の社会学と低開発国産業化の問題」, 内田義彦・小林昇編『資本主義の思想構造』(大塚久雄教授還暦記念論文集), 岩波書店, pp.459-493.
- [36] 「経済発展と社会発展—低開発国産業化の社会学的条件—」, 村上泰亮・筑井甚吉編『経済成長理論の展望』, 岩波書店, pp.236-269.
- [37] 「低開発社会の産業化と社会変動」, 『日本労働協会雑誌』 No.109, pp.2-18.

1969 年

- [38] "Trend Analysis of Social Stratification and Social Mobility in Contemporary Japan", The Developing Economies, VII-4, pp.471-498.

1970 年

- [39] 「社会移動の趨勢分析 1955-1965年」, 『社会学評論』 第21巻第1号, pp.2-24.
- [40] "Continuity and Change in Japanese Sociology: Past, Present, and Future", Rice University Studies, 56-4, pp.77-89.
- [41] "Studies of Social Stratification and Social Mobility in Japan: 1955-1967", Rice University Studies, 56-4, pp.133-149.
- [42] 「職業構造の変化と経営管理」, 『別冊中央公論 経営問題』 1970 春季号,

pp.304-317.

- [43] 「高度産業化と急進主義の発生」, 『中央公論』 2月号, pp.86-101.

1971 年

- [44] 「産業化と労働者」, 『日本労働協会雑誌』 No.145, pp.2-15.
- [45] "Post-industrial Society and Cultural Diversity", Survey, 78-1, pp.68-77.
- [46] 「経済行動と社会行動」(上・下), 『思想』 No.562・564, No.562: pp.21-37, No.564: pp.61-81.
- [47] 「経営と社会の基礎理論」, 編著 [1] 『経営と社会』 所収, pp.3-54.
- [48] 「社会移動の過程分析」, 共編著 [1] 『階級と地域社会』 所収, pp.133-189.
- [49] 「社会指標と社会計画」, 『中央公論』 8月号, pp.180-196.

1972 年

- [50] 「葛藤及び葛藤解決の社会学理論」, 共編著 [2] 『企業行動とコンフリクト』 所収, pp.27-51.
- [51] 「社会体系の構造と変動」, 川島武宜編『法社会学の基礎』(法社会学講座 第4巻), 岩波書店, pp.147-201.
- [52] 「高田保馬の勢力理論」, 『社会学評論』 第23巻第2号, pp.28-46.
- [53] 「二基準点方式による福祉指標構築の試み」(直井優・盛山和夫・安藤文一郎と共著), 東京都企画調整局.
- [54] 「現代青年の地位と役割」, 有沢広巳・大河内一男編『成長と福祉—日本の場合・西ドイツの場合—』, 日本経済新聞社, pp.245-265. (著書 [3] 『産業社会の動態』 に収録)
- [55] 「生活満足の構造」, 『自由』 1972 年3月号, pp.30-43. (著書 [3] 『産業社会の動態』 に収録)
- [56] 「新しい社会問題と社会計画の適用」, 『マネジメント』 1972 年8月号, pp.67-73. (著書 [3] 『産業社会の動態』 に収録)

1972 年

- [57] 「家計貯蓄行動の決定要因」(直井優と共同執筆), 『貯蓄時報』No.97, pp.24-46.
- [58] "Status and Role of Younger Generations in Japan", Internationales Asienforum, Munchen:Weltforum Verlag, Vol.4, pp.442-454
- [59] "Developpement et changement social au Japon: Une analyse parsonienne", Sociologie du Travail, No 3/73, pp.269-292. [英文論文 [70] の後半部分の Jacques Lartmann による仏訳]
- [60] 「社会体系分析と社会計画論」, 『思想』No.587, pp.51-66.
- [61] 「社会問題」, 『先進国問題の展望』(穴戸駿太郎・村上泰亮・山田圭一と共著), 日本経済新聞社, pp.129-166.

1974 年

- [62] "An Approach to the Measurement of the Levels of Welfare in Tokyo", in: Morley, J. W., ed., Prologue to the Future: The United States and Japan in the Postindustrial Age, New York:Japan Society, pp.155-178. [社会指標による東京の現状分析, 論文 [53] の要約の英語版]
- [63] 「社会発展と福祉水準」, 江見康一・加藤寛・木下和夫編『福祉社会日本の条件』, 中央経済社, pp.237-283.
- [64] 「社会移動の比較分析」(上)(直井優と共同), 『現代社会学』第1巻第2号, pp.104-138.
- [65] 「社会体系分析の行為論的基礎」, 青井和夫編『理論社会学』(社会学講座第1巻), 東京大学出版会, pp.81-136.
- [66] 「分析論理における社会学と経済学の相似性と非相似性」, 編著 [2] 『経済社会学』所収, pp.19-43.

1975 年

- [67] "Yasuma Takada: An Unknown Giant of Sociology", Sociological

Inquiry, 45-1, pp. 31-44.

- [68] 「社会移動の比較分析」(下)(直井優と共同), 『現代社会学』第2巻第1号, pp.143-186.
- [69] 「高度成長終焉の意味するもの」, 『中央公論』1975年11月号, pp. 94-115.

1976 年

- [70] "Growth, Development, and Structural Change of the Social System", in: Loubser, J. J., Baum, R. C., Effrat, A., & Lidz, V.M., (eds.), Explorations in General Theory in Social Science: Essays in Honor of Talcott Parsons, 2 Vols., New York: Free Press, Vol.II, pp.681-712.
- [71] "Japan's Changing Occupational Structure and Its Significance" (with Robert E. Cole), in: Patrick, H., (ed.), Japanese Industrialization and Its Social Consequences, Berkeley & Los Angeles: University of California Press, pp.53-95.
- [72] "Wandel der Berufsstruktur in Prozess der Industrialisierung", in: Shimizu, I. & Tamanoi, Y., (Hrsg.), Die Gesellschaft Japans, Westdeutscher Verlag, SS.59-76.
- [73] 「労使関係システムの葛藤解決能力」, 『季刊公企労研究』No.26, pp.25-35.
- [74] 「社会指標から見た都市の評価」, 木下和夫・大石泰彦他『企業と環境』, 関西情報センター, pp.153-294.

1977 年

- [75] 「社会計画の理論的基礎」, 経済企画庁編『総合社会政策を求めて』, 大蔵省印刷局, pp.124-147.
- [76] 「階層的地位形成過程の分析」(安藤文四郎と共同), 『現代社会学』第4巻第2号, pp.3-58.
- [77] 「現代社会と大学」, 『世界』No.384 (1977年11月号), pp.65-79.

1978 年

- [78] 「企業の社会的責任の考え方について」, C D I 編『コミュニティ・バンク論 II』, 京都信用金庫, pp.166-187.
- [79] "Dual Structure and Conflict in 'Borrowed' Industrialization Process: the Case of Japan," Paper presented to the Plenary Session II of the IXth World Congress of Sociology, Uppsala, August 14-19, 1978.

1979 年

- [80] 「組織の社会学的分析」, 『経済セミナー』No.297 (1979 年 10 月号), pp.38-47.
- [81] 「社会システム理論の形成」(T. パーソンズとの対談), 『思想』No. 657, pp.1-26.

1980 年

- [82] "A Trend Analysis on the Structure and Process of Social Stratification in Japan," Paper presented to the U.S.-Japan Conference on Social Stratification, Hawaii, January 1980. (unpublished)
- [83] 「組織の構造分析と機能分析」, 『組織科学』第 14 巻第 1 号, pp.2-9.
- [84] 「「労働運動」論と「労働者階級」論—19 世紀西ヨーロッパ型階級概念の変質」, 民主社会主義研究会編『大系民主社会主義』第 4 巻, 文芸春秋社, pp.51-75. [著書 [7] 『日本産業社会の転機』第 4 章に再録]
- [85] 「日本の社会階層」, 『関西学院大学社会学部紀要』No.40, pp.37-55.
- [86] 「現代社会と階層構造」, 『エコノミスト』(上・下), (上) : 1 月 8 日 / 15 日合併号; pp.148-155, (下) : 1 月 22 日号; pp.80-89.

1981 年

- [87] "Soziologie," in: Horst Hammitzsch, (Hrsg.), Japan-Handbuch,

Wiesbaden: Franz Steiner, SS.697-709.

- [88] "Sozialstruktur," a.a.O., SS.676-697.
- [89] "Wohlfahrtsindizes," a.a.O., SS.2376-85.
- [90] 「社会構造の基礎理論」, 共編書 [4] 『基礎社会学』第 IV 巻所収, pp.2-33.
- [91] 「社会変動の基礎理論」, 共編書 [4] 『基礎社会学』第 V 巻所収, pp.2-32.
- [92] 「理論における普遍的側面と時代制約的側面—高田社会学再考—」高田保馬博士追想録刊行会編『高田保馬博士の生涯と学説』, 創文社, pp.95-111.

1982 年

- [93] 「日本産業社会の転機」, 『週間東洋経済』11 月 13 日号, pp.44-53.

1983 年

- [94] 「社会変動研究における実証主義と理念主義」, 『思想』No.712, pp. 43-68.
- [95] 「産業社会の「日本的」利点とその消滅」, 『学士会会報』No.758, pp.103-117.
- [96] 「福祉国家政策の普遍的側面と特異的側面」, 岡野行秀・根岸隆編『公共経済学の展開』, 東洋経済新報社, pp.154-171.
- [97] 「社会保障と社会変動の関連分析」, 『季刊社会保障研究』第 19 巻第 1 号, pp.6-15.
- [98] 「ドイツ社会学における実証主義と理念主義」, 『社会学史研究』復刊第 5 号, pp.74-96.

1984 年

- [99] 「福祉国家政策についての機能主義的解釈」, 『経済社会学会年報』第 5 号, pp.99-125.
- [100] 「産業化, 社会の構造変動, 福祉国家」, 社会保障研究所編『経済社会

の変動と社会保障』, 東京大学出版会, pp.153-181.

1985 年

- [101] "Typology in the Methodological Approach to the Study of Social Change, in: Eisenstadt, S. N., & Helle, H. J.,(eds.), Macro Sociological Theory, Vol.1, London: Sage Publications, pp.168-196.
- [102] 「近代化理論」の今日的課題, 『思想』No.730, pp.102-126.
- [103] 「中国社会の近代化」, 永井陽之助編『二〇世紀の遺産』, 文芸春秋社, pp.233-271.

1986 年

- [104] 「日本社会における地位非一貫性の趨勢 1955 - 1975 とその意味」(友枝敏雄と共同), 『社会学評論』第 37 巻第 2 号, pp.20-42.
- [105] "Trends of Status Inconsistency and Their Significance in Japanese Society 1955-1975" (with T. Tomoeda) in: Strasser, H. and Hodge, R.W., eds., Status Inconsistency in Modern Societies, pp.349-367, Duisburg: Verlag der Sozialwissenschaftlichen Kooperative.
- [106] "Sociological Theory from a Non-Western Viewpoint: A Reconsideration on Functional Theory, Social System Theory, and the Problem of Social Change," Paper presented to the XIth World Congress of Sociology, New Delhi, August 18-22, 1986, to be published in: E. Tiryakian, ed., The East meets West, forthcoming.
- [107] "Information and Knowledge: A Critical Comment on Information Society", Paper presented to Todai-Symposium on Information.
- [108] "A Reconsideration on Functional Theory, Social System Theory, and the Problem of Social Change," Paper presented to 11th World Congress of Sociology, New Delhi, India, August 1986.
- [109] 「日本と西ドイツの「戦後社会」」, 『経済社会学会年報』第 8 号, pp.53

-80-

- [110] 「環境変化と経営組織の構造変動」(高瀬武典・長谷川公一と共同執筆), 『組織科学』第 20 巻第 1 号, pp.20-31.

1987 年

- [111] 「組織における機能的要件充足と個人欲求充足との分離の問題をめぐって」, 『組織科学』第 20 巻第 4 号, pp.45-55.
- [112] 「社会保障の決定要因—福祉国家形成の普遍主義的解釈—」, 『季刊社会保障研究』第 23 巻第 1 号, pp.108-121.
- [113] "Max Weber and the Modernization of China and Japan," in: Melvin L. Kohn, (ed.), Cross-National Research in Sociology, London: Sage Publications, 1989, pp.125-146.

1988 年

- [114] 「世代間コミュニケーション」, 竹内敬人編『言語とコミュニケーション』東京大学出版会, pp.173-192.
- [115] "Some Comparative Observations on Modernization of Social Structure between China and Japan," Wolfgang Klenner, (ed.), Trends of Economic Development in East Asia, Berlin: Springer Verlag, pp.171-186.
- [116] 「戦後社会の幕は引かれたのか」, 『世界』No.513 (1988 年 4 月号), pp.39-57.
- [117] 「情報の氾濫と知識の貧困」, 『季刊アステイオン』No.8, pp.96-112.
- [118] 「ウェーバーと中国および日本の近代化」, 『思想』No.766, pp.120-155.
- [119] 「組織変動の理論をめざして」, 『組織科学』第 22 巻第 3 号, pp.2-14.

1989 年

- [120] 「保守化とポスト・モダンのあいだ」, 『世界』No.525 (1989 年 3 月号), pp.233-248.
- [121] 「鈴木栄太郎の社会学理論」, 『現代社会学研究』No.2, pp.1-26.

- [122] 「社会学理論と中国および日本の近代化」, 『季刊中国研究』 No.15, pp.1-24.

1990 年

- [123] "Modernisierung und der Wandel der Werte in Japan", in: Brunhil de Scheuringer, (Hrsg.), Wertorientierung und Zweckrationalität, Friedrich Fuerstenberg zum 60. Geburtstag, Opladen: Leske und Budrich, 1990, SS.39-56.
- [124] "A Theory of Modernization and Social Change of the Non-Western Societies: Toward a Generalizaion from Japan's Experiences", Paper presented to the XIIth World Congress of Sociology, ISA Research Committee on ECONOMY AND SOCIETY, July 12, 1990 in Madrid, Spain. (Scheduled to be published on "International Review of Sociology", 1992)
- [125] Introduction: Stages of the Development of Modernization Theory and the Point of View of Late-Starting Countries, (Scheduled to be published on "International Review of Sociology", 1992)

1991 年

- [126] "European Sociological Thought in Modernization of Japan", in: Stompka, Pjotr, ed., European Sociology at the Turn of the Twenty-First Century, London: Harper Collins Academic.
- [127] 「日本の近代化と欧米の社会学思想—日本の精神的近代化過程の一側面—」, 『思想』 No.808, pp.4-38.

1992 年

- [128] 「戦後日本の社会階層とその変動 1955 - 1985」, 東京大学社会科学研究所編『現代日本社会』第6巻, 東京大学出版会, pp.429-495.

G. 論説・時評・評論

- [1] 「階級・アノミー・官僚制」(上・下), 『東京大学新聞』1959年7月1-8日.
- [2] 「現代学生論 実務家の機能と批判の目」, 『週間読書人』1963年4月22日.
- [3] 「職業意識の社会的背景」, 『マネジメント』1963年8月号, pp.11-25.
- [4] 「現代社会学とマルクス主義」, 『一橋新聞』1965年7月15日.
- [5] 「「力」が要る社会開発」, 『朝日新聞』1965年10月11日.
- [6] 「「言語無力感」について」, 『朝日新聞』1966年2月23日.
- [7] 「これがアメリカだ4 反戦の声」, 『読売新聞』1966年10月13日.
- [8] 「これがアメリカだ20 優雅な労働組合」, 『読売新聞』1966年10月31日.
- [9] 「これがアメリカだ21 変わる経営者の信条」, 『読売新聞』1966年11月1日.
- [10] 「これがアメリカだ22 新しい社会の主役」, 『読売新聞』1966年11月2日.
- [11] 「これがアメリカだ24 コミュニティの人々」, 『読売新聞』1966年11月5日.
- [12] 「これがアメリカだ26 黒い過激派」, 『読売新聞』1966年11月8日.
- [13] 「これがアメリカだ27 新しい公民権法」, 『読売新聞』1966年11月9日.
- [14] 「これがアメリカだ34 電子計算機時代」, 『読売新聞』1966年11月18日.
- [15] 「これがアメリカだ35 伸びる学生運動」, 『読売新聞』1966年11月19日.
- [16] 「これがアメリカだ39 アメリカン・デモクラシー」, 『読売新聞』1966年11月25日.
- [17] 「世界のなかの日本」, 『朝日新聞』夕刊1967年7月12日.
- [18] 「新聞の機能を考える」, 『広告月報』1967年10月号, pp.2-3.

- [19] 「グローバル・ビレッジ化は可能なのか」, 『YTV REPORT』1970年9月号, pp.40-46.
- [20] 「国民の欲求、的確に捉えようー「国民生活白書」を読んでー」, 『サンケイ新聞』1971年7月20日.
- [21] 「社会計画としてのシビル・ミニマム」, 『週刊とちょう』1971年6月8日.
- [22] 「経済白書“都市化”分析を採点する」, 『日本経済新聞』1971年7月31日.
- [23] 「社会指標と社会計画(抜粋)」, 『週刊とちょう』1972年7月27日.
- [24] 「GNPをこえる指標」, 『読売新聞』1971年8月5日.
- [25] 「地域社会の充実をー国民生活白書の内容ー」, 『日本経済新聞』1972年8月15日.
- [26] 「福祉水準の測定について」, 『読売新聞』1972年8月15日.
- [27] 「“わが社”意識の反社会性」, 『朝日新聞』1974年5月22日.
- [28] 「国際会議と新興国」, 『東京大学新聞』1975年4月28日.
- [29] 「逸脱下位規範」, 『サンケイ新聞』1975年6月3日.
- [30] 「インフレーション」, 『サンケイ新聞』1975年6月10日.
- [31] 「欲望肥大と生活標準」, 『サンケイ新聞』1975年6月17日.
- [32] 「社会システムの調節メカニズム」, 『サンケイ新聞』1975年6月24日.
- [33] 「潜在機能の明示化」, 『サンケイ新聞』1975年7月1日.
- [34] 「イデオロギーの形骸化」, 『サンケイ新聞』1975年7月8日.
- [35] 「日本人は特殊か」, 『サンケイ新聞』1975年7月15日.
- [36] 「福祉とは何か」, 『サンケイ新聞』1975年7月22日.
- [37] 「「階層の標準化」」, 『サンケイ新聞』1975年7月29日.
- [38] 「家族ライフ・サイクル」, 『サンケイ新聞』1975年8月5日.
- [39] 「インフレーション再論」, 『サンケイ新聞』1975年8月12日.
- [40] 「戦後三十年の意味」, 『サンケイ新聞』1975年8月19日.
- [41] 「言論の公共性」, 『サンケイ新聞』1975年8月26日.
- [42] 「景気と社会不安」, 『日本経済新聞』1975年9月5日.
- [43] 「“英国病”は上陸したか」, 『日本経済新聞』1976年1月12日.
- [44] 「“成熟した社会”の条件」, 『朝日新聞』1976年2月10日.
- [45] “People desire better social security and public facilities”, The

Japam Economic Journal, 1977.1.11.

- [46] 「混迷時代の政策を探る」, 『日本経済新聞』1977年1月14日.
- [47] 「社会階層構造の現状」, 『朝日新聞』夕刊1977年6月27日.
- [48] 「科学・技術と社会変動」, 『科学と工業』, 第51巻第5号, 1977年, pp.4-6.
- [49] 「大学再考 21. “解体”した人間関係の回復」, 『日本経済新聞』1978年2月27日.
- [50] 「“底流”に新中間意識」, 『日本経済新聞』1980年6月24日.
- [51] 「進路をきくー“新中間層”を考える」, 『サンケイ新聞』1980年8月5日-8日.
- [52] 「広告の信用高める努力を」, 『朝日新聞』1980年10月19日.
- [53] 「信義の個人 集団ではエゴ」, 『日本経済新聞』1981年1月5日.
- [54] 「ドイツ人の日本人観」, 『学内広報』No.578 (1982年10月18日).
- [55] 「国際社会での日本」, 『西日本新聞』1983年1月22日.
- [56] 「社会科学に多様化の波」, 『日本経済新聞』1984年4月21日.
- [57] 「後発非西洋社会の近代化理論を模索」, 『日本経済新聞』1985年2月11日.
- [58] 「「ポスト・モダン」と「プリ・モダン」の間」, 『毎日新聞』夕刊1989年5月13日.
- [59] 「天津・南開大学の学生は消えた」(原題「中国学生運動の悲劇」)『季刊アステイオン』, No.14 (1989年秋季号), pp.85-95.
- [60] 「体験的1989年論」, 『ハイスクール・ニュース』1990年9月号, 学校図書, pp.1-4.

H. 書評・文献紹介

- [1] 「フルステンベルク『現代社会における昇進の問題』」, 『日本労働協会雑誌』, No.60, 1964年, pp.54-60. [Friedrich Fuerstenberg, Das Aufstiegsproblem in der modernen Gesellschaft, 1962 の紹介]
- [2] 「ハウク『企業の社会政策』」, 『日本労働協会雑誌』, No.64, 1965年,

- pp.67-72. [R. Hauck, Sozialpolitik der Unternehmen, 1963 の紹介]
- [3] 「社会学とはいかにあるべきか」, 『週間東洋経済』, 1965年5月29日号, pp.78-79. [C・W・ミルズ『社会学的想像力』紀伊国屋書店の書評]
- [4] 「ステロ版化からの訣別」, 『潮』1966年2月号, pp.320-321. [清水幾太郎『精神の離陸』竹内書店の書評]
- [5] 「紛争の一般理論と機能主義社会学」, 『思想』, No.566, 1971年, pp.137-144. [広瀬和子『紛争と法』の書評]
- [6] 「解説・高田保馬の社会学理論」, 高田保馬『社会学概論』改版, 岩波書店, 1971年, pp.365-413.
- [7] 「P・ホランダ著『アメリカ社会とソビエト社会』I・II」, 『日本経済新聞』, 1972年10月1日.
- [8] 「集団の一般理論とは何か」, 『現代社会学』, 第2巻第2号, 1975年, pp.181-193. [清水盛光『集団の一般理論』の書評]
- [9] 「ダニエル・ベル 脱産業社会の展望」, 『毎日新聞』, 1975年4月28日. [ダニエル・ベル著(内田忠夫他訳)『脱工業社会の到来』の書評]
- [10] 「ダニエル・ベル著『脱工業社会の到来』上・下」, 『毎日新聞』1976年1月21日.
- [11] 「市場経済の原理と計画経済の原理」, 『東京大学新聞』1977年6月27日. [マックス・ウェーバー『経済と社会』の書評]
- [12] 「ヴェーバー継承の二潮流」, 『日本図書新聞』1980年8月16日. [W・M・スプロンデル編(佐藤嘉一訳)『A・シュッツ, T・パーソンズ往復書簡 社会学理論の構成』の書評]
- [13] 「宮本光晴『人と組織の社会経済学』」, 『組織科学』, 第21巻第4号, 1988年, pp.89-92.
- [14] 「金井新二『ウェーバーの宗教理論』」, 『東京大学新聞』1991年10月29日.

I. 講演・対談・一般シンポジウム

- [1] 「産業社会と労働組合の役割」, 『近代労働』, 1965年8月号.

- [2] 「組織における人間関係」, 『自治研修』, 70号(1966年6月).
- [3] 「シンポジウム ドラッカーをいかに理解すべきか」(黒沢清、武山泰雄、山懸一雄、野田一夫、伊藤長正などと共に), 『ダイヤモンド 別冊近代経営』1966年夏季号, pp.17-28.
- [4] 「特別シンポジウム『哲学の再建』」(上山春平、江藤淳、永井陽之介、山崎正和等と共に), 『中央公論』, 1966年11月号, pp.46-111.
- [5] 「これがアメリカだを終わって」(高坂正堯、河野光雄、安田志郎、堀川淳弘と共に), 『読売新聞』1966年11月27日.
- [6] 「真の豊かさへの道」(吉田夏彦、宮崎勇、坂本二郎、市村真一などと共に), 『日本経済新聞』1970年1月1日.
- [7] 「“後発先進国”のモデル・日本」(R・P・ドーアと共に), 『マネジメント』1970年4月号.
- [8] 「現代社会科学における方法の共通性」(小室直樹と共に), 『経済評論』, 1970年5月号, pp.93-117.
- [9] 「企業の社会的責任とはなにか」(中川敬一郎と共に), 『週間東洋経済』, 1970年11月14日号, pp.58-64.
- [10] 「日本の低賃金と労働慣行」(佐野陽子、津田真澄、高梨昌と共に), 『季刊労働法』1971年冬号, pp.126-156.
- [11] 「社会科学の総合化は可能か」(村上泰亮と共に), 『週間東洋経済臨時増刊近代経済学シリーズ』, 1971年2月5日号, pp.154-172.
- [12] 「脱工業化社会の認識革命 ―パーソンズ教授を囲んで―」(T・パーソンズ、馬場伸也と共に), 『日本経済新聞』1972年11月21日.
- [13] 「高福祉社会の構図」(青木昌彦、貝塚啓明、宮崎勇と共に), 『日本経済新聞』1973年1月1日.
- [14] 「到来する Post Industrial Society の具体的構図―ダニエル・ベルに聞く」(D・ベル、内田忠夫、村上泰亮、佐藤誠三郎、馬場修一、公文俊平と共に), 『近代経営』, 1973年8月号, pp.108-119.
- [15] 「ゼロ成長二年―不況は何をもたらしたのか―」(安部北夫、大野明夫、杉岡碩夫らと共に), 『週間東洋経済』, 1976年1月3/10日号, pp.60-69.

- [16]「討論・新中間階層」(岸本重陳、村上泰亮、高島通敏、見田宗介と共に),
『朝日新聞』夕刊1977年8月22日-24日.
- [17]「中年革命 ～27～ 人生75年社会」,(下河辺淳と共に)『朝日新聞』
1977年2月3日.
- [18]「座談会・ニッポン生きる条件」(宮崎勇、八城政基、江藤淳と共に),
『日本経済新聞』1978年2月12日.
- [19]「社会システム理論の形成」(T. パーソンズと共に),『思想』No.657,
1979年, pp.1-26.
- [20]「テーマ討論 どこへ行く「新中間層」」,(竹内宏、村上泰亮、永井陽之
介と共に),『日本経済新聞』1980年7月15日.
- [21]「日本型福祉社会の構築を求めて-生保センター「高齢化社会シンポジ
ウム」から-」(加藤寛、高橋春常、牧野昇らと共に),『週間東洋経済』,
1980年9月13日号, pp.48-56.
- [22]「シンポジウム 転機に直面した産業社会」,(村上泰亮、山本七平、安
永武巳と共に),『朝日新聞』1982年10月12日.
- [23]「書評対談 梅棹忠夫『文明の情報学』」(粕谷一希と共に),『アステイ
オン』, No.10 (1988年秋季号), pp.184-196.
- [24]「第2回漢字文化圏フォーラム「漢字文化圏の歴史と未来」」(中嶋嶺雄、
溝口雄三、豊見川和行ほかと共に),『神奈川新聞』1991年11月28日.

III. 富永ゼミの思い出

1. 富永ゼミ前史

原 征男

(1963 (昭和 38) 年卒業)

私たち昭和 38 年度卒業組は 60 年安保を引きずって 36 年 4 月に本郷キャンパスに進学したが、当時富永先生はまだ助手で研究室の主として睨みを利かせておられた（ということは睨みを利かせられるような振舞いが私たちに多かったということである）。3 年の時に半分の学生は尾高先生のゼミに属したが、大変忙しく海外にも出かけられた尾高先生にかわって、富永助手が代行されることが多く社会学の方法論を中心にご指導を受けた。このゼミは後半青井先生が着任されて青井ゼミとなった。翌 37 年、富永先生は晴れて講師に昇任され、若々しい富永健一東京大学教官が誕生したのだが、その先生が早や定年退官と知り、あらためて歳月のはやさを痛感している。4 月の初講義では同級の山口（天池）正子さんが花束贈呈をしたが、顔を真っ赤にして盛んに照れておられたことをまるで昨日のように思い出す。先生の講義はひとあし先に教壇に立っておられた東京女子大で勤勉さ（休講が少なく）と厳しさ（試験が難しい）で有名だったが、その通りで内容があり、お陰で多くのことを勉強することが出来た記憶がある。

4 年生となって卒業論文のゼミナールでは私をはじめ十数名は尾高ゼミで産業社会学を学ぶことを選んだが、ご多忙の尾高先生にかわって富永講師が補佐役として TUTOR の役を引き受けて頂き、テーマの選択・資料の使い方・論文のまとめ方などについて数多の助言や指導を頂いた。お陰でどうやら論文をまとめあげることができたが、ご自分の博士論文を取りまとめ中のお忙しい中を嫌な顔をせず面倒な相談にのって頂いたことを今でも深く感謝しているのは私だけではない筈である。加えて提出した尾高ゼミの卒業論文のいくつかは実質的に富永先生に分担審査頂いたらしく、先生からコメントを頂いたのも記憶に鮮明である。こうした私たちは正式な“富永ゼミ”で学んだ訳ではないが、“PRE-富永ゼミ”出身として先生の最初の門下生を自負している次第である。大学のカリキュラムを離れても、富永先生が助手時代から主宰されておられ

た「産業問題研究会」にも参加させて頂き、既に社会人となっておられた多くの先輩に接したり企業社会のナマの問題等について学んだことは大変参考になった上、このネットワークは社会人になっても大いに活用させて頂いている。

また、富永先生とは年代の近さもあって、私たちはプライベートにも大変親しくして頂いた。所沢や高井戸のお宅にお邪魔してご馳走になったこともあったが、アルコールがはいると赤くなられる先生に奥様もまじえ夜が更けるまで話をうかがったことも多くあり、今から思うと研究の邪魔を相当してしまったものと反省している。さらに御殿下グラウンドでの野球やスキーにもよくひっぱりだした。1泊3食付 500 円という当時でも信じられない安さの志賀高原のスキーやどの屋根裏部屋でザコ寝をして白銀に挑んだのだが、よく付き合っ頂いたものだと思っている。卒業後も仲間が集まる多くの機会には富永先生にも友人のように声をかけ、食事を囲んだり、ゴルフをともしたり、家族ぐるみの同期会に奥様共々ご出席頂いたりと引続きおつきあいをお願いしている。これらは富永先生の誠実で飾らないお人柄と私たちの先生への甘えのせいであるが、特に最近私たちが社会の中で中堅になったこともあり先生を囲む会合も深みを加えており、これが私たちの“富永ゼミ”の本番であり、今たけなわである。このゼミはこれからまだまだ続けたいので、この一文の題は「富永ゼミ前史」としたもうひとつの所以である。

あらためて富永先生と奥様のご健康をお祈りする次第である。

[現在、(株) 東レリサーチセンター・取締役]

2. 富永先生の初講義の印象

武井 俊郎

(1964 (昭和 39) 年卒業)

富永先生の退官記念行事の一貫である先生の人と業績に関するこのパンフレットへの寄稿を幹事より依頼され、「私のような者がどうして？」と一瞬戸惑いを感じました。確かに私は後で触れますように富永先生には個人的に大変お世話になり、且つその後は日頃の雑事に紛れてご無沙汰しがちで誠に申し訳なく思っていますので、記念行事で何か私のような者で出来ることがあればお引受けしたいと思いましたが、先生の人と業績に関するパンフレットへの寄稿となると「不肖の教え子にしてその任に耐えず」として思い辞退しました。しかし、幹事の説得で結局お引受けし拙文を呈することになり恐縮しております。

と言うのも、在学中は勉強にはあまり身が入らず、学校へ出る日も少なく、また卒業後も「社会学」に関係する本も余り読まなかったせい、今となつては「社会学科」の思い出は遺憾ながら誠に漠としたものしか残っていないからです。

しかしながら、その中で富永先生が社会学科の講師に就任されて最初の講義（たしか「産業社会学と労働経済学」だったように思います）の記憶だけは今でも鮮明です。関係する文献、データを広くカバーされ、その上で慎重に論旨を組み立てる堅実且つ実証的な学風が窺われ、新鮮な印象を強く受けたからだと思えます。

それがきっかけで3年のゼミでは富永先生のグループに入れて頂きご指導を受けました。原書購読等で当時の社会学の最新動向の一端を垣間見る思いをさせて頂き、「オレも少しは社会学を勉強して入るんだな」と実感したことが思い出されます。

その後の先生の国内外にわたるご活躍は時々新聞雑誌等で存じ上げる程度でしたが、もう退官される歳になられたと伺い、時の過ぎる速さと自分のその間の進歩の無さに愕然とする思いにとらわれております。

卒業後、先生には結婚式の媒酌人をお願いし、大変ご迷惑をお掛けしました。

先生のご都合も確かめず、場所を先に決めてお願いすると随分といい加減且つ手前勝手なやり方だったにも関わらず、先生は気持ち良く引き受けて下さいました。先生の教え子に対する寛容さには今でも頭が下がる思いで一杯です。これから健康に留意され新しい職場でも後進のご指導にご活躍されることを心より祈念申し上げます。

尚、先生からご著書を数冊ご恵存戴きましたが、誠に申し訳ないことですが、読了までスタミナが続かなかったことをここに告白し、お詫びしておきたいと思えます。

[現在、(株) 東芝・電子業務部・部長]

3. 富永ゼミの思い出

本間 正人

(1982 (昭和 57) 年卒)

社会学科を志望する東大生には、いろいろなタイプがいるが、富永ゼミには、まじめな学究肌の人が多かったように思う。他のゼミに多いジャーナリストタイプはどちらかといえば小数派なのではないか。実際、私の同期からも各校で社会学の教鞭をとっている卒業生が輩出している。私といえば、ほとんど分類不能な業種であるし、今回この文章を書くことを仰せつかったのも、「その他の分野」に属する不肖の弟子代表も一人ぐらいいておかねば、という編集部のご配慮と理解している次第。

昭和 55 年の富永ゼミは、社会階層論の大著、レンスキーの「パワー・アンド・プリビレッジ」に取り組んだ。英語の原語で 300 頁以上のボリュームは、学部がひいひいいうには十分すぎるほどの分量だったことはいまでもない。毎回担当がいて、大体 1 章ずつ、抄訳をつくり、レジュメをきって、要点を報告する方式だ。しかし、当番にあたらなかった週でも、富永先生はさりげなく質問されるので（これがあまりいやみにならないのが先生の人徳）、ひとりの担当の章でも一応は目を通しておかねばいけない。結果、ゼミ室には、比較的はりつめた空気が流れていたように思う。

肝腎の講義の中身については、誠に申し訳ないことながらあまり記憶に残っていない。（このあたりが不肖の弟子らしいところ）ただ、テキストが何となく歴史の教科書風であったこと、濃いブルーの表紙は少し粘着力のあるような材質でできたことを思い出した。

レンスキーが終って一安心と思ったら、あにはからんや。その後は、各自の第二外国語で、階層論などに関係のある文献を探して、それについてレポートするというのが課題となった。小生は、中国語クラスだったため、該当する本をさがすだけでも一苦勞。しかし、独語・仏語の文献についてはすらすらとお読みになり、するどい質問をされた先生も、中国語については若干勝手が違ったらしく、少しお目こぼしをいただいたように思う。

お正月に、富永先生の烏山のご自宅にお邪魔し、奥様の手料理をごちそうになったことも忘れられない。先生は、お酒を飲むと、朗らかになられる、と同時に、若い私がいうのもおかしいが、ちょっとかわいく感じる感じがした。一人ひとりの学生に細やかにお気づかいされたことも強く印象に残っている。

翌昭和 56 年は先生がドイツに行かれたので、私たちが 4 年生の時に、定評のある「親身の卒論指導」をいただくことはできなかった。しかし、先生がその後、数多くの著作の中で、ドイツ研究の成果を発表されているのを見るとき、3 年生のときにゼミに参加させていただいた幸運を感謝しないではいられない。

さて、富永先生は東大ご退官の後、慶応大学湘南キャンパスで環境情報学部教授にご就任になると伺っている。私がつとめる松下政経塾とはつい目と鼻の先。二つの教育機関をマイクロウェーブ回線で結ぼうという壮大な計画もあり、今後、先生にお世話になる機会も増えるかもしれない。

これからも「不肖の弟子」たちをよろしく願います。

[現在、松下政経塾研究担当]

4. 難解な理論と悪戦苦闘した二年間

松村 康史

(1986 (昭和 61) 年卒)

私は1984年から2年間、お世話になりました。そのころは学生の間での「学派の流行」という点からみると、構造機能主義の盛時を過ぎた感があり、A・ゲールドナーの「社会学の再生を求めて」などがよく読まれていました。

本郷に進学する際には、どのゼミに入るか迷いましたが、まずは社会学の「本流」について学びたい、と言う気持ちから、富永ゼミの門を叩きました。結局、構造機能主義についてさえ、十分な理解に達しないまま卒業することになってしまいましたが……。

ゼミはT・パーソンズを初めてする学者の著書について、分担毎に要旨をまとめて意見を述べるという、オーソドックスなやり方でした。「社会的行為の構造」、「社会体系論」といった定番のほか、新進気鋭だったJ・アレグザンダーの原書をかじったりもしました。3年の暑い盛り、まだ訳書の無かったJ・ハバーマスの「コミュニケーション行為の理論」と悪戦苦闘したのも思い出です。

難解なものばかりでしたが、いつも穏やかな口調で語られる先生のお話を聞いている内に自分が大学者の理論に近づいているような気がして、心地よいものでした。

今でも、色あせた当時の青焼き（今でも使っているのでしょうか）のレジューメは、大事にとってあります。

ご長男と大学で同級だったこともあり、お宅に遊びにうかがったり、結婚式で挨拶していただくなど、先生には公私にわたって本当にお世話になりました。これからもお体に気をつけて、ご活躍をお祈りします。

[現在、朝日新聞記者]

IV. 新しい門出に寄せられた 外国人研究者からのメッセージ

1. ロバート・E・コール
(カリフォルニア州立大学教授)

Passage about Prof. Tominaga

I first came to know Prof. Tominaga in the late 1960s. I was a young Asst. Professor at an American university and he was on his way to a distinguished career as Professor of sociology at Tokyo University. I was impressed from the beginning with his thoughtfulness and his sincere commitment to the sociological enterprise.

We got to know each other on a personal level as well. I recall a particularly pleasant visit from Prof. Tominaga and his family when they stayed at our home in the early 1970s on one of his many visits to America. We spent long pleasant hours discussing the state of knowledge in our field.

In the mid-1970s, we had the opportunity to collaborate on an article on Japan's changing occupational structure. It was a rare chance to work closely with Prof. Tominaga and I learned a great deal from him on the intricacies of Japanese development. More generally speaking, his writings on Japanese industrialization and stratification have been extremely important guides to my own growth and understanding. He provided a mixture of theory and empirical work that has proved particularly provocative and challenging.

Quite apart from his influence on me, Prof. Tominaga's work has coincided with, and contributed mightily to, the coming of age of the discipline of sociology in Japan. His leadership role in coordinating research on stratification and mobility using modern methods has

brought Japanese work into the main stream of world sociology. Those committed to progress in the social science are deeply in his debt.

Robert E. Cole
Professor of Sociology
& Business Administration
University of California,
Berkeley

《日本語訳》

私が富永先生を知るようになりましたのは、1960年代の終わりの頃でした。私はアメリカのある大学の助教授の時であり、先生は東京大学の社会学の教授として輝かしい経歴の途上にありました。お会いした時から、私は先生の思慮深さと社会学的進取の気性への誠実な態度に感銘象を受けました。

同時に私たちは個人的な点でも知り合うようになりました。先生の数多くのアメリカご訪問のうち、1970年の初めに富永先生とご家族が私たちの家に滞在された時の楽しい訪問のことがとりわけ思い出されます。私たちはその分野での知識について議論し、長く楽しく時間を過ごしました。

1970年代の半ば、日本の職業構造の変動について共同研究する機会がありました。それは富永先生と親しく研究する貴重な機会でしたが、私は先生から日本の発展の複雑さについて多くのことを学びました。より一般化して申しますと、日本の産業化と階層についての先生の論文は私自身の成長と理解にとってきわめて重要な導きでありました。先生はとりわけ刺激的で挑戦的でもある理論と実証の融合というものを示されました。

先生が私に与えました影響とはまったく別に、富永先生の研究は日本の社会学におけるの来るべき時代に会ったものであり、それに力強く貢献してきました。近代的なモデルを用いた社会階層と移動の調査をコーディネートする先生のリーダーシップの役割は、日本の研究を世界の社会学の主流にするものでし

た。社会科学における進歩に関わる者は、先生の功績に負うところが大きいと言えます。

2. メルヴィン・E・コーン
(ジョンス・ホプキンス大学教授)

January 6, 1992

I am both pleased and honored to be invited to write a "passage about [my] commpanionship with Professor Ken'ichi Tominaga" for inclusion in the booklet about his career, on the occasion of his retirement from the Universiry of Tokyo and his becoming professor emeritus.

Professor Tominaga has for many years been a crucially important influence on my life as a sociologist — as he has been on the lives of many other sociologists throughout the world — and a living exemplar of my ideal of what a sociologist should be.

Professor Tominaga introduced me to Japanese sociology, which is reason enough to value my association with him. Learning about Japanese sociology, and [through him] meeting many Japanese sociologists, has greatly broadened my intellecual horizons. Among his many kindnesses to me, Professor Tominaga made an application on my behalf to the Japan Society for the Promotion of Science, which resulted in their awarding me a Fellowship that enabled me to visit several Japanese universities, to meet many Japanese sociologists, and to travel in Japan — an exeperience that was both intellectually and personally rewarding in the highest degree.

Nor am I the only Western sociologist who has learned about Japanese sociology through Professor Tominaga's efforts. On the contrary ,Tominaga has played a major role in making Japanese scholarship known to scholars throughout the world. His own research on social stratification in Japan, widely known and widely cited in the

international sociological community, is a model of thoughtful, rigorous research. This, I assume, is as well known to Japanese scholars as it is to Western scholars. What may not be as well known to Japanese scholars is that Tominaga has played a leading role in making Japanese research on social stratification known to the international sociological community, a signal service both to the international sociological community and also to Japanese sociology.

Among Professor Tominaga's many contributions to world sociology, one that is particularly important to me is that he sponsored and made important intellectual contributions to the comparative studies of social structure and personality in Japan, Poland, and the United States that my collaborators — Carmi Schooler, Atsushi Naoi, Kazimierz Slomczynski — and I have carried out. Without his forceful intellectual leadership, it never would have been possible to initiate the Japanese component of these cross-national studies. And from Tominaga we learned a great deal about both the theory and methodology of comparative research.

Professor Tominaga made further intellectual contributions to my colleagues' and my thinking about sociological theory and research during his tenure as a Visiting Scientist in the Laboratory of Socio-environmental Studies of the [U.S.] National Institute of Mental Health, when I was Chief of that Laboratory.

He contributed his wisdom as a Weberian scholar in a remarkable comparative analysis of the modernization of China and Japan that he presented at a featured thematic session of the American Sociological Association the year that I was President. I was proud to include that splendid paper in the volume on cross-national research in sociology that I later edited for the ASA Presidential series. As I wrote in the Introduction to that volume, in writing about Tominaga's paper and that of my esteemed Polish colleague, Wlodzimierz Wesolowski:

The second part of the book is devoted to two chapters in which I take particular delight, in part because I find the very existence of these papers so surprising. The authors, Wlodzimierz Wesolowski and Ken'ichi Tominaga, are the sponsors of the Polish and Japanese studies on which my own cross-national research on the psychological concomitants of social stratification is based. Yet, their chapters have nothing to do with this research, nor even with their own considerable research on the sociology of social stratification. Instead, in recent years both men have focused their scholarly attention on theoretical work in the tradition of Max Weber. It struck my fancy that two of the hardest-nosed quantitative analysts in the world, Wesolowski and Tominaga, went back to Weber for inspiration. Perhaps because of their expertise as empirical investigators, their approach to Weber goes considerably beyond exegesis and amplification: they use Weber, in highly imaginative ways, as an aid in dealing with concrete problems. They have thereby demonstrated, as no amount of preaching could have done, the continued vitality of the work of the father of cross-national research in sociology.

Over the course of many years, I have treasured the opportunity to hear Professor Tominaga present papers and discuss issues at international conferences and ISA Congress, to informally discuss our mutual interests in sociological theory and research, and to benefit from his advice, which I have eagerly sought.

To my mind, Ken'ichi Tominaga is an exemplar of the truly professional sociologist: a rigorous thinker, an intellectually committed man, a scholar committed to the highest standards of our discipline, and one who shares his wisdom and commitment with his colleagues throughout the world.

I am honored to be included among the world scholars who have

been given this opportunity to attest to our intellectual and personal indebtedness to this remarkable leader of our discipline.

Very cordially yours,

Melvin L. Kohn

Professor

《日本語訳》

1992年1月6日

富永先生の東京大学退官及び名誉教授授与に際して、先生の業績に関わるパンフレット中に「富永先生との交友についての一節」を書くように依頼されたことは、私によって喜びであり、また名誉なことでもあります。

富永先生は世界の多くの他の社会学者の生涯に与えてきましたように、社会学者としての私の人生にもきわめて重要な影響を与えました。また社会学者とはどうあるべきかという点でも、私にとって先生は生きるお手本でした。

富永先生は私を日本の社会学へと導いてくれましたが、それは先生との付き合いを価値あるものとする十分な理由でもありました。日本の社会学について学び、先生を通して多くの日本の社会学者に出会えたことは、私の知的領域を大きく広げるものでした。私に対する多くの親切の中の一つに、富永先生が私のために日本学術振興会に応募されたことがありました。その結果、私は特別研究員奨学金を頂き、日本の大学の幾つかを訪問し、多くの日本の社会学者にお会いすることができ、また日本を広く旅行することもできました。これらは計り知れないほど知的で個人的に得るところのある経験でした。

富永先生の功績から日本の社会学について学んだ西洋の社会学者は、私だけではありません。それどころか富永先生は日本の学問を世界の学者に知らせるのに、多大な役割を果たしてられました。先生の日本における社会階層の研究は国際的な社会学界において広く知られ、引用されておりますが、それは思

慮深く厳密な調査のモデルです。これは日本の学者だけではなく、西洋の学者にも知られております。日本の学者に十分知られていないのは、先生が社会階層における日本の調査を、国際的な社会学界に知らしめるのに指導的な役割を果たしたという点です。それは世界の社会学にとっても、また日本の社会学にとってもすぐれた貢献です。

世界の社会学に対する富永先生の多くの貢献の中でも、とりわけ私にとって重要なものは、先生が発起人となり、共同研究者である Carmi Schooler、直井優、Kazimierz Slomczynski と私が行った日本、ポーランド、アメリカにおける社会構造とパーソナリティの比較研究に対する重要な知的貢献であります。先生の強力な知的リーダーシップ抜きでは、これらの国際研究に日本を加えることは決してできなかったでしょう。さらに富永先生から、私達は比較研究の理論と方法について多くのことを学びました。

さらに富永先生は私が責任者であったアメリカ国立精神衛生研究所の社会環境研究室の客員研究員として在職中に、同僚及び私の社会学的理論及び調査の思考に対して知的貢献をしたのです。

先生は私が会長を務めていた年にアメリカ社会学会の特別テーマ部会で示された中国及び日本の近代化のすばらしい比較分析において、ウェーバー学者としてその英知を示されました。後に私がASAの会長シリーズのために編者となった社会学における国際調査の中に、あのすばらしい論文を入れましたことは私の誇りでした。富永先生と私の敬愛するポーランドの同僚 Włodzimierz Wesolowski の論文について、私はその本の序文のところで以下のように書いたのです。

本書の第二部は私が大変な喜びとする二つの章に負っています。それは論文の存在自体がかくも驚くべきものであるという理由からでもあります。Włodzimierz Wesolowski と富永健一の両執筆者は、私の社会階層の心理学的側面についての国際調査がその基礎としておりますポーランドや日本での研究の責任者であります。さしあたってはそれらの章はこの研究とは関係なく、また社会階層の社会学での彼ら自身の重要な調査とも関係ないものです。そのかわりに近年お二人は、その学問的関心をマックス・ウェーバーの伝統における理論的研究に集中してられました。世界に於いて最

も実地的な数量的分析者である Wesolowski と富永の二人が、インスピレーションのためにウェーバーに立ち戻ったという点で、私は魅せられたのです。それはたぶん彼らの実証的研究者としての専門知識からでもありますが、ウェーバーへのアプローチはその注釈と拡大を著しく越えたものであります。彼らはウェーバーを使っています。それは具体的な問題に対処する手だてとして、高度に想像的な方法によってです。それ故、彼らはそれゆえに、たとえどのような説教もなすことができなかったことを、社会学における国際調査の創始者としての業績が持つ、その継続的な生命力というものを示したのです。

長年にわたって、富永先生が論文を発表されるのを拝聴し、また国際会議や I S A 会議での討論、さらに社会学的理論と調査のお互いの関心についての非公式な議論など、そして私が熱心に求めている先生のアドバイスから恩恵を受けるこうした機会があったことは、私の宝でありました。私にとって富永先生は本当の専門的社会学者であり、先生は厳格な思想家であり、知的な専念者であり、また我々の学問における最高水準にコミットしてきた学者であり、さらに世界中の同僚と共にその英知と専念を共有する学者でもあります。

我々の学問におけるこのすばらしい指導者に対して、知的で個人的な恩義を証明する機会を与えられた世界の学者の中に加えていただいたことは、私の名誉とするところであります。

メルヴィン L. コーン

3. エズラ・F・ヴォーゲル
(ハーバード大学教授)

January 7, 1992

Professor Tominaga

I first met Tominaga Kenichi in the fall of 1958 soon after I arrived in Japan during my very first trip. I had known Professor Kunio Odaka and Mrs. Odaka when they were at Harvard for a year, and Professor Odaka kindly introduced me to Tominaga.

When Tominaga-san and I first met, he was translating Talcott Parsons and writing about Parsons. Since Tominaga never had a chance to study under Parsons, he was very anxious to hear from me about Professor Parsons' views.

Actually I did not begin to become a Japan specialist until after my Ph.D, and I had worked very closely with Professor Talcott Parsons as his student while I was a graduate student at Harvard from 1953-1958. I had taken his basic seminar. I had continued as a seminar participant for two more years beyond the first year, and I was a part of small study group that used to meet on Saturday morning to help Professor Parsons push forward his theories. Tominaga and I would meet almost weekly during the 21 months while I was in Japan to discuss our mutual sociological interests. He would ask me what Parsons meant by various terms and what Parsons had in mind for his basic theories, and I would in turn ask him about Japanese society.

At the time when I first knew Tominaga, Sociology at Tokyo University was divided between urban and rural studies. Professor Odaka helped organize studies of urban and industrial society and of course Tominaga worked closely with him. Fukutake Tadashi led the rural studies.

At the time there were three young assistants among the graduate students in Sociology at the Tokyo University. In addition to Tominaga there were Matubara Haruo, later a distinguished professor of the Sociology of Education and a popular television lecturer, and Watanuki Jooji, who was later to distinguish himself as a political sociologist.

Professor Tominaga remained a loyal scholar to Professor Talcott Parsons as he specialized in Sociological theory. In the United States, Professor Parsons was accused during the radical student era of being conservative in his political thought, and since that time the vision that many of us had in the 1950's for creating a truly scientific theoretical base for sociology proved to be illusion. Unfortunately society turned out to be too complex and too difficult to study in quantitative decisive way that would really answer all the big theoretical questions that Parsons and his students had raised. Nonetheless, Talcott Parsons has continued to have a tremendous impact in thinking about society. Not only did Parsons train excellent students like Robert Bellah, Neil Smelser, and Clifford Geertz, but he provided a comprehensive systematic way of thinking about society that is still of extraordinary value to sociological scholars today. I believe that Kenichi Tominaga's loyalty and dedication to the thinking of Talcott Parsons, while not uncritical, has served Tominaga very well.

Tominaga was married during the 21 months when I was first in

Japan and I had the privilege of being the only foreigner to be invited to attend the wedding. The wedding brought together not only personal family friends, but many of the leading lights in Japanese sociology of the time and many who would emerge to become the leading lights in sociology at a later time. I had the privilege of meeting Tominaga's parents and his wife and her parents and learning about Tominaga's parents' role as educators in the prefecture of Nagano, which is known for the important value that was placed on education. It is no surprise that someone with such a dedication to education should have come from Nagano.

Some years later, I had an opportunity to invite Tominaga to spend six months at Harvard as a visiting scholar. While at Harvard, Tominaga had the chance to meet Parsons, to get to know David Riesman, George Homans, Seymour Lipset, Alex Inkeles, and other sociologists who had assembled at Harvard. At the time Tominaga was accepting the leadership role in the social stratification studies that were being conducted in Japan, and he was particularly eager to work with Westerners who were doing studies of stratification that could be compared with the stratification studies being conducted by the Japan Sociological Association.

After that time, from time to time students of mine who have wanted to work in Tokyo have received the gracious hospitality of Tominaga. Tominaga has remained committed to broad studies of sociological theory. He is what Parsons himself, referring to himself, called an "incurable theorist." I myself have continued to think of broad national social systems as I had learned from Parsons, but I moved in the applied direction of trying to use that broad system to describe Japanese society as a whole and Chinese society as a whole.

Tominaga and I have continued to meet from time to time over the years and have kept in touch by correspondence and through students of mine who have benefitted from his cordial hospitality in Tokyo. I salute Tominaga as he begins his second career, as professor emeritus from Tokyo University.

Ezra F. Vogel

Henry Ford II professor of the
Social Sciences

《日本語訳》

1992年1月7日

「富永教授」

私が富永健一と初めて会ったのは、日本への初めての旅で到着した直後の1958年の秋のことでした。私は尾高邦雄教授夫妻とはお二人がハーバードに1年間滞在されたときに知り合っており、尾高教授が私を富永に紹介して下さいました。

富永さんと私が初めて会ったとき、彼はタルコット・パーソンズの翻訳とパーソンズに関する論文執筆を行っているところでした。そのときまだ富永はパーソンズの下で研究する機会がなかったので、私からパーソンズ教授の考え方を聞くことにたいへん熱心でした。

実際のところ、私が日本の専門家になろうとしはじめたのはPh.D取得後からであり、1953年から1958年間のハーバードでの院生時代には、タルコッ

ト・パーソンズ教授の学生として教授に付いて研究しました。私は彼の基礎ゼミを取り、最初の1年に続いてさらに2年、ゼミへの参加を続けました。そして、私はパーソンズ教授が自分の理論を発展させるために土曜の朝に開く小さな研究グループにも参加しました。富永と私は、私が日本にいた21ヶ月間、ほとんど毎週会って、私たちのお互いの社会的関心事を議論したものです。彼は私に、パーソンズが様々な用語をどういう意味で用いているのか、またパーソンズは自分の基礎理論についてどう考えているのかを尋ねたものです。そして私の方からは、日本の社会学と日本社会について尋ねたのでした。

私が初めて富永と会ったとき、東京大学の社会学は都市研究と農村研究とに分かれていました。尾高教授は都市社会と産業社会の研究を組織する事に尽力されており、もちろん富永は彼と緊密に協力していました。福武直は農村研究を指導されていました。

当時、東京大学の社会学の院生の中に3人の若い助手がいました。富永に加えて、後に教育社会学の著名な教授となり、またテレビの人気講師となる松原治郎、さらに政治社会学者として有名になる綿貫譲治です。

富永教授は社会学理論を専門としたときにも、タルコット・パーソンズ教授に忠実な学者として留まりました。アメリカにおいては、パーソンズ教授は急進的な学生運動の時代、彼の政治思想が保守的である、ということで告発されました。そして、そのとき以降、1950年代に私たちの多くが抱いていたヴィジョン、すなわち真に科学的な理論的基礎を社会学のために創造するというヴィジョンが、幻想であることが明らかになったのです。不幸にして社会は余りに複雑でありにも難しく、パーソンズと彼の学徒が挙げたような大きな理論的問題のすべてにきちんと答えられるように、数量的で決定的な方法で研究することはできないということがわかったのです。しかし、それにもかかわらず、タルコット・パーソンズは社会というものを考える上で、大きな影響を与え続けました。パーソンズはロバート・ベラー、ニール・スメルサー、クリフォード・ギアーツなどのすぐれた学生を訓練しただけでなく、今日の社会学にたず

さわる学者にとって、いまだに大きな価値を持つ、社会に関する総合的で体系的な思考方法を提供しました。タルコット・パーソンズ思想に対する富永健一の忠誠と献身は——それは無批判のものではないのですが——、富永にとってたいへん役に立ってきたと、私は信じています。

私が初めて日本で過ごした21ヶ月の間に富永は結婚し、私は結婚式に招待されるただ一人の外国人となる名誉を得ました。結婚式には、個人的な内輪の友人だけでなく、当時の日本の社会学における指導的人々の多く、また後に社会学の指導的人物になることになる多くの人々が集まりました。私は、富永の御両親と奥さんさらに彼女の御両親にお会いする栄誉に浴し、また長野県における、富永の御両親の教育者としての役割を知ることができました。長野県では教育が重要な価値を持つものとされており、そのように教育に対して献身的な貢献をする人が長野出身であるということは意外なことではないのです。

数年後、私は、富永を客員研究員として6ヶ月間ハーバードに招待することができました。ハーバードに滞在中、富永は、パーソンズに会い、デビッド・リースマン、ジョージ・ホマンズ、シーモア・リブセット、アレックス・インケルス、その他ハーバードに集まった社会学者達と知り合うことができました。当時、富永は、日本で行われた社会階層研究において、指導的役割を引受けており、日本社会学会が実施した階層研究と比較することができる階層研究を行っている西洋人と研究することに特に熱心でした。

それ以来、ときどき、東京で研究することを望む私の学生達を富永に親切に受けいれてもらいました。富永は、社会学理論の幅広い研究に関わり続けてきました。彼は、パーソンズが自分のことをさしていった、「不治の理論家」そのものです。私自身は、パーソンズから学んだように、大きな、国レベルの社会システムを考えることを続けてきましたが、しかし私は、この大きなシステムを、日本社会あるいは中国社会を全体として記述するのに用いることを試みるという応用的な方向に向かったのです。

富永と私は何年にもわたって、ときどき会い続けてきました。そして、手紙や彼の心からのもてなしを受けてきた私の学生を通じて、接触を持ち続けてきました。私は、東京大学名誉教授として、第二の人生を始めるにあたって、富永に敬意を表したいと思います。

エズラ F. ヴォーゲル
ヘンリー・フォード二世社会科学教授

Meine Begegnung mit Kenichi Tominaga

von Friedrich Fürstenberg

Der sechzigste Geburtstag meines langjährigen Freundes und Kollegen, Prof. Kenichi Tominaga, ist mir ein willkommener Anlaß, ihm neben meinen herzlichsten Glückwünschen auch ein besonderes Zeichen meiner Wertschätzung zu schicken. Ich tue dies vielleicht am besten, indem ich die vielen Anregungen hervorhebe, die ich durch nunmehr über ein Vierteljahrhundert persönlicher Beziehungen von ihm erhalten habe. Ich erinnere mich noch an unser erstes Zusammentreffen in Tokio Mitte der sechziger Jahre, als er noch einen Lehrauftrag in enger Zusammenarbeit mit Prof. Odaka wahrnahm. Wir stellten fest, daß wir viele gemeinsame Interessen hatten, insbesondere im Bereich der Erforschung der sozialen Mobilität und Schichtung. Während ich in meinem Buch "Das Aufstiegsproblem in der modernen Gesellschaft" versucht hatte, anhand historischer und gegenwartsbezogener Befunde eine qualitative Theorie herauszuarbeiten, ging es ihm um eine gegenwartsbezogene quantitative Analyse unter Verwendung der Grundkategorien des Strukturfunktionalismus. Unsere Gespräche waren sehr anregend, und selbstverständlich stand im Mittelpunkt die Frage, bis zu welchem Grade man Sonderentwicklungen wie die Japans und Deutschlands aus einer allgemeinen theoretischen Perspektive analysieren könnte. Dieses Thema hat Prof. Tominaga immer wieder bewegt, und es bildet sicherlich ein Grundmotiv seiner Arbeiten über den sozialen Wandel. Ich finde seinen Standpunkt höchst bemerk-

enswert, daß das moderne Japan weitaus weniger sozialstrukturelle Besonderheiten aufzuweisen hat als gemeinhin angenommen wird. Die treibenden Kräfte des Industrialisierungsprozesses wirken angleichend. Allerdings ist auch sein Hinweis sehr wichtig, daß im Falle Japans neben Verzögerungseffekten ein Dualismus zwischen Traditionalismus und Modernismus besonders ausgeprägt war, der erst durch die großen Reformen nach 1945 weitgehend abgebaut werden konnte. Ähnlich wie ich selbst hat Prof. Tominaga in wachsendem Maße auch historische Betrachtungen und Analysen in seine Forschungen einbezogen. Seine Auffassung, daß der Soziologe, insbesondere der Theoretiker des sozialen Wandels, dem Historiker den Bezugsrahmen liefert, der dessen Datensammlungen interpretierbar macht, wird von mir geteilt. So öffnet sich der Weg zu interdisziplinärer Zusammenarbeit, insbesondere mit den Sozialhistorikern.

Neben unseren Zusammenkünften in Japan während meiner dortigen Aufenthalte hatte ich die Freude, Prof. Tominaga mehrfach in Europa auch als meinen Gast begrüßen zu können. Er besuchte mich während meiner Linzer Jahre in meinem Haus, und er verbrachte einen leider nur kurzen Urlaub mit mir zusammen in Salzburg. Ich denke noch jetzt gern an den wunderschönen Tag zurück, den wir gemeinsam mit seiner Familie am Ufer des Wolfgangsees verbrachten, und der bei einem Glas Wein im Salzburger Petershof abgeschlossen wurde. Der Zufall fügte es, daß bei meiner Berufung nach Bochum dort auch Prof. Tominaga als Gastprofessor anwesend war. Er war zwar sehr beschäftigt mit dem Studium der deutschen Sprache und insbesondere der Werke Max Webers. Aber wir fanden doch Zeit für Zusammenkünfte und insbesondere einen schönen Ausflug nach Münster, wo wir neben der Besichtigung einer Grafikausstellung noch in einem Antiquariat nach alten soziologischen Büchern suchten. Ich habe es damals sehr bedauert,

daß uns kein besonderer Fund geglückt ist. Es wäre sehr schön gewesen, wenn ein Werk des von Prof. Tominaga so hoch verehrten Max Weber auffindbar gewesen wäre. Mir wurde aber damals klar, mit welchem tiefen Interesse, ja sogar persönlicher Hingabe Prof. Tominaga sich mit der deutschen Lebensweise und Kultur und auch der deutschen Soziologie vertraut gemacht hat. Er ist ein wirklicher Brückenpfeiler der transkontinentalen Verbindung, die japanischen und deutsche Sozialwissenschaften zusammenbringt. So ist es nur selbstverständlich, daß er Gründungsmitglied der Nichidoku-Shakaigaku-Gakkai wurde, von der wir uns wichtige Impulse zur Förderung des interkulturellen Dialogs erhoffen.

Prof. Tominaga ist auch ein großer Reisender, und durch seine vielfältigen internationalen Kontakte sind seine Veröffentlichungen stets aktuell und von grenzüberschreitendem Interesse. Allerdings haben diese Aktivitäten auch zur Folge, daß wir uns öfters verpaßt haben. Wenn ich nach Tokio kam, war er in Amerika oder in Europa, und ihm ging es sicherlich gelegentlich ähnlich, wenn er Zeit gehabt hätte, mich zu besuchen. Aber unsere Verbindungen rissen dadurch nicht ab. Sie vertieften sich in den letzten Jahren, und wir waren sogar so kühn, ein gemeinsames Projekt zu planen, die vergleichende Analyse der Sozialstrukturen Japans und Deutschlands. Persönliche Gründe, aber insbesondere die tiefgreifenden Veränderungen im Zusammenhang mit der Wiedervereinigung Deutschlands haben die Ausführung verzögert. Vielleicht lassen sich doch aber wenigstens einige der vielen guten Gedanken, die wir gemeinsam entwickelt haben, noch in der einen oder anderen Form realisieren. Zunächst steht aber, wie ich gehört habe, die Wirtschaftssoziologie ganz an der Spitze der Arbeitsvorhaben, die Prof. Tominaga in seinen neuen Lebensabschnitt hinübernimmt. Auch dies ist ein Bereich, dem ich mich seit meinen

ersten wissenschaftlichen Anfängen sehr verbunden fühle. Wie unser beider Lehrer und großes Vorbild Max Weber empfinden wir das Studium wirtschaftlicher Vorgänge als einen wichtigen Schlüssel zum Verständnis sozialer Prozesse in modernen Gesellschaften. Andererseits werden Sinn und Reichweite dieser Prozesse erst deutlich vor ihrem gesellschaftlichen Hintergrund. Ich wünsche Prof. Tominaga von ganzem Herzen, daß er mit seiner Arbeit gut voran kommt, und ich erwarte mit großer Neugier das, was er zu sagen hat.

Ich möchte nicht vergessen zu erwähnen, daß mir Prof. Tominaga anlässlich meines sechzigsten Geburtstags eine besondere Freude bereitet hat, indem er sich mit einem grundlegenden Aufsatz über "Modernisierung und der Wandel der Werte in Japan" an meiner Festschrift beteiligt hat. Ich werde dies schöne und bleibende Geburtstagsgeschenk stets zu würdigen wissen. Mir bleibt nun noch der aufrichtige Wunsch, der Jubilar möge mit Zuversicht und Freude den neuen Lebensabschnitt beginnen und sich wie bisher der soziologischen Forschung, auch aus interkulturell vergleichender Sicht, kreativ verbunden fühlen. Gerade die deutsche Sozialwissenschaft hat in Prof. Tominaga einen der wenigen umfassend informierten japanischen Vermittler. Wir alle können uns nur wünschen, daß er auch weiterhin in dieser Richtung wirken kann und will. Ich selbst wünsche mir darüber hinaus, recht bald noch mehr Gelegenheit zu finden, unsere immer so fruchtbaren und angenehmen Gespräche weiterzuführen und zu vertiefen.

《日本語訳》

「富永健一との出会い」

フリードリッヒ・フェルステンベルグ

私の長年にわたる友人であり同僚である富永健一教授の60回目の誕生日は、私にとって心からの祝賀を申し上げると同時に、私の彼に対する高い評価を示す絶好のきっかけとなりました。そのためには、今や4半世紀を越える彼との個人的な関係によって彼から与えられた、多くの刺激を取りあげることが、たぶんいちばんよいでしょう。私は1960年代中ごろの東京での私たちの最初の出会いのことを今でも思い出します。そのとき彼はまだ尾高教授との密接な共同研究に携わる講師でした。私たちは2人がたくさんの共通の関心事を、とりわけ社会移動と階層の研究の領域において持っていることを知りました。私が自著『現代社会において生じる諸問題』において、歴史的・現代的な調査結果によって一つの質的理論をつくりだそうと苦心していたころ、彼は構造機能主義の基礎理論を援用して現代と関連した数量的な分析に携わっていました。私たちの会話は、大変刺激的なものであり、当然ながら、興味の中心になったのは、日本やドイツなどの特殊な発展を、どの程度まで、一般理論的な視点から分析することができるのかという問題でした。この問題は、富永教授を再三にわたって動かし、彼の社会変動に関する研究の一つの基本的なモチーフとして確立したのです。近代日本には一般に考えられているよりは、はるかにわずかな社会構造上の特殊性しか見出せない、という彼の立場は、きわめて注目すべき見解です。産業化の過程を動かす力は、同化作用を持っています。ただし、日本の場合には後発効果の他にも、伝統主義と近代主義の間の二重性が特に明確に現れ、それは1945年の大改革で初めて全面的に取り払われたという彼の指摘もまた、もちろん大変重要です。私の場合と同様に、富永教授も歴史的考察や分析を自分の研究にますます多く取り入れるようになりました。社会学者、特に社会変動の理論家は、歴史家が集めたデータを解釈することのできる準拠

枠組を提供すべきである、という彼の理解には、私も賛成です。それによって、学際的な、とりわけ社会史家との共同研究への道が開けるのです。

私が日本に滞在中に出会うことと並んで、富永教授を幾たびもヨーロッパに、やはり私の客人として歓迎することができた、ということも喜ばしいことでした。彼は、私がリンツにいた時に自宅を訪問してくれて、短い間ではあったのだけれども、私と一緒にザルツブルグでの休暇を過ごしました。私は今でも、彼の家族と一緒にヴォルフガング湖のほとりで過ごし、ザルツブルグのペータースホーフでのグラスワインで締めくくった、あのすばらしい日を楽しく思い出します。また、偶然のことなのですが、私がボッフムに異動すると、そこに富永教授が客員教授として居合わせたのです。彼はドイツ語の研究、とりわけマックス・ヴェーバーの著作の研究で大変忙しくしていました。しかし、私たちは、出会う機会を見つけ、ミュンスターまで遠出をしたりもしました。ミュンスターでは絵画展を見たほか、ある古本屋で社会学の古書を捜すということもありました。そのときは掘出し物が見つけれずに大変残念でした。もし富永教授が大変尊敬するマックス・ヴェーバーの著作でも見つけられれば大変すばらしかったでしょう。しかし、そのとき分かったことは、富永教授がいかに深い興味をもって、いやそればかりか、個人的な献身をもって、ドイツ的な生活様式と文化、さらにはドイツの社会学を熟知しようとしているかということでした。彼は、日本とドイツの社会科学を引き合わせる、大陸間の結びつきの真の橋渡し役です。彼が、日独社会学会の設立メンバーであることも当然でしょう。この学会には、我々は文化を越えた対話の促進の刺激を期待しているのです。

富永教授は、また、大変な旅行家でもあります。そして、彼のさまざまな国際的な接触によって、彼の著作はいつでも現実的でありまた領域を越えた興味を呼び起こすのです。しかし、その一方で、このような活発さは私たちがときどき行き違いになってしまうという結果をももたらします。私が東京にきたとき、彼はアメリカやヨーロッパにいてということがありましたし、また彼が私を訪ねる時間があつた時にも同じ様なことがきつときどきあつたでしょう。しかし、我々の結び付きはそれによって引き裂かれることはありません。

我々の関係は、近年深まっております、それどころか思い切って、ドイツと日本の社会構造の比較分析の共同研究のプロジェクトを立案したりもしたのです。個人的な事情や、とりわけドイツの統合に関連する根本的な変化によって、その実施は遅れています。しかし、多分、私たちが一緒に発展させたたくさんのおもしろいアイデアの少なくともいくつかは、何らかの形で実現するでしょう。しかし、私の聞くところでは、富永教授が新しい人生で取りかかる仕事の計画のトップには経済社会学があるようです。この領域も、私が学問を始めた当初から大いにこだわりを持っている領域です。私たち二人の教師にして、偉大な模範であるマックス・ヴェーバーと同様、私たちも、経済的な出来事を、近代社会における社会過程の理解にとっての重要な鍵となるものと認識しています。他方、この過程の意味と到達距離はその社会的背景によって初めて明らかになるのです。私は富永教授が研究を順調に進めることを心から願い、また彼がどのようなことを述べるのかを大きな好奇心をもって待ち受けたと思います。

富永教授が、私の60回目の誕生日に際して、記念論文集に、「日本における近代化と価値変容」という根本的な論文を寄稿して、私を喜ばしてくれたことに触れるのを、忘れるわけにはいきません。私はこのすばらしく、かわることのない誕生日のプレゼントが、いつまでも価値を持ち続けることを知るでしょう。今や残されたことは私の心からの願いを述べるだけです。すなわち、祝賀を受ける人が、自信と喜びをもって、新しい人生の門出を始められ、いままでどおり、社会学の研究に、それも比較文化の視点から、創造的にたずさわっていかれることを望みます。現在ドイツの社会科学には富永教授という、広範な知識をもつ数少ない日本人の仲介者がいます。私たちは皆、彼が今後もこの方向に働くことが可能であり、またその意志を持っていることを望んでいます。私個人としては、さらに、私たちが実り多く楽しい会話を継続し深めていくチャンス、まもなく、またより多く、見いだせることを望んでいます。

5. 董興華

(中国 瀋陽市)

市職員
人民解放軍のレーン

一九八七年落瑛缤纷的时节，富永健一先生来南开大学讲学，当时我正在南开大学社会学系读研究生，因为我的日文比较好，所以，在一个多月的时间里，一直担任他的译员。可以说，富永先生讲的课我听得最仔细，这不仅是为了完整准备地翻译，更重要的是他所讲授的学问深深地吸引了我。为了更好地学习和介绍先生的理论，我自告奋勇，将先生当时的新著《社会结构和社会变迁》译成中文，一年后，与中国读者见了面。同时，我根据与先生单独长谈，写了一篇题为“富永健一的学术生涯”的文章，在南开大学《社会学与现代化》上发表。一九八九年，我又积极斡旋，促成了先生在辽宁社会科学院和沈阳师范学院的讲学，再在一次当了先生讲学的助手。

在与先生相处的过程中，我们结下了很深的感情，对于先生，我们是十分敬佩的。我们尊敬他对中国社会学界，对南开大学，对中国学生的满腔热诚；尊敬他勤勤恳恳，诲人不倦的师德；尊敬他严谨，深刻的治学风格。我体会最深的，还是先生把东西方的学问融汇贯通的本领。在中国的近代，最受欢迎的，是那些对西学东学都十分精通，善于吸取西学之精华，用以解决东方问题的学者，人们称他们“学贯东西”。我想，先生正是这样的师表。

先生常说，科学是普遍性的概念和普遍性的命题构成的，但是，东方社会所面临的问题并不同于西方社会正面临的问题，而且，也不同于西方社会曾经遇到过的问题。所以，为解决东方社会所面临的问题服务的社会学理论，必须在东反人的头脑产生出来。正是基于这样的认识，先生始终致力于东学与西学的结合，以批评的精神，研究并活用产生于西方的社会学，努力构筑合于非西方社会的社会学理论。纵观先生的学术生涯，甚至可以说，他三十多年来所从事的，就是把社会学理论日本化或东方化的工作。

要做到学贯东西，当然需要有深厚的西学造诣。富永先生对西方理论的研究，可谓博大精深。这一点，在他所有的著作中，特别是《现代西方社会科学家》一书中，可以看得十分清楚。但他并不机械地搬用西方的理论。而是从日本社会的实际出发，在自己的头脑中“过滤”它，重新组织它，将它改造成为分析非西方后发社会现代

化的有用工具。在这方面，先生的工作是卓有成就的。他对日本社会现代化的进程，现代化过程中的诸种社会问题十分关心，为此，他运用马克思·韦伯，帕森斯等人的理论框架，并通过大量的实证研究，达到了对日本社会结构的清晰认识，通过与西方社会结构及其变迁过程的比较，提出了一系列有关日本发展问题的很有价值的命题。首先，他打破了“唯有西方社会才能实现现代化”的论断；第二，他指出了东方社会，首先实日本要实现现代化而必须解决的特殊矛盾及特殊的发展模式；第三，他指出了日本在实现现代化的内在优势，以及其他非西方的，后发社会发挥自己的优势赶超西方的可能性。这些，在西方人的社会学理论中是很少的，对马克思·韦伯也是一种批判。它对于目前正在努力实现现代化的东方国家是十分重要的启示。富永先生的这些研究成果不仅使社会学理论更有东方的特色，而且给比较消极的结构—功能主义注入了积极的活力。

一九八四年，富永先生第一次到中国讲学，这次中国之行，给他留下了极为强烈的印象。他说，“在这片国土上，我仿佛看到了高度经济成长前夕的日本。这重新唤回了我的‘亚洲人之魂’，使我产生进行中日比较的强烈愿望。中国是占世界人口四分之一的大国，不了解中国就无法谈论世界问题”。回国以后，他以极大的热情搜集有关中国的资料，潜心加以研究，并迅速取得了成果。他在《社会结构与社会变迁》一书中专设了三章，比较中国与日本的社会结构以及现代化的条件和特点。在这一比较分析中，他把西方的社会学理论与东方的学者如福武直，费孝通，孙本文等的理论结合起来，成了研究中国现代化的有力工具。从而对中国的现代化提出许多富有建设性的意见。

对于学生，富永先生总是教导他们要既吸取西方理论的精华，又积极发掘本国社会学以及社会思想的遗产。在南开讲学期间，一些中国学生对西方的理论很崇拜，所学的东西基本都是美国的。富永先生风趣地说，南开的社会学系美国化了。他说，中国的社会学中断了一断时间，向外国学习是必要的，但是这门课应该尽快结业，努力去研究中国的社会学。先生的这些话是语重心长的。我相信，学贯东西，既是他的治学之路，也是我们中国青年一代学者的成功之路。

富永健一先生之所以能学贯东西，是因为他又一颗“亚洲人之魂”，所以他属于日本，也属于中国，属于亚洲。

最后，我还要借此机会，对富永先生给予我的教诲和帮助，致以最诚挚的感谢！师恩没齿不忘！

《日本語訳》

「東西の学問に精通された」代表的人物

1987年も新緑の頃、富永健一先生が南開大学に講義に来られた。当時私は同大学の社会学部の大学院生であったが、日本語が比較的できるというので、一ヶ月余り先生の通訳を務めさせて頂いた。また先生の講義も熱心に聞かせて頂いた。それは単に完全な通訳を行うためだけではない。先生の講義される学問を真剣に吸収しようと努めたためである。そして先生の理論を吸収・紹介しようと、私は当時先生の新著であった『社会構造と社会変動』の中国語訳に着手したが、この本は一年後、中国人読者にお目見えすることになった。また、先生との単独インタビューを踏まえて、「富永健一の学問とその生涯」と題する文章を、南開大学の『社会学と近代化』誌に発表した。1988年には、先生が遼寧省社会科学院及び瀋陽師範学院で講演する際のプロモーター役を務め、同時に講演のお手伝いをさせて頂いた。

このような先生とのお付き合いの過程で、私たちは先生のお人柄に大きな感銘を受け、感服の情を抱くことになった。先生は、中国の社会学界、南開大学及び中国人学生に対して、実に誠実であったし、謹厳実直で人を教え導いて飽きないお人柄であった。また厳格で奥深い学風は、私たちの尊敬の的であった。とりわけ私にとって印象深かったのは、先生が東洋と西洋の学問に精通しておられた点である。中国の近代において最も歓迎されたのは、西洋と東洋の学問の双方に造詣が深く、西洋の学問の成果を巧みに吸収し、東洋の問題を解釈・解決する際に利用することのできる学者であったが、このような学者は「東西の学問に精通している」と形容された。その意味で先生は、まさに「東西の学問に精通して」おられたのである。

先生は常々、科学は普遍的な概念と普遍的な命題とによって構成されているとおっしゃっていたが、東洋社会の直面している問題は西洋社会の直面している問題とは必ずしも同じではないし、西洋社会がかつて直面した問題とも必ずしも同じではない。従って、東洋社会の直面する問題を解決する社会学理論は、

東洋人が自らの頭の中で作り上げたものでなければならない。まさにこのような認識に基づいて、先生は始終、東洋の学問と西洋の学問の結合に尽力され、批判的精神をもって、西洋で生まれた社会学を研究・活用し、非西洋社会の社会学理論を構築しようと努力されてこられた。先生の研究人生を振り返ってみると、三十年来従事されてこられたのは、社会学理論の日本化あるいは東洋化の作業であったようにも思われる。

「東西の学問に精通する」ためには、当然西洋の学問に対しても相当造詣を深めなければならないが、富永先生の西洋の理論に関する研究は多岐に渡っており、数量的に見ても大変に多い。この点については、先生の著作の中でもとりわけ『現代の社会学者』に見て取ることができる。しかし先生は、単に西洋の理論を機械的に応用されたのではない。先生は、日本社会の現実から出発し、自らの頭で「濾過」し、再組織化し、非西洋後発社会の近代化にも応用できるよう改造された。この点における先生の功績には大きなものがある。また先生は日本社会の近代化過程における様々な社会問題に大きな関心を抱き、マックス・ヴェーバーやパーソンズなどの理論モデルを用いて、あるいはまた大量の実証研究を通じて、日本の社会構造に対する認識を深められ、西洋の社会構造及びその変動過程との比較を通じて、日本社会の発展に関する価値ある命題を提示された。まず先生は、「西洋社会の存在があって初めて近代化が実現できる」といった謬見を論破された。第二に先生は、東洋社会、わけても日本が近代化を実現する際に解決しなければならない特殊な事情を指摘し、その個別の発展モデルを提示された。第三に先生は、日本が近代化を実現するに際して有利に作用した内在的要因、及びその非西洋後発社会が自らの特長を生かし、西洋を越える可能性を示唆された。これらは、西洋人の社会学理論の中でも類例がないものである。またマックス・ヴェーバーに対しても批判を行っているが、これは現在近代化の努力を行っている東洋の諸国家に大きな示唆を与えている。しかも富永先生の研究成果は、社会学理論に東洋的な特長を付加させているばかりではなく、構造-機能主義に対して新しい活力を与えている。

1984年、富永先生は初めて中国に講義に来られたが、この時の中国旅行は、先生に強烈な印象を残したようである。事実先生は、「この国は、私に高度経済成長以前の日本の姿を思いださせ、私の内にある『アジアの精神』を思い起

こさせた。そしてこれにより私は、日本と中国の比較を真剣に行いたいと思うようになった。中国は世界人口の四分の一を占める大国であり、中国を理解せずして世界の問題を論ずることはできない」と述べておられる。帰国後、先生は大変熱心に中国に関する資料を収集され、研究に専念された。そしてその成果を素早くまとめられた。事実先生は『社会構造と社会変動』の中で三つの章を設け、中国と日本の社会構造及び近代化の条件と特徴について比較されている。そして比較に際して、西洋の社会学理論と、福武直や費孝通、孫本文といった東洋の学者による理論を統合し、中国近代化を研究する有力な道具を生み出された。また中国の近代化に対しても多くの建設的な意見を提示された。

学生に対しては、富永先生は多くの場合、西洋の学べき理論を吸収すると同時に、自国の社会学及び社会思想の遺産を積極的に発掘するよう指導された。南開大学で講義をされた際、一部の中国人学生は西洋の理論を崇拜し、学習の対象がすべてアメリカの社会学であるといった状況にあったが、これに対し先生は、ユーモアたっぷりに、南開大学の社会学部はアメリカ化してしまったとおっしゃったことがある。先生は、中国の社会学は一時中断していたのだから外国から学ぶことは必要なことであるとはいえ、このようなことはできるだけ早くやめて、中国の社会学を研究するようにならねばならない、と話されたのである。先生のこのお言葉には、大変意味深いものがある。私は、「東西の学問に精通する」ことが、先生の学風であると同時に、私たち中国人青年の学者にとってもまた、成功の道であると信じている。

富永先生が「東西の学問に精通する」ことができたのは、先生が「アジア人の精神」を持っておられるからであって、その意味で先生は、日本、中国、及びアジアに属しておられる。

最後にこの機会をお借りして、富永先生が私にくださった学恩並びに援助に対して、深甚なる感謝の意を表したい。ありがとうございました。

6. 廬 鳴
(中国国家計画委員会)

1984年11月初,我考取南开大学社会学系研究生后不久,有幸认识了日本东京大学社会学教授富永健一先生。当时我国的社会学伴随着改革开放正在重新恢复之中,迫切需要了解国外社会学的发展状况,研究和借鉴其他国家有关社会学理论和实践的成果。为此,南开大学社会学系积极创造条件,先后邀请了美国,日本,南斯拉夫等国的社会学学者来为研究生讲学。富永先生应邀前来为我们84级讲授经济社会学时,学校派我去迎接他和随行的园田茂人君到天津,由此开始了相互之间的交往。在后来的几年里,我又次见到富永先生,并同他一直保持着通信联系。他在社会学学术上造诣颇深,他的治学精神和为人更令我难忘。

七年前,富永先生在南开大学讲学历时五十余天。这段时间对他来说,是相当紧张的。由于他是日本著名的社会学教授,教学和研究工作繁忙,手上工作告一段落后即起程来中国,在此之前没有充裕的时间准备讲稿,因而到南开大学后只能是一边备课一边讲学。再加上他又是第一次来中国讲学,对我们学生的情况还不熟悉,更增大了讲学的难度。尽管如此,富永先生来到南开大学后,即与社会学系主任苏驼先生和负责安排讲学的苏永和先生商定了讲学日程表,每周授课十二小时左右,力求多讲一些,把经济社会学原理讲得一些。而这样一来,他在讲学期间非常辛苦,差不多每天都是上午讲课,下午外出参观,晚上除去参加校方安排的活动外,总是在伏案写作,研究,修改他的讲课稿,常常工作到半夜才休息。为了便于我们理解授课内容,他还提前写出每一次讲课的要点,由翻译译成中文,复印后给每个学生。就这样,在不到两个月的时间里,富永先生全面,系统地为我们讲授了经济社会学的基本理论和研究方法,还向我们介绍了他对中国现代化问题的一些研究成果。聆听他的讲学,使我们充实了专业知识,开阔了视野,同时也深深感受到他是一位不辞辛苦,兢兢业业,诲人不倦的学者。这次讲学结束前,南开大学举行了聘请富永先生为客座教授的仪式。那一天,当南开大学校长,经济学教授滕维藻先生将聘书授与这位学识渊博,精心施教的日本教授时,热烈的掌声表达了我 and 同学们对他的

敬意。

在我和我的同学眼里,富永先生既是令人尊敬的著名学者,同时又是和蔼可亲的长者。他在给我们讲学期间,经常利用空闲时间同我们学生进行交谈,了解有关中国的情况和同学们的经历,共同讨论中国现代化等问题。当同学们介绍情况或陈述看法时,他总是十分认真地边听边记。据我所知,他后来两次到南开大学讲学时也是如此。由于富永先生平易近人,我们大家都愿意与他相处。同学中经常有人在教室里或到他的住处向他请教,有时就某个问题讨论起来,气氛也是轻松愉快的,不曾有谁因为他是知名学者而感到过拘束。虽然富永先生给我们讲学只有短短的五十天,彼此之间却建立了亲密的师生关系。他回国后,托人带来了他与每个同学的合影照片,还在NHK电视台介绍中国社会学的节目中特别提到了我们这些学生的情况,并将录象带寄到南开大学社会学系。几年来,我和几个同学曾先后到过东京,在那里受到了他的热情接待。南开大学社会学的一些同学也多次在我国有关刊物上介绍他的著作和文章,并就学术问题向他写信求教。

富永先生很关心,爱护青年人,在这一点上我的感受特别深。我从南开大学毕业后回到北京,进入政府部门工作。他得知我的工作情况后,两次把有关书籍赠送给我,对我的帮助很大。我在东京研修期间,有一次去东京大学拜访他,向他谈起关于中国传统文化的评价问题。当时他十分严肃地对我说,从世界范围来看,中国文化历史悠久,有许多宝贵的精华,日本是学习了中国文化后发展起来的,我通过研究看出中国是很有希望和前途的,现在中国的青年一代不应笼统地看待自己民族的文化。他还举出例子作了比较分析。这一番话,对我更加客观地看到自己的国家和自己民族的文化是非常有益的。富永先生在1987年元旦前寄来的贺年卡上写道:“十九世纪是西方人领先于世界,东方人在二十世纪中已逐渐赶上了,二十一世纪将成为西方人和东方人齐头并进的时代”。我珍藏这张对青年人充满希望和鼓励的贺年卡,经常用它来鞭策自己,朝着更加美好的二十一世纪奋发努力。

在富永先生即将卸去东京大学的教职之际,谨以这篇短文表达我对他的崇敬和爱戴之心。

「尊敬すべき学者であり、親しみ深い有徳者」

1984年11月初旬、私が南開大学社会学部の大学院生になって程なく、幸運にも東京大学の社会学教授である富永健一先生と面識を持つようになった。当時中国の社会学は、開放・改革に伴って復活の過程にあった。そして外国の社会学の発展状況を知り、その他の国々の社会学理論及び実践の成果を、研究・租借する必要に迫られていた。それゆえ、南開大学は積極的に条件を整え、前後してアメリカや日本、ユーゴスラビアなどの国の社会学者を招聘した。そして彼らに大学院生のための講義を担当させた。富永先生が私たちの84年クラスを対象に経済社会学を講義されるにあたり、学校は先生と随行の園田茂人君を天津に迎えに私を派遣したのであるが、先生とのお付き合いが始まったのはその時からである。数年ののち、再び富永先生とお会いする機会に恵まれたが、その間連絡だけは欠かさなかった。先生は社会学に造詣が深く、その学風と人格を私は忘れることができない。

7年前、富永先生が南開大学で講義をされたのは50日余りであったが、この時期、先生は大変お忙しかった。先生が日本を代表する社会学の教授であり、授業や研究にお忙しいこともあって、仕事が一段落ついてすぐに中国にいられた。従って講義ノートを準備する十分な時間がなく、南開大学にいられてからは、ノートを作成しては講義をされることに専心されていたのである。加えて、初めての中国での講義ということもあり、私たち学生の状況をつかみかねているご様子で、それゆえ講義はより難しいものとなった。とはいえ、先生は南開大学にいられてからというものの、社会学部主任の蘇駝先生、講義編成担当の蘇永先生、それに先生が加わって講義日程をお決めになり、毎週12時間前後の時間を使って、経済社会学の原理についてできるだけ多くお話になった。こんなわけで、先生が講義をされている期間は大変ハードなスケジュールとなった。ほぼ毎日午前中に講義をされ、午後には参観に出かけられる。夕方は、学校が決めたスケジュールに参加する以外は、だいたい著作の構想を練ったり、研究

したり、講義ノートを整理したりと、夜遅く床に就くのもしばしばといった有様だった。先生は、私たちの理解を助けるためにと、毎回講義の際に要綱を作成され、これを中国語に翻訳して学生にそのコピーを渡されていた。こうして、二カ月弱のうちに、富永先生は私たちのために経済社会学の基本的な理論及び研究方法について、全面的・系統的に講義され、また中国の近代化に対する先生の研究成果を紹介されたのである。先生の講義を受け、私たちは専門知識を獲得し視野を広げることができたが、同時に先生が苦勞を物ともされずに刻苦勉励する、人を教え導いて飽きない学者であることを痛感した。講義が終了する前、南開大学は先生に客員教授として任命する儀式を挙行了したが、その当日、南開大学の校長で経済学教授の滕維藻先生が、学識経験豊かで授業に細心の心配りをされる日本の教授に任命書を授与すると、大きな歓声が沸き上がった。これが私ならびに私の同級生たちの先生に対する気持ちを表している。

私や私の同級生の目には、富永先生は尊敬に値する有名な学者であると同時に、親しみやすい有徳者に映った。講義期間中、先生は暇な時間を見つけては私たち学生と雑談をし、中国の状況や同級生の経歴などについて理解し、一緒に中国の近代化などの問題について討論された。同級生が事情を説明したり、自分の考え方を述べる際には、先生はよく熱心に耳を傾けられ、メモをとられた。私の知るところでは、先生が後に二度南開大学に講義にいられた際にも同様であったという。富永先生が近づき易いお人柄のため、私たちみんなは先生と交流を深めたいと思っていた。同級生の中には、教室や先生の住んでおられる所まで出向いて教えを請うものもいたし、ある時などは、ある問題をめぐって議論が沸騰しても、雰囲気は重苦しくなくむしろ愉快なくらいで、先生が有名人であるから緊張するといった者などいないほどであった。富永先生が私たちに講義された期間はわずか50日ほどにすぎないけれど、この間親密な師弟関係を結ぶことができた。帰国されてからも、先生は個々の学生と一緒に撮影された写真を人に託されたり、またNHKで中国の社会学について紹介した番組では特別に学生の状況を紹介されたが、これが収録されたテープを南開大学の社会学部に郵送されたりした。数年来、私及び数人の同級生は前後して東京を訪問したが、そこでも先生の歓待を受けた。南開大学社会学部の同級生の一部は、数度にわたり先生の著作や文章を雑誌に紹介しているし、就学上の問題

で先生に教えを求めて手紙を出したものの者さえる。

先生は青年のことをとても気に留め、気をかけておられる。この点に関して、私には特別の感慨がある。南開大学を卒業した後、私は北京で政府関係の仕事に就いたのであるが、先生は私の仕事をお知りになると、二度にわたって関連書籍を私にくださった。これは私にとって大きな助けとなった。また東京での研修期間中、私は一度東京大学を訪問したことがあるが、その際先生と中国の伝統文化に対する評価についてお話をしたことがある。先生は大変厳粛な面もちで、次のように話された。世界を見回しても、中国ほど歴史が長く、貴重な財産を持っているところはない。日本も中国文化を学んで発展したのであり、研究を通じてわかったことは、中国には前途も希望もあるということである。今の中国の青年は、自分の国家や文化をいい加減に見てはならない、と。また例を出して、[日本と中国の] 比較分析もされたが、このお話は、自分の国家及び民族の文化を客観的に見ることが重要であることを再認識させてくれた。富永先生は、1987年の元旦前に送られた年賀状に次のような文章を書かれている。「19世紀は西洋人が世界を引っ張ったが、東洋人は20世紀の中葉になって台頭してきた。21世紀は、西洋人と東洋人が共に歩んで行く時代になるであろう」。私は青年に希望と激励を与えてくれるこの年賀状を家宝としている。そしてこれを読んでは、自らを鞭うち、よりよき21世紀を作るよう努力する気持ちを喚起させている。

富永先生が東京大学を退官するにあたり、以上のような駄文をもって私の先生に対する敬愛の情を表現した次第である。

V. 戦後日本社会学の発展を かえりみて

富永健一

1. 東大で過ごした日々

私は1950（昭和25）年4月に駒場の東大教養学部に入學し、2年後に本郷キャンパスの文学部社会学科に進學し、それ以来、まもなく定年退職する1992（平成4）年3月まで、ずっとこの本郷キャンパスで、まず学生として、つぎに大学院生として、それから助手として、さらに専任講師として、助教授として、最後に教授として、過ごしてきた。入学から定年までを通算すると42年、本郷キャンパスにいた期間で数えるとちょうど40年、助手として月給をもらうようになってからだと32年半、そうして教壇に立つようになってからだとちょうど30年ということになる。この間、非常勤としてはずいぶんあちこちの大学の教壇に立ったし、海外の大学や研究所への滞在が通算すると5年と2ヶ月ほどある（アメリカに3回で計2年、西ドイツに2回で計1年8ヶ月、オーストラリアに1回で1年、中国に3回で計半年）けれども、専任としては終始東大にご厄介になってきたのである。大学紛争の当時は東大の教師は「諸悪の根源」として学生から最も憎まれた存在であったし、また当時の共闘派の学生・院生に言わせれば、私のように実力のないものがこんなに長く東大のポストを占めてきたのはまことにけしからんことであるということになるであろう。しかし定年とともに、それらすべてのことがもうまもなく終わりを告げる。

東大の教壇にはじめて立った時のことは、今でも昨日のことのように覚えている。東大における最初の年の講義に私が掲げた講義題目は「産業社会学と労働経済学」というもので、これは産業ないし労働の分野に領域を限定して、経済と社会とを統合的にとらえようとするものであった。気がついてみるとこの主題は、東大における最後の年の講義題目として私が掲げた「経済と社会」という題目の、いわば限定版なのであった。つまり結果としてみると、30年かかって、私は「経済と社会」を見る視野を、産業・労働という限定的な考察から、領域を限定しない経済一般と社会一般との関連を分析するという方向に広げてきた、ということになる。といってももちろん、30年前に講義したものと、今年講義したことが直接につながっているというわけではなく、この間に私は、近代化・産業化についての研究や、社会階層の実証分析や、社会学原

理論の構築などを遍歴して、気がついてみたらここにたどりついていたのであった。

30年前に私は、開講の辞として、私にとっての愛読書の一つであるアダム・スミスの『道徳感情の理論』の話をして、スミスのいう共感（シンパシー）の原理が、のちにミードが「他者の役割をとる」と表現したシンボリック相互行為の原理とあい通じると述べたのであった。シンボリック相互行為主義という語がアメリカでやっとでかかっていたころ、しかし日本ではまだ誰もそんなことをいっていなかったころのことである。これが1962（昭和37）年4月のことであるが、当時私は大学院を4年半、助手を2年半やっただけの、まだ30歳の若輩であった。その時までに、東京女子大学で非常勤講師として社会調査法の講義をもたせてもらっていたとはいえ、東大で通年講義とゼミを担当することは、当時の私にはまことに重すぎる荷であった。その時学生として私の講義を聞いてくれた人たちと私の年齢差は10歳あるかないかで、だから私は教室で受講生たちから絶えず心理的に圧迫感を受け、自分の話していることがレベルの低いつまらないことなのではないか、学生から見て魅力がないのではないか、という強迫観念に駆られていたのであった。質問されたら立ち往生するのではないかという恐怖感も、大きかった。だから1回の講義が無事に終わると、私は自分の緊張をほぐし、自分で自分を祝うため、1人で——教師というものは孤独である——当時の月収では高すぎるような寿司の昼食を、正門前の「喜寿司」に食べにいったりしたものだ。

しかし、私にとって何よりしあわせだったことに、この時に私の講義を聞いてくれた学生諸君は明るく、楽しく、陽気で、闊達であった。第1回の講義の時、当時の4年生——彼らはその少し前まで助手であった私と、仲間のようにつきあってくれた——のリーダー格の中に機知のある人がいて、1人の女子学生を立てて花束贈呈をしてくれ、あわせて「冷や汗拭き」と称するタオルのハンカチを贈ってくれた。こうしたことが、どのくらい私をしあわせな気持ちにしてくれたかわからない。この人たちは、現在ではもう50年輩に達し、各方面で管理職につき、ときどき私を会合やゴルフなどに招いてくれる。当時の彼らは、若い教師の私が、まだ実力のない、未熟な、しかし精いっぱい頑張っているのを、意地悪したりからかったりしないで、好意をもってサポートしてく

れたのである。大学紛争に先行すること6年、文字どおり古き良き時代であった。それに、若いということはトクなことで、未熟さは許されたし、それどころか未熟ささえ新鮮感をもって迎えてもらえたのであった。

それからの30年はあっという間にたってしまったので、私はそれが長かったという気持ちはまるでもっていない。いつも何かに追われながら夢中で過ごした30年、というのが偽りのない気持ちである。ということは、基本的に、しあわせであったということだろう。ただ絶対に否定することができないのは、気がついてみると自分がすっかり年をとってしまっていた、というあたりまえの事実である。もはや先が長くないことは明らかなのだから、私はいまさらジタバタするのはやめて、悟りの境地に達するべきなのだが、それができないで、まだあれも本にまとめたい、これも書いておきたいなどと、今までできなかったことをこれからやりたいと欲張っている。私のそういう気持ちを、私がアメリカ滞在時に見た3枚の絵に託して述べてみたい。

私は講義や国際会議などでヨーロッパやアメリカの多くの諸都市を訪ねる機会に恵まれたので、各地の美術館にかなり熱心にかよった。私には絵の才能はなく、また絵がわかるといえるほどの知識ももっていないが、母方の叔父・池辺一郎が洋画家で、彼のアトリエに小さい時から出没していたので、絵に親しんできたとはいえるであろう。ところでここで私が述べようとするのは、美術史の本にでてくるような巨匠の絵のことではなく、私が1983年に、ワシントンDC郊外のベセスダにある国立精神衛生研究所の中の社会学研究室に、メルヴィン・コーンさんによって招かれて3ヶ月ほど滞在したとき、ある休日にたまたまスミスソニアン・インスティテューションの国立美術館で見た、名前を聞いたこともないあるアメリカの画家の、大きなしかし拙劣な絵のことである。

その絵は3点セットになっていて、3つとも同じ川で同じボートを漕いでいる男を描いている。第1の絵は「青年」と題されていて、行く手には黄金の城が望まれ、漕ぎ手は順風満帆でこの黄金の城をめざして船を進めている。第2の絵は「壮年」と題されており、漕ぎ手は逆巻く怒涛に立ち向かい、船は大揺れに揺れ、行く手の黄金の城はすでに消えている。第3の絵は「老年」と題され、水は静かで、漕ぎ手はもはや何もしないで手を休め、船は止まっている。当時50歳台の始めであった私は、この絵に、絵そのものは拙劣であったにも

かわらず、強く印象づけられたのであった。印象づけられたというより、身につまされて悲しくなったというほうが正直であろう。私はこの絵が、私のそれまでの人生経験をみごとにテーマ化していることに、感銘したのである。

私にとっての川とボートは、学生の時に駒場から本郷へ進学してきて以来今日まで、通算40年のあいだいつづけた東大社会学研究室のある、古びたネオ・ゴシックの建物である。そして私は、30歳台くらいまでは、周囲の好意ある目に守られつつ、前途に黄金の城があるように錯覚し、順風満帆のように見えた自分をしあわせだと感じることもできたのであった。しかし、それからまもなく私の悪戦苦闘が始まった。私を好意ある目で支持して下さっていた私にとっての恩師の先生方とその世代の先輩がたは、しだいに引退され、あるいは亡くなっていかれた。私の同世代者と後輩たちは、私に対してきびしい戦いを挑んできた。私は逆巻く怒涛に立ち向かったが、船は大揺れに揺れてなかなか進まず、たえずひっくり返りそうになったというより、じっさい何度もほんとうにひっくり返ったのであった。そして現在、老年に近づいた私は、あの絵のように静かに満足して、漕ぐ手を休めていることができない。そうではなく、私は、壮年期に思うように進めることのできなかった船を、今になって未練がましく進めようとして、悪戦苦闘しているのである。

東大の中でのしあわせに見えた初期の教師生活が決定的に終わってしまったのは、大学紛争によってであった。私がアメリカのイリノイ大学に1年とハーバート大学に半年招いてもらって出かけたのは1968年2月のことであったが、「東大紛争」の火種になった医学部の事件はそこそこおこりかけてはいたけれども、まさかそれが全学的な規模に広がるとは予想もつかなかった。「安田磐」の戦争のことは、遅れてアメリカに送られてくる日本の新聞で断片的に知ったが、1969年の8月末に帰国して、東大が地獄絵になっているのを実際に見たときの衝撃は大きかった。帰国した翌日、正常ならまだ夏休みの時期だったが、私は東大文学部に駆けつけた。そこに展開していたのは、当時の学部長堀米庸三先生（西洋中世史）が、「1大」教室（当時はまだ36番教室と呼ばれていたかも知れない）で学生の怒号にさらされて、ひたすら耐えている姿であった。教室の壁も廊下の壁も、ただもう過激な言葉の落書きでいっぱい、それらはたとえば「岩崎を全裸にしろ」——岩崎とはその前の学部長岩崎

勉先生（哲学）——などといった調子のものであった。

これにつづく秋の学期中、東大文学部の全教授会メンバーは、まさに惨憺たる体験をしなければならなかった。この「文学部紛争」の2ヶ月間、われわれ教員は毎朝6時半までに弁当持参で出勤して、ガラスがほとんど全部割られて廃虚ようになったビルの中に入り、黒い鉄扉を開めて7時になるのを待つのであった。7時、正門の扉が開くと同時に、「革マル」のヘルメットで武装した全共闘派の学生集団が銀杏並木に入ってくる。同時刻に、「民青」のヘルメットで武装した授業再開派の学生集団が、道を隔てて隣にある農学部キャンパスの門から入って、歩道橋を渡ってやはり銀杏並木に入ってくる。両派は激しく石を投げあい、瞬間怯んだほうが退却する。授業再開派が勝ったら、われわれは内側からギギーッと鉄扉を開けて彼らを迎え入れ、またギギーッと鉄扉を閉めるのだ（授業再開派が負けたら、その日は授業はない）。それから一日、長いカンヅメ授業が始まる。銀杏並木は、再度、全共闘派の学生集団によって占拠される。下から石を投げられて、2階・3階で授業を受けている最中に負傷した学生もいた。夕方5時になると、全共闘派の学生集団は銀杏並木からいなくなり、一日が終わる。

われわれ教師にとって唯一の救いは、授業そのものは紛争前と同じようになごやかに行なわれたことであった。しかしこのとき私は、一つの重要な発見をした。カンヅメ授業で外に出られない学生たちは、教室のなかで、ちょうど私たちの世代が小学校でやっていたように、あちこちの机に折り重なって、マンガ雑誌を囲い読みしていた。もっともこの当時はまだ、大学生協書籍部にマンガは置いてなかった。しかし、生協でマンガが売られるようになるのは時間の問題にすぎなかった。ジーンズが若い人たちのあいだに定着しはじめたのも、このころからである。全共闘世代はちょうど、世にいう「団塊の世代」に相当する（いまこの世代は、大企業や官庁で課長クラスになっている）。私がいわゆる「世代ギャップ」を意識しはじめたのと、大学紛争経験とは、まさに重なっていた。

当時東大文学部の名物事務長であった尾崎盛光氏は、上述の岩崎学部長や堀米学部長を助けながら、東大紛争の被害を最も激しく被った1人であった。この3人が3人とも紛争後まもなく亡くなられたのは、心身両面にわたる紛争時

の労苦と無関係ではなかっただろう。尾崎さんが癌で亡くなられたあと死後出版されたエッセイ集『自由とひげと若者と』（リクルート出版部、1971）を読むと、若い頃の尾崎さんがどんなに学生を愛したか、また学生たちがどんなに尾崎さんを慕っていたかがよく分かる。若い時の尾崎さんは、たった1間のアパート暮らしの貧乏の中で、自宅を解放して学生たちに奥さんの作った肉料理とウィスキーをふるまい、彼らと語ることを生きがいとしていた。のちに大新聞の支局長になったある学生は、アルバイト先の都合で金が貰えなくて無一文になり、空腹を抱えて尾崎さんの家に一食の恩義を受けに来たが、尾崎さん一家が外出していたので、アパートの階段にうずくまって半日待っていたという。その尾崎さんが東大紛争後まもなく東大を辞めたのは、紛争を体験したことによって、若い時あんなに愛した学生たちと、いまや親しむ気持ちを失ったからであった。

尾崎さんのこの気持ちを、私はよく分かるような気がする。文学部紛争の最中に、銀杏並木で見ず知らずの学生に殴られ、戦前に治安維持法ができたのはお前の責任だ式のめっちゃめっちゃな論法で「怒り」をおつけられて、私は怒るというより、本当にあきれてしまった。戦後生まれのこの学生は、治安維持法のことを本で読んで、腹をたてたのだろう。それはよいが、いったいなぜ、そのために私が彼に殴られなければならないのか？ 紛争学生たちは、いったい何を、誰に向かって攻撃していたのだろうか？ わけのわからない狂気が、東大全体を覆っていた。こういう経験が続いたため、それ以前のように学生を仲間と思い、夏は水泳や登山に、冬はスキーにと行動をともにする気持ちが、私になくなってしまったのである。しかし、じつは理性的に考えてみれば、私のまわりにいる学生たちに対してこのような反応をすることは、治安維持法の「怒り」を私に向けた学生と同様に、ほんとうは筋違いなのであって、紛争中でさえ私のまわりにはいい学生たちがたくさんいたのであり、紛争以後もちろんそうだったのである。ただ私の中で、気持ちのもち方が変わってしまったことは、否定することができない。

大学院生にも、東大紛争は影響を及ぼした。当時の院生で、私によくのみこめない理由で、私に対して急に攻撃的な感情をもつようになった人も何人かあり、それは東大紛争の産物だったのであろう。これは向こうが一方的にそうい

う感情をもつたから、私としてはどうしようもなかったのである。これらは私にとっての悲しい経験であるが、しかし有難いことに、大部分の場合において、紛争が原因で教師と院生のあいだの関係が全面的に崩壊してしまうというようなことはなかった。

東大で教えた30年間（ただし初めの数年は専任講師で大学院をもたなかった）に、私が修士論文の主査をつとめた大学院生は、外国人をあわせて20数名になる。彼ら——その中にはタイ人のスリチャイ君や韓国人の李君や尹君や中国人の晨君なども含まれていた——は、どの1人をとってもまことに優秀な人たちで、私の専門としてきた諸領域（原理論、社会階層論、社会指標論、経済社会学、非西洋社会の近代化、組織理論など）のどれかを専攻して、水準の高い仕事をしている。彼らのうち年齢の高いほう、たとえば私の還暦記念論文集の編者になっている直井優君（大阪大学教授）、厚東洋輔君（大阪大学助教授）、盛山和夫君（東京大学助教授）、今田高俊君（東京工業大学教授）、間々田孝夫君（立教大学助教授）、友枝敏雄君（九州大学助教授）などは、いずれもすでに学界で一定の地位をもっており、彼らは著書や論文などによってすでに広く知られている。彼らを私の「弟子」と呼ばせてもらってよいならば、私は弟子にたいへん恵まれたと考えており、またそのことを誇りに思っている。

しかしそれは、私がよい教師であったからだとうぬぼれることを許すものではない。それどころか、私は人を指導することが下手だったのである。彼らは、要するに自力で伸びたのだ。あるスポーツクラブで水泳の講習を受けてみて思ったのであるが、スポーツの場合には、指導員は自分が模範的な泳ぎをして見せて、それが見事であればその人はいい教師である、とは必ずしもいえないようである。というのは、模範的な泳ぎを見せられて、さあこういうように泳ぎなさいといわれても、それだけでは、教わるほうはなかなかそのとおりにできないからである。水泳のいい教師とは、生徒に実際に泳がせて、あなたはどこが悪いからスピードが出ないのだと的確に指摘し、それをなおしてやることのできる教師なのではないか。では、学問の場合はどうなのだろうか。私が自分はいい教師だといえないと考える理由は、まさにこの的確な指導ということができないと自覚しているからである。私がゼミでやってきたことは、基礎文献をきちんと読ませて、その中味を要約させることだけである。それ以外では、自

分の書いたものを読めと要求することであるが、これはさきほどの水泳指導員の場合でいえば、自分が泳いで見せて、さあやってみなさいというのと同じである。それだけでは、いい教師とはいえないのではないか。私はこの問題に悩まされつづけてきた。

ある時は、学生や院生の書いた論文に立ち入って、ここをこうせよ、あそこをこうせよ、と手取り脚取りの指導をやってみたこともある。しかし結果は、どうもよくないようであった。学生、とくに院生になると、そういうやり方に反発してしまうのだ。それより、黙って見守っていてあげて、その成果がよかったら褒めてあげる、というやり方のほうが結果がいいようである。私は、これらのかつて私が指導した人たちとの関係に関して、あの時ああすればよかった、ああすべきでなかった、という数限りない後悔の思い出にさいなまれている。しかし全体としていうなら、彼らは私をしあわせな思いで包んでくれている、と私は思う。それは、彼ら自身が優秀であったからだろう。

一般的にいうと、私は自分がまだ実力のない、未熟な、しかし精いっぱい頑張っている若い教師であったころのほうが人気があったと思う。今の私は、もう古い人間で、あまり人気がない。実際には、現在の私の講義は、むかしの講義よりもずっと改善され、完成度が高くなっているはずであるが、そのことは学生たちによって評価されていないように思われる。かつて私は、若さの利点によって、未熟ささえ新鮮感をもって迎えてもらえるトクな立場にいた、とさきに述べた。いまそういう利点は、当然に若い世代の同僚たちのものになり、私はもはや40歳も年齢の離れた学生たちと、ふれあいをあまりもち得ない。これはやむを得ないこととして、諦めるしかないのであろうか。

2. 私にとっての「社会学40年」

『社会学40年』というのは、私の学生の時のゼミの恩師である故福武直先生がお書きになった自伝の表題であるが、私にとっても今年は、私が東大社会学科に進学していらい、つまり私が社会学を自分の専門に選んでから、ちょうど40年目になるので、この語をパラグラフの見出しに使わせていただく。

私が大学院で指導教官をつとめた最後の院生の1人若林直樹君（現・新聞研究所助手）は、「先生の研究歴を何段階かに分けるとすれば、どのように区分すればいいですか」と私に聞いたことがある。なるほど、マルクスやデュルケムやヴェーバーやパーソンズのような大学者・大思想家について、その学識生涯をいくつかの段階に区分することが行なわれる。しかし、私に関しては、そんな立派な段階的發展などというものはおよそなかった。それどころか、私はいつまでも一カ所に停滞し、容易に質的飛躍をなしとげるにいたらなかったのである。私は誇るべき成功物語を何ももっていないので、自分の研究を語るにしても、そういう偉い人の場合のような述べ方をするとはできない。私のこれまでの研究歴は、そのような縦の発展段階区分としてではなくて、私が同時平行的にやってきた8つほどの研究テーマに関して横の区分を設定し、それらの一つ一つについて、初期の未熟な段階から、徐々にレベルを高めてきた——もちろん今でもまったく完成度の低いものではあるが——、緩慢な進化の過程として描くのが適当なのではなかろうかと、私は思っている。その8つほどの領域とは、つぎのようなものである。

- (1) パーソンズの学説研究
- (2) 行為理論と社会システム理論
- (3) 社会変動論ないし近代化論
- (4) 社会学原理論
- (5) 社会階層論
- (6) 産業社会学ないし経営組織論
- (7) 経済社会学
- (8) 社会指標と福祉の社会学的研究

これらのうち、はじめの4つは相互に重複するが、(1)は私の卒業論文のテーマであり、(2)は私の修士論文のテーマであり、(3)は私の博士論文のテーマであるので、ここでは叙述の便宜上からいちおう切り離して書いておきたい。

実をいえば、これらはどの一つをとってもビッグ・トピックばかりで、それらを全部自分の専門であると称することはまことにおこがましいし、おこがましいだけでなくそれらを全部やるなどということ自体がほんらい不可能なこと

なのである。専門分化の進んでいるアメリカなど——ヨーロッパはやや事情がちがうが——で、そんなことを言おうものならあきれてしまっていて、どれもみんなよほど程度が低いのだろうと思われてしまいかねない。日本でも、今の若い世代ではすでにそうなっているかに思われる。私が社会学研究をはじめたころ、社会学はまだ学問としての所帯が小さく、どの研究分野も未確立であった。それで私は、あれもやりたい、これもやりたいと、自分の非力をも省みずに手を出して自分の分野を広げ、そしてどれもが発展の初期段階にあったあいだは、それでもとおっていたのである。しかしある段階から、それらのすべてを維持することは、正直に言って、とうてい困難になってきた。私の研究歴とは、それらのどれかを取って他を捨てる決断ができずに、無理に全部をやりつづけようとした苦闘の歴史にほかならない。そのため私はいつも自分で自分を忙しくし、忙しいだけならいいのだが、一つの分野に熱を入れているあいだに他の分野に新しい発展があって、あわててそれらを学ぼうとするが、そういうことを繰り返しているうちにしだいについて行けなくなる、そういう経過をたどってきたのであった。

以下それぞれの項目ごとに、簡単に私のやってきたことを、自己反省を織り込みながら語ってみたい。

(1) パーソンズの学説研究

私が社会学を勉強しはじめた当時、社会学は全体としてまだ発展の初期段階にあり、経験的研究における専門分野として確立したものは、家族社会学と農村社会学と都市社会学くらいしかなかったが、社会学原理論は、高田保馬『社会学概論』とか松本潤一郎『社会学原論』とか新明正道『社会学の基礎問題』とか清水幾太郎『社会学講義』など、むしろ現在よりも豊富であった。私はこれらの中で、独創性が高く演繹的思考においてひときわ水準の高いのは高田保馬のものであると考え、また現代アメリカ論を含み行動主義とプラグマティズムから説きおこす新しいタイプの社会学が清水幾太郎のものであると考えて、教養課程の学生の時、この2つをとりわけ熱心に読んだ。ついで社会学の専門コースに進学するにあたって、社会学において近代的思考を確立したのはデュルケムとヴェーバーとジンメルだと見当をつけて、本郷への進学後に病気で

半年ほど寝たときに、彼らの著書で翻訳のあるものを全部読もうと努力したのであった。

そして病後、私はすべての努力をパーソンズに集中するようになり、卒業論文はパーソンズの学説研究をテーマとした。パーソンズは、当時誰もがこれからはパーソンズだと語って、彼を戦後の理論社会学をリードする中心学者であると感じていたし、英語ですむし、その中にデュルケームもヴェーバーも入っているし、さらに初期パーソンズには経済学の匂いもするし、高田保馬といくらか似たところもあるというわけで、私が夢中になる条件を十分に備えていた。私の卒業論文は1955年2月に提出されたものだから、後期パーソンズの展開はまだなく、『社会的行為の構造』『行為の一般理論をめざして』『社会システム』『ワーキング・ペーパーズ』までのパーソンズ理論の発展をあとづけたものだった。私はこの論文の最後のところで、つぎのような結論を導いた。すなわち、パーソンズ理論のメリットは、行為というミクロ的・個人的な概念用具から出発しながら、これを社会体系というマクロ的・超個人的で構造化された社会学の研究対象の分析にまで、つないだ点にある。これは、行為が制度化された価値パターンによって秩序化されていく過程に着目することによって、可能になったものである。しかしパーソンズ理論の限界は、その価値パターンを行為者にとって動かしがたい所与のものとしたために、制度ならびに文化のとらえ方が静態論的になり、構造分析が単なる類型論になってしまったこと、また社会統制論において、社会体系が均衡化に向かわずに均衡破壊がもたらされるダイナミックな条件の分析を欠いたことにある、と。

この結論は間違っていなかったと、私は今でも考えている。けれども、1970年代以降に、世界的な規模でパーソンズ批判の嵐が吹き荒れるようになり、それが、「社会学理論家」たることを志してパーソンズ研究から始めた私までも、襲うことになった。これについては、第3節で述べよう。

ただ、私は卒業論文でパーソンズの学説研究をやったあと、その後これまで35年間ちゃんとしたパーソンズ論を書いたことがない。近年、ドイツのミュンヒヤや日本の政治学者の高城和義氏などが立派なパーソンズ論を出したのを読むと、私もパーソンズ論を一冊の本にまとめておくべきだったとつくづく思う。これからでも、私は何とか時間が捻出できれば、この宿題を果たしたいと考え

ている。

大学院に入って、卒業論文の2年後に書いた私の修士論文は、パーソンズの行為理論よりももっと視野を広げ、ミードに始まる社会心理学の社会的行動主義と、経済学の消費行動論をモデルとする合理的意思決定論とを取り込んで、「行動理論」といったものを構築することをテーマとした。今ならば「合理的選択理論」というべきところだが、当時はそのようなものはなかったので、私は1人で悪戦苦闘し、成果は大して上がらなかった。これについては、以下の(2)で述べよう。また博士論文では、パーソンズの構造-機能理論を私独自の考えによって動学化し、社会変動理論を構築することをテーマとした。これは、前者にくらべれば、かなり成功したと思う。これについては、以下の(3)で述べよう。前者は、修士論文段階では心理学に引かれすぎていたので、この点を修正していくことによって、ミクロ社会学としての行為理論にいたり得る。また後者は、社会変動論の前提として社会構造論を附加すれば、マクロ社会学としての社会構造-変動論になる。かくしてミクロとマクロという2つのものを合わせることで、社会学原理論の骨格ができる——じっさいはそうに簡単ではなかったが——というのが私のもくろみであった。これについては、以下の(4)で述べよう。

(2) 行為理論と社会システム理論

私は1956(昭和31)年12月25日、『行動理論の研究』と題する修士論文を提出した。私はこのテーマを、かなり早くからきめていた。それは、卒論でパーソンズの学説研究を扱ったことから、パーソンズにとっての社会システム理論——それ自体はもちろんマクロ社会学である——のミクロ的基礎たる行為理論を、マクロ社会学に入っていくに先立って、パーソンズを離れて、社会学基礎理論一般として深めておきたいと考えたことによる。

しかし、まずこの題名が問題であった。ヴェーバーからパーソンズにいたる流れでは、「行為」という語がもっぱら使われていたのであるが、私はこの2年間のうちに心理学からの影響を受けて、「行動」という語を中心に用いるようになっていた(私はそれからしばらく「行動」の語を用いていたが、その後やはり社会学としてのすじをとおすためには心理学に引かれすぎないほうがよ

いと考えるようになり、再転向して、「行為」に復帰した)。心理学に加えて、私は近代経済学をかじり、消費者行動とか生産者行動とかについても考えるようになっていた。そうしてこの場合も、「行為」よりは「行動」の語が一般的であった。

この修士論文は、まったく不出来な論文であった。その理由は、私自身の側での迷いと方向転換にあった。私は修士課程の時に、尾高先生のお手伝いでS S M調査に参加したことによって統計数理研究所で数学の人と接触をもったことと、それとは別に自分の関心から心理学の本や論文を多く読んだこととによって、学説史研究のような人文主義的なものを軽んずる気持ちをもつようになり、当初の予定では行為理論史といったものを考えていた(のち南博氏が『行動理論史』という題名の著書を書かれた)のを、学説史研究ではなくて行動理論の構築というような方向に変えねばならないと思うようになったのである。この目的のために、私はミードを一生懸命読んだが、そのため社会学とはだいぶ雰囲気の違いミードの「社会行動主義」にとらわれて、初めの私の世界であったパーソンズの主意主義的行為理論の方向とくいちがってしまい、両者のあいだの調整がうまく行かなくなった。行動理論の構築には、もっと生理学的・心理学的な素養が必要だった。私のそういう方向への力は不十分で、その結果、私の修論はまったく中途半端なものにとどまった。それは、つぎのような一貫性を欠いた、そして相互にバラバラな3つの章から構成されたものになってしまったのである。

第1章は、「行動理論の諸系譜——諸学説の検討と行動理論の図式」と題する行動理論のレビューである。私はまず心理学の行動主義から説きおこし、社会学と社会心理学の共通の基礎となる行動理論は、モナディック・モデルでなくダイアディック・モデルでなければならないとした。ついで、そのような行動理論の重要なケースとしてミードの理論を論じ、そのあとでコットレルやニューカムやシェリフなど、役割と態度の理論を中心に、個人と社会の関係を追求した社会心理学説の文献サーベイを行なった。そして最後に、行動理論における社会的アプローチとは何であるかを論じ、ヴェーバーやパレートやパーソンズの理論をそのようなものとしてあげたあと、結論として行動理論の図式と称する概念図式の提示を行なった。この章は全体として社会心理学に偏し、それ

らが社会学の部分とうまくつながっておらず、そして最後の部分が形式的な概念図式の提示だけに終わったので、たぶん社会心理学の観点からみても高い評価は得られないようなものになった。

第2章は、「行動のタイプと行動の過程の分析——行動における意思決定の問題」と題されている。ここで行動のタイプというのは合理的 対 非合理的の区分を軸とするもの、また行動の過程の分析というのは意思決定論であった。はじめに行動のタイプの分類図式を提示し、その中でまず、合理的行為の典型——今日ならば「合理的選択」(rational choice)と呼ばれるもの——として、ミクロ経済学における消費者選択の理論をモデル化した。つぎにリスクや不確実性を含む場合の合理的行為として、ゲーム理論に言及したが、知識の不足のためにこの部分はまったく不十分なものに終わった。つぎに、知識や情報がより不完全な場合の意思決定を扱ったものとして、社会心理学の準拠枠の理論や期待の理論をあげ、投票行動における意思決定などは、現実には合理的選択としてではなく、このようなアプローチで分析されるのが現実的であるとした。

第3章は「行動から構成せられる社会的諸概念——行動理論の図式による構造分析と測定」と題するもので、行動理論を社会学の社会システム理論に橋渡ししようとするものであった。まず「役割」と「地位」と「位置」という3つの概念を手がかりに、社会構造論のレベルの概念を行動論のレベルの概念から構成することが重要であるとし、かくして行動論から社会システム論に移行した。そのさい、社会システム・モデルとして、パレート・ホーマンズ型のモデルと、パーソンズ・ベイルズ型のそれとが、2つの異なったアプローチを示しているとして、両者を対比することを主眼とした。最後に、ふたたび「地位」の概念を手がかりに、構造の横断面的概念化としての社会システムにたいして、構造の縦断面的概念化としての社会階層の概念を、やはり行動から構成できるとして、社会階層における権力地位と威信地位の測定論を行動論的文脈から展開しようとしたが、あまりうまくいかなかった。

尾高先生は、私が修論で自分の方向を十分確定することができず、中途半端な結果になったことを見抜いておられたと思うが、「福武君が支持してくれたからまあいい評価がついたよ」といわれた。その福武先生は、折から、日高六郎氏および高橋徹氏と3人で『講座社会学』(全10巻、東大出版会、1958 -

59)と題するシリーズを計画されていた。その第1巻のはじめの部分を、私が中心になって受け持つことになった。こうして私の修論の第1章は、リライトされた上で、同講座の第1巻に収録されることになった。またその第2章と第3章は、それぞれ同じくリライトされた上で、どちらも『社会学評論』誌に発表された。私の初期のつたない論文は、このようにして、尾高先生と福武先生の好意的な目に守られたことによって、ひとまず学界に受け入れられたのであった。思うにこれは、当時の日本の社会学が変革期にあったため、私たちの世代の未熟な作品が、尾高先生や福武先生のような先輩世代によって、社会学の新しい方向を体现するものとして評価されたためであった。当時私はそのことに気づいていなかったが、考えてみれば、私たちの世代はまことに幸運な——好運でありすぎたために未熟なものがそのまま通ってしまったのは自分のためによくなかった——時代に社会学研究のスタートを切ったのであった。

(3) 社会変動理論ないし近代化理論

私が大学を卒業したのは、日本の高度経済成長の開始期と見なされている1955(昭和30)年のことであった。この年、日本のGNPははじめて戦前水準を上まわり、戦争による破壊からの回復が経済目標であるという段階を日本経済は卒業した。『経済白書』はこのことを、「もはや戦後ではない」と表現したのであった。私の大学院時代、そしてその後の助手・講師時代、私はこのもはや戦後ではなくなった日本の予想外の経済成長を眺めながら、このおどろくべき経済成長がなぜ可能になったのかを社会的に説明する理論をつくろうと考えた。そのためには、当時の流行語であった「経済成長」を、社会的に読み変えることが必要であった。そういう観点に立つならば、経済成長の社会的対応物としての「社会成長」の概念に思いいたり、さらに、経済発展の社会的対応物としての「社会発展」の概念に思いいたるであろう。私はこの社会成長(量的)と社会発展(質的)とを合わせたものを「社会変動」と呼んだのである。こうして、近代経済学が経済成長の理論で戦後日本経済を分析するのにたいして、社会学は社会変動の理論で戦後日本社会を分析することができるはずだ、というのが私の着眼であった。

しかしこのことを現実化し得るためには、当時の私を知的にがんじがらめに

していたマルクス主義的思考から、離脱することが必要であった。たとえば当時、楳西光速・加藤俊彦・大島清・大内力という4人の労農派マルクス経済学者たちによって書かれた『日本における資本主義の発達』(東大出版会、1955-1969)と題する全13巻の新書判の双書があって、私はその熱心な読者であった。それらは全体が「日本資本主義の成立」「日本資本主義の発展」「日本資本主義の没落」の3つの部門に分かれていて、その第3部「日本資本主義の没落」の最後の章は、「経済の高度成長」となっていた。日本の資本主義が没落することを説いた大著の最後の章の表題が日本経済の高度成長というのはまことに滑稽ではないか——もちろん著者たちによればその高度成長はひずみの拡大によって破綻することになっていた——というのが、私の率直な感想であった。この滑稽さは、マルクス経済学の理論枠組と戦後の日本経済の現実とが、はからずも乖離してしまったことを、正直にそのまま露呈したものであるとして非常に興味深い、と私は思った。

社会学においても基本的に事情は同様であった。戦後の日本の社会学においては、戦前とちがってマルクス主義が理論の中心を占めるようになった結果、社会変動論の理論枠組としてマルクスの史的唯物論への準拠がなされることが多かった。それによれば、経済の生産力における発展がある段階に達すると、現行の生産関係——ここでは資本主義の生産関係——が生産力のそれ以上の発展を抑止するようになるので、生産力をそれ以上に発展させるためには、資本主義の生産関係を、したがってこれに連動している資本主義的上部構造を変革しなければならない。社会的に言えば、この変革の過程は社会変動にほかならないが、これがマルクス主義では革命としてとらえられる結果、社会変動と革命とが同一視されることになるのであった。この固定観念を打破しないと、戦後日本の社会変動を分析することはできない。なぜなら、戦後日本に「革命」はなく、だから戦後日本の高度経済成長は、革命によって生産力を高めた過程であるとして説明することはできないからである。

それでは、戦後日本が戦前日本にくらべて飛躍的な生産力上昇をなし得た理由は、何であろうか。私が考えた説明は、革命ではないとしても、社会システムの「構造変動」と呼び得る一連の重要な変革が敗戦直後の日本で行なわれて、これが日本の高度経済成長を可能にしたのである、というものであった。具体

的には、「戦後改革」と呼ばれる多数の諸改革がこれに当たるであろう。すなわち、新憲法における国民権の実現、言論の自由の保証、農地改革による寄生地主制の一掃、労働改革による団結権の保証、教育改革による教育勅語に代わるものとしての教育基本法の制定、民法改正による「家」の解体、等々がこれにあたる。しかし私が目的としたのは日本社会論ではなく社会学理論であったから、私はそれらをより一般的なレベルでとらえた、社会システムの構造変動の理論といったものを構築することを、自分のマクロ社会学の課題として設定したのである。これが、博士論文でありまた最初の著作でもあった『社会変動の理論』（岩波書店、1965）であり、さらにそれから22年後に書かれた『社会構造と社会変動』（放送大学テキスト、1987）、そしてさらにその3年後に書かれた『日本の近代化と社会変動』（講談社、1990）であった。

今から考えると、『社会変動の理論』というのは「近代化の理論」であると銘打ってもよいはずのものであった。もちろんこれは、書名のことだけをいっているのではない。題名はこのままでも、本文中で、私が中心的に関心を寄せる社会変動は近代化であるというテーゼをなぜ立てなかったのか、近代化に向かう社会変動をなぜもっと中心的な位置に置かなかったのか、という意味である。その最大の理由は、私が、当時私のまわりを取り囲んでいたマルクス主義者たちの影響を強く受け、近代化というのは資本主義化のことで、現在の西洋も日本もとくに資本主義であり、資本主義化はもう19世紀のこと、したがって現在の社会変動として問題なのは近代化ではない、という考えを前提においてしまったことにあった。私が、のちの『社会構造と社会変動』では副題に「近代化の理論」という語をつけ、さらに『日本の近代化と社会変動』では表題そのものに近代化の語を用いたのは、私がその後やっとこの固定観念から脱却し得たからである。現在の私は、近代化というのは永遠のプロジェクトである、と考えている。しかし『社会変動の理論』の段階においては、私は近代化のつぎの発展段階に達することが、現在の社会変動の問題なのだと考えていたのであった。マルクス主義者にとっては、近代化は資本主義化であるから、近代化というのは低く価値評価される。当時日本のマルクス主義歴史学者たちがアメリカの日本史家の近代化論——具体的にはホールとライシャワー——を猛烈に批判していたのは、このせいであろう。そういう一般的な雰囲気の中で、

自分から近代化論を称する勇氣は、当時の私にはなかった。私は——及び腰でマルクス主義を批判しながら——やはりマルクス主義の虜になっていたのであった。近年にいたって、やっと自分でそのことに気づいたので、私は「近代化」を自分の社会変動論の中心テーマとして立てることができるようになったのである。

『社会変動の理論』は、今の時点で考えると、ほとんど自分で読み返すのが怖いくらいに未熟な本である。しかしその未熟さの結果としての単純な議論の運びがかえって一種の強みになったのか、出版部数はおどろくほど伸びて、17刷まで行った。これは、21年後の『社会学原理』が、内容的にはずっと完成度が高いと自分では思っているのに出版後5年でまだ5刷で、さっぱり売れ行きが伸びないと対照的である。いまだに『社会変動の理論』を引用して批判する人があり、それらの批判点のうちには、『社会学原理』を見てくれれば私自身の自己革新があるのと思うようなものもある。ただこの点については、『社会変動の理論』の完成後、私がながいこと理論から遠ざかり、そのため理論書が出なくなってしまった——単発の論文はいくつかあるがあまりいいものがない——のが非常にまずかったと思う。『社会変動の理論』をかきあげたあと、私は、さあこれで理論は一応終わったからつぎの自分の目標は社会階層の実証研究であると自己規定して、統計学だのコンピューターだのという私の元来の資質にはあまり向かない仕事に入り込み、これが1980年代初頭まで私を拘束したため、世間では、理論家としての私は、もうあの未熟さのまま伸びが止まったと判定したのであった。私の理論的研究は、1980年代にやっと再開することになるのであるが、その時には、21年前にせつかく私に注目して下さっていた世間は、それきり何も著書が出ないのにあきれて、私を見捨ててしまっていたのである。

『社会変動の理論』は、4つの章からなる。以下それらの章ごとに、多少のコメントをつけながら簡潔な内容要約を試みよう。

第1章は「資本主義—社会主義の問題と社会変動の理論」と題する問題提起である。ここではまず、社会学における社会変動理論の古典として、スペンサー、テンニース、デュルケームの3つをあげ、しかしながらこれらは「近代化」についての理論化だから、その使命はすでに終わっていると（21年後の

『社会学原理』ではそうは書いてない)。それでは、現在の時点での社会変動の中心問題は何か。こんにち多くの人びとは、それは資本主義 対 社会主義の問題であると考えている。しかし社会変動論として考えると、これにはつぎのような問題がある。資本主義か社会主義かという問題は、直接には「経済」の問題として考えられていて、「社会」の問題として考えられていない。だから一方では、資本主義から社会主義への移行が実際におこったとしても、それが社会変動としてどの程度大きな変動たり得るかは不確定であり、他方では、資本主義が資本主義でありつづけていても、大きな社会変動がおこっているということはあり得ることである。後者の具体例として、現代資本主義論と大衆社会論が提起した問題をあげることができる。この両者が共通に着目しているのは、今日の高度に発展した資本主義が、古典的資本主義と異なって、共同体的結合が消滅し、平準化・均質化し、エリートと非エリートの境界がなくなり、かつ広範に組織化された広範な大衆を担い手とするようになっている、などの事実である。これらは、資本主義が資本主義でありつづける中で生じている大きな社会変動の例示である。

第2章は「経済体系と社会体系」と題され、経済と社会の関係を概念化することを主題とする。前章で論じた資本主義—社会主義の問題と社会変動の問題との関係を明らかにするためには、経済と社会との関係を明確にしなければならない。ここではまず、パーソンズとギルヴィッチにしたがって、社会科学の19世紀的形態を特徴づけていた優越要因説、決定論的思考、および自然法則的思考を排し、これに代えてシステム論的な相互依存的思考をえらぶ。この観点からすると、経済と社会との関係は、マルクスの上部構造—下部構造のように「上」と「下」という関係でなく、同一平面上に並んで相互にインプットとアウトプットを交換し合うパーソンズのAGILのような関係になる。これを私は、社会学的機能主義と呼んでいる（機能主義をこれだけでとらえるのは不十分なのであるが、この当時の私はまだ機能主義がよく解っていなかった）。しかしながら、このような考え方を前提にした場合でも、経済と社会の関係を、同一平面上に並んだ2つのサブシステム間の関係とするわけにはいかない。なぜなら、経済体系というのは経済的行為のシステムであり、社会体系というのは社会的行為のシステムであるが、経済的行為と社会的行為との関係は、前者

が後者の特殊ケースであるという関係になっているからである。そこで、社会体系は経済体系の基礎である、したがって社会体系の理論は経済体系の理論を基礎づける、という命題が引き出される。

第3章は、「産業化と社会変動」と題され、社会変動における独立変数を産業化に求めるという、本書の第1の中心テーゼが提起される。戦後日本の社会変動——あるいは明治維新以来的の日本の社会変動全体——を考えると、経済発展における成功が終始他に先行している。経済発展における趨勢的水準上昇として最も確実にとらえられるのは経済成長であり、そして経済発展は社会発展の特殊ケースであるとする前章で立てられた命題を前提にして考えると、社会変動論の課題は、特殊としての経済成長から出発して、これを一般としての社会成長および社会発展に拡大していくことにあると考えられる。社会成長とは（本書のp. 161では「社会成長ないし社会発展」という表現になっているが、この個所では量的指標を考えているから「社会成長」としななければならない）、社会体系の構成諸部門のすべてにおいて、人間活動のフローとストックの量が増大することである。社会成長が社会体系の構造変動をとまなう時、これを社会発展という。社会発展のより具体化された形態として、近代化・都市化・産業化の3つをあげ得るが、当時の私は、近代化は先進諸国に関してはすでに現在の問題ではないと考えていたし、また都市化は部分的な指標にとどまると思われたので、最終的に産業化を最も中心的な社会変動として選び出したのであった。産業化は技術進歩とともに始まり、技術進歩が経済発展を生み出し、経済発展がさらに経済以外の社会体系の諸部門に広がって社会発展をつくりだすという筋道が考えられるので、産業化の分析は技術・経済・社会という経過をたどって進行する。

第4章は「社会変動の理論」と題されており、これは本書全体の題名と一致しているから、これまでの諸章はすべて社会変動理論の構築のための準備であり、この章で社会変動理論が一挙に提示されるとの期待を読者に与える。ある親しい友人は、「ここまで延々と読者を引っ張ってきて、最後は期待はずれだなあ」と評した。そのとおりかもしれない。当時の私には、まだ力が足りなかったのだ。しかし、社会変動についてそれまで誰もはっきりさせていなかったことを理論的にはっきりさせた一点がある、という自負が私にはある。それは、

社会変動とは社会の何が変動することなのか、という基本的な問いに明確な答を与えたことである。いままで社会変動について論じた文献（たとえば小松堅太郎やムーア）はどれも、この問いにきちんと答えていないから、理論的に曖昧であるとの印象が残るのだ、と私は考えた（私は小松堅太郎を引用してその曖昧さをはっきり指摘すればよかったのだが、当時は、小松の本は引用するほどのものでないと考えなおしてやめてしまった。のち『社会学原理』で小松批判を入れた）。私の答は、「社会変動とは、変動しないときには変動しないものが変動することである」というものであった。「変動しないときには変動しないもの」とは何か。それは構造である。だから社会変動とは「社会構造の変動」である、というのが私の答である。これはいままでの本にも書いてない（のちに西ドイツでツァプフが私と同じことを書いたが、私の方がずっと早かった）。このことに思い当たったから、私は『社会変動の理論』という本を書くことに意味があると考えたのであった。

こうして社会変動の概念が確立すれば、あとは一瀉千里である。ただ、「社会構造」の概念化に関しては、私はパーソンズ的思考にかなり全面的に依存しており、パーソンズの思想をこういうかたちに定式化したということ以上には、私はオリジナリティを主張し得ない。かくして私は、社会構造とは「制度化された規範による人員配分および所有配分の持続的配置」である、との定義にたどりついた。ここから、社会変動とは「制度化された規範による人員配分および所有配分に変化を生ずる過程」である、という定義が導き出される。これが本書の第2の中心テーゼである。前章の第1テーゼと、この第2テーゼを結びつけることによって、独立変数としての産業化が、従属変数としての社会構造の変動を生み出す過程を定式化した8つの命題（人員配分に関するもの4つと、所有配分に関するもの4つ）が導出された。ただこれらの8つは、独立変数と従属変数とのあいだに、いわば変化における均衡が自動的に実現されるかのような表現になっている。現実はいっしょにそうではなく、産業化が社会階層の流動化と平準化をともなわなかったり、産業化にもかかわらず民主化がこれにともなわなかったりすることがおこってきた。私はこれを、タイム・ラグによって生ずる社会問題として説明する方式をとった。

私は、330ページのこの著作を博士論文として東大に提出し、その審査委

員に社会学科から尾高邦雄・福武直・高橋徹の3先生と、経済学部から大塚久雄・中川敬一郎の両先生がなってくださいました。これらの先生方は私に好意的であつたけれども、私にとって致命的であつたコメントは、大塚先生のものであつた。大塚先生は、私の定式化した8命題では、戦前日本がファシズム化した理由を説明できないではないかと指摘されたのである。先生はこれを柔らかくおっしゃったのであるが、私はそれをきわめて本質的な問題を鋭く衝いた批判として受けとめた。私はこれに対して一応、タイム・ラグ・セオリーで応戦したが、不十分であることを内心で痛感したのであつた。

『日本の近代化と社会変動』は、その反省の上に立って、25年後にやっと書かれた自己革新の産物である。この本は、『社会変動の理論』が理論書であるのにたいして、自分の社会学理論で日本の歴史の現実を分析したものである。しかし、両者のあいだには、それに先だって書かれた『社会学原理』と『社会構造と社会変動』があり、現実分析に適用されたのはそれらの自己革新された理論であつて、若いときの未熟な作品『社会変動の理論』のそれではない。そのような自己革新なしに、後者を無媒介に日本の社会変動の現実分析に適用することは、できなかったであろう。それでも基本的なアイディアには、25年を隔てた連続性がある。とりわけ、広義の社会システムを、経済システム、政治システム、社会システム（狭義）、文化システムに分け、それぞれのサブセクターごとに、経済的近代化、政治的近代化、社会的近代化（狭義）、文化的近代化を考えて、非西洋後発社会としての日本において経済的近代化のみが先行し、他のサブセクターの近代化が遅れた、という問題設定は、『社会変動の理論』で敷かれたレールを継承しているのである。

皮肉なことに、『日本の近代化と社会変動』を日本史や西洋史の専門家に進呈したところ、私の立場は基本的に「講座派」である、いまさら講座派とは何たる時代遅れ！という反応がかえってきた。なるほど私も40年前は、講座派の山田盛太郎や野呂栄太郎を一生懸命読んだ。私が明治維新から戦前までの日本を非近代的だとするのは、その影響の残存によるものであるというのは、少しは当たっているかも知れない。しかし私は早い時期にマルクス主義を卒業したのであるから、私が講座派であるというような批評は、私の外形だけを見ていて、私が最も苦心をした社会学的理論構築の意味するところを全然汲み取っ

ていないことを露呈した批評である、といわざるを得ない。しかし相手は歴史家なのだから、これはやむを得ないであろう。私としては、社会学理論と日本史をこうやって苦心して結婚させたことの意味を、世の人びとが少しでも汲み取って下されば有難いと願うばかりである。

『日本の近代化と社会変動』は、文庫判（講談社学術文庫）の小型ではあるが、注と文献リストを含めると400字詰めで800枚を超え、分量的には大型本と変わらない。しかも章の数が全部で12あって、章別の内容要約をすると長くなりすぎるので、残念ながらここではそれは断念しよう。それに代えて、ここではこの本が、副題に「チュービンゲン講義」とあるように、チュービンゲン大学日本学教授のクラウス・クラハト君の研究室に招いてもらった1989-90年の冬学期に、下手クソなドイツ語で毎週1回講義した思い出の記録であること、講義ノートづくりがチュービンゲンで集中的に行なわれ、この間他のことにわずらわされなかったことで、比較的短い期間にたいへん気持ちよく効率的に書き上げられたこと、しかし実質的には私が日本歴史の本に親しみはじめたのは1960年代いらいのことで、潜在的な準備期間はけっして短くはなかったこと、以上をつけ加えるにとどめておこう。

（4）社会学原理論

私が『社会学原理』というアナクロな題——アナクロと知りつつ私はあえてこの題名にこだわった——の400ページの著書をやっと完成したのは、1986（昭和61）年、55歳の時のことであった。私は社会学の原理論を1度は書きたいという目標を若い時からもっていたが、これについての当初の目論見ははなはだ甘いもので、（2）のミクロ社会学を修士論文でやって、（3）のマクロ社会学を博士論文でやって、しかるのちに両者を合わせれば、おのずから原理論に到達する道が開けてくるであろう、というのが大学院に入った当初に心に描いた戦略であった。しかしそんな簡単なものではない、というあたりまえのことがまもなく私にもわかり始めた。『社会学原理』に到達するまでには、それからなお21年の長い長い道のりが必要だったのである。

私は、1965（昭和40）年に博士論文として『社会変動の理論』を書き上げた後、主力を社会階層の実証研究に移した。ところがこれが思いのほかの

泥沼で、けっきょく1975年SSM全国調査の報告書『日本の階層構造』

（私の編著、東大出版会、1979）が出版され、そのあと1980（昭和55）年1月のハワイにおける日米社会階層会議（アメリカのSSRCと日本の学術振興会を共同スポンサーとする）が終わるまで、私の頭は本格的に理論に戻るができなかった。私がやっとの思いで頭を理論の方向に切り替えることができたのは、1981年の西ドイツ・ボッフム大学への留学においてであった。私はドイツ語が今もって苦手であるが、精いっぱいドイツ語で話す努力をしながら、英語も大いに利用して、この時期に西ドイツの社会学者たちと交流することができた——西ドイツの社会学者たちの思考は、ルーマンのような例外もあるが、概してわれわれ日本人には親しみやすいところがある——ことは、非常に有益であった。

西ドイツにおいて私は、シェルスキーやルーマンやハーバーマスなど、それまで読んでおくべきであったのに読む時間がなかったドイツ社会学の戦後の発展をあとづけることができ、また日本社会論の講義をする必要があったことから、日本の近代化の分析を自分の社会変動理論と結びつける最初のアイデアを、西ドイツで思いついたのであった。ボッフム滞在中に私は、アイゼンシュタットの依頼によって、メキシコシティにおいて1984年に行なわれるISA（国際社会学会）大会のための英文論文“Typology in the Methodological Approach to the Study of Social Change”（のちS. N. Eisenstadt and H. J. Helle, eds., *Macro Sociological Theory*, London: Sage Publications, 1985. に収録されて、かなり広く読まれた）を書いた。これをさらに改訂して、帰国後に日本語で発表したものが「社会変動研究における実証主義と理念主義」（思想、No.712, 1983）で、これはそのあとに書いた、私にとっての11年ぶりの著作『現代の社会科学者』（講談社、人類の知的遺産 79, 1984）の原型となった。

『現代の社会科学者』は、講談社の企画した全80巻のシリーズ「人類の知的遺産」の第79巻として依頼されたもので、私がその著者の一人として名を連ねることになったのは、同シリーズの6人の「企画委員」の一人森有正先生（その後まもなく死去）の推薦によるものであると講談社の山本康雄氏にうかがい、感激してお引き受けすることにしたのであった。この本は400字詰め

で1000枚に達しているが、じつはそれでもなお完結しなかったのを、講談社が、そんなに厚くなつてはシリーズの1冊として困ると強硬だったので、1章削って出してしまったものである。この本を書き上げるために、私は東大経済学部図書館と、慶応義塾総合図書館に、たいへんながく通い詰めた。結果的に、この本はその2年後に出た『社会学原理』（岩波書店、1986）の文献的バックグラウンドの準備として非常に役立ち、そのことが大いにさいわいして、私の『社会学原理』は、たったの13ヶ月で書き上げられることになったのであった。『現代の社会学者』と『社会学原理』は、出版社も違うし装丁もまるで違うので、多くの人は関連があると思ってくださらないであろうが、著者の立場からすれば、ぜひとも並べて読んでいただきたい一種の連作なのである。

『社会学原理』は、400字詰め1000枚近くに達する大きな本——以前にはもっともっと大きい著作がいくらでもあったのであるが、最近出版事情から大きい本が好まれないので、出版社側にはこの本は大きすぎるということの不評であった——で、私の文字どおりのライフワークの一つであるといつてよいであろう。その背後には、それに先行する東大での社会学原論の10数年にわたる講義ノートがあった。これを13ヶ月で書き上げたというのは、じつはそのつぎに予定されていた放送大学テキスト『社会構造と社会変動』（日本放送出版協会、1987）とのあいだのたいへんきびしい日程にはさまれて、そうせざるを得なかったためであった。これは私にとっての危機であったが、私の心の中で社会学原理を本にする機がまさに熟していたことによって、私は自分でも意外なくらい淀みなくスラスラと書き進めることができた。実際には、この本の執筆中、私は講義ノートをほとんど見ることはなかったのである。ということは、書くべきことの全部が、私の頭の中であらかじめズーッと見えていたとの感じがあった、ということにほかならない。これは私自身にとっても一つの発見であり、最高に嬉しいことであった。というのは、私は岩波書店から10年以上も前にこの本の依頼（元来は岩波全書の1冊として）を受けていたのに、とりかかってみると勉強不足が感じられて行き詰まり、執筆を先送りするという暗い経験を繰り返していたので、50歳台になって私はにわかに「書ける自分」を発見して、雀躍したのであった。

『現代の社会学者』と『社会学原理』に共通するモチーフは、実証主義と

理念主義との相克ということである。このモチーフを私が明確に自覚するようになったのは、パーソンズとポパーを読んだことによるところが大きい。現実にはこの両者の相克は、学生の頃からの私の基本的な悩みであった。研究上の効率からいえば、私は実証主義か理念主義かのどちらかを選んで、その一方に早くから特化すべきであった。なぜなら、両者は勉強の仕方がまるで違うので、普通の人は二兎を追うようなことはしないのだ。ところが私はそのどちらにもそれぞれに魅力を感じてしまい、一方だけを選ぶことができなかったのである。それならいっそのこと、私の心の中におけるその両者の相克そのものをテーマにしてしまおうというのが、この両著において私がとった戦略であった。この戦略は、ポッフム時代に書いた上記の英文論文および『思想』（1983）論文で、確立された。『現代の社会学者』はそれを思想史の平面において展開し、『社会学原理』はそれを理論の平面において展開したものである。

『社会学原理』の4章構成、すなわち、第1章「科学理論」、第2章「ミクロ理論」、第3章「マクロ構造理論」、第4章「マクロ変動理論」という構成は、ずっと前からきめていた案であった。今回新たに着想したアイディアは、「部分社会 対 全体社会」および「社会集団 対 地域社会」という2つの分析軸を組み合わせることから、家族親族、地域社会、組織、社会階層、国家国民社会という5つの社会類型を導き、第3章と第4章で2回、このサイクルを回転させるということであった。またもう一つは、1984年の中国体験が大きな転機となって、社会変動を理論化するにあたって自分は西洋人ではないという自覚が強まり、「非西洋後発社会の近代化」というテーマを強く前面に押し出すようになったということであった。後者は、つぎの『社会構造と社会変動』、および『日本の近代化と社会変動』で、さらに中心的に展開されることになって行くのである。

第1章「社会学の科学理論」は、3つの主題をもっている。第1は、社会学の定義を与え、その研究対象を確定するという教科書的な問題に、きちんとした解答を与えることである。第2は、社会学はそもそも「科学」たり得るのか、社会学において「理論」とは何か、といった科学理論的問題に対して、最小限度の原則を確認しておくことである。第3は、社会学の研究領域の広がりや区分を確定し、社会学の研究諸潮流を列挙するということである。

第1の問題については、一方では、社会学が互いに分業関係にある諸社会科学の一つとして、一定の専門的パートを受け持っている事実を否定するような「総合社会学」といった考え方を排して、専門性をもった明確なディシプリンとして確立されていることをはっきりさせること、しかしながら他方では、社会学を狭く限定しすぎて、それがもつ豊かな内容を逃がしてしまわないこと、この2点のバランスが慎重に配慮されている。具体的には、社会学の中核を「狭義の社会」——といっても「広義の社会」にくらべて狭いという意味であって、実際には非常に広い——についての専門科学とし、その狭義の社会を上記の5つの社会類型によって概念化している。

第2の問題に関しては、社会学をアприオリな形式科学と実証的な経験科学の統合の上になりたつものとし、科学主義と反科学主義はどちらも極端になりすぎると不毛になることを指摘して、実証主義を中核とするけれども理念主義をもってこれを補完する、という考え方がとられている。

第3の問題においては、社会学の領域区分を、対象による区分と認識方法による区分とをクロスさせることによりマトリックス表示を試み、また社会学の研究諸潮流として、過去のもの4つ、現存しているもの6つをあげている。後者の6つを一挙に収斂させることは困難であるが、本書では、それらをミクロとマクロに分けた上で、複数の諸潮流をできるだけ統合していく、という方針をとった。

第2章「社会のミクロ理論」では、ミクロ社会学の理論化が行なわれる。これは、3つの主題に分かれている。第1は、社会のミクロ的認識を行為理論に求めることである。第2は、自我形成と役割形成のメカニズムを明らかにすることである。第3は、相互行為と社会関係の類型学を提示することである。

第1の問題については、ミクロ社会学の視点が個人の行為にあることを示し、社会学における行為理論の出発点をヴェーバーに求めつつ、その現代的形態として、(1) パーソンズの行為理論、(2) シェーラーからシュッツにいたる現象学的行為理論、(3) ミードからブルーマーにいたるシンボリック相互行為理論、の3つをあげ、それらに共通する行為概念およびその分析カテゴリーを示した。

第2の問題に関しては、個人の社会化を説明する自我理論と、行為システム

の組織化を説明する役割理論を、相互に関連するものとして提示した。まず自我理論に関しては、デカルトの「考える我」の概念から出発して、デカルトでは行為する自我の能動面はとらえられているけれども、「社会化」される自我の受動面は欠落していたことを指摘し、後者の面を理論化したものとしてフロイトとミードの理論をあげて、両者を比較した。つぎに、ミードによって自我理論との関連において提示された役割理論について述べ、ミードの役割理論を、ミクロ的観点からする役割の発生論的説明を与えたものとして位置づけた。これにたいして、リントンを先駆とし、パーソンズによって発展せしめられた構造-機能主義による役割理論は、マクロ的観点からする社会システム・レベルでの役割の構造分析と機能分析を与えるものとして位置づけられる、とした。

第3の問題に対しては、相互行為と社会関係を、(1) ゲマインシャフト行為およびゲマインシャフト関係、(2) ゲゼルシャフト行為およびゲゼルシャフト関係、(3) 市場的交換、(4) 競争および闘争、の4類型に区分し、それぞれについての詳細な分析を、ミクロ社会分析として提示した。

第3章「社会のマクロ理論」では、マクロ社会学のうちの構造理論が提示される。これは、4つのパートに分かれている。第1は、社会のマクロ的認識を可能にする概念用具は社会システムである、ということを示すことである。第2は、社会構造とは何であり、その構造とベアをなす概念としての機能とは何であるかを明確にすることである。第3は、近代産業社会の社会構造を、部分社会について明らかにすることであり、第4は、これを全体社会について、明らかにすることである。

第1の問題については、ミクロ社会学が方法論的個人主義によって主導されるのに対して、マクロ社会学は創発性教義を抛りどころとし、そのような創発性概念が社会システムである、というのがポイントである。ミクロ社会学における行為の概念が欲求の充足を中心とするのに対し、マクロ社会学における社会システムの概念は機能の達成(機能的要件の充足)を中心とする。社会システム概念の最初の提起者は社会有機体論のスペンサーで、デュルケムとラドクリフ・ブラウンがこれを継承した。パレートはこれとは異なる社会機械論の観点から、社会システムの概念を定義した。最初にパーソンズが、ついでルーマンが、系譜を異にするこれら2つの社会システム概念を総合し、これをサイ

バネティクスおよび一般システム理論とむすびつけて発展させた。

第2の問題に関しては、構造とはシステムの構成要素の総体的に恒常的な結びつきであり、機能とはシステムの構成要素がシステムの目標達成および環境適応に関する必要性を充足するはたらきである、というのが要点である。構造は無時間的な横断面にかかわり、機能は時間の経過の中で進行する過程の縦断面にかかわる。構造は記述概念であり、機能は説明概念である。社会システムの機能要件が現行の構造のもとでうまく充足され得ない時、社会システムはそれが充足されるようにするために、現行の構造を捨てて新たな構造を求めるであろう。すなわち、構造が維持されるか、それとも変動するかを説明するものは、機能である。

第3および第4の問題は、近代産業社会に共通する構造的枠組を、部分社会および全体社会について、えがき出すことである。ここで、社会の5つの基本類型の、第1回目の循環が、家族・親族、組織、地域社会、社会階層、国家・国民社会の順で提示される。

第4章「社会の変動理論」は、マクロ社会学のうちの、構造変動の理論をあつかう。これは、つぎの4つのパートからなる。第1は、社会変動とは何か、社会変動はどのような下位類型に分けられるか、近代化というのはどのような社会変動か、社会発展の動因は何か、といった問題を明らかにすることである。第2は、社会発展によってひきおこされる構造変動の方向性を、部分社会について示すことである。第3は、これを全体社会について示すことである。

第1の問題については、まず社会変動を社会の構造変動としてとらえるという、20年前に『社会変動の理論』において到達した地点から出発する。つぎに、社会変動の下位類型として、社会成長、社会発展、社会停滞、社会退行、社会循環、社会進化をあげる。これらのうち、社会成長は機能的パフォーマンス水準の趨勢的上昇をあらわす量的な概念で、これに質的な意味での構造変動を合わせたものが社会発展である。近代化は、所得水準や生活の質の水準や教育水準等々の上昇をともなった構造変動だから、社会発展に該当する。社会発展の動因については、内生因と外生因の区別が重要である。西洋の近代化は内生因による近代化であるが、非西洋の近代化は、外生因すなわち西洋からの伝播によって可能になった近代化である。非西洋後発社会の中に、日本のよう

に近代化の早かったもの、アジアNICsのようにこれに次ぐもの、ラテン・アメリカ諸国のようになお近代化の困難なものという差が生じている理由は、近代化に向かっている内的成熟や動機づけなどの内生因と、文化伝播を受け入れてこれを自国のものとなし得るための条件との、両面から説明されねばならない。

第2および第3の問題は、近代化に向かう社会発展に関して、多少とも一般化し得る構造変動の諸事実を、部分社会および全体社会について、それぞれ命題化することである。そこで、社会の5つの基本類型についての、第2回目の循環が、第1回目と同じ順序で提示された。そして最後に、非西洋後発社会における近代化と産業化について、具体的に日本と中国の比較を中心においた、6つの命題定立が行なわれた。

(5) 社会階層論

さきに述べたように、私は博士論文としての『社会変動の理論』(1965)を書き上げたあと、主力を「社会階層と社会移動」(以下SSMと略す)の実証研究に移したが、これが思いのほかの泥沼で、もちろんこの間に他のいろんなことをやりながらではあるが、統計学の勉強やコンピューターの習得や、そして何よりも世界の社会階層研究のレベルに追いつく——けっして全面的に追いついたわけではない——ための努力に、けっきょく合計15年くらいかかってしまった。私はこの点で、社会階層研究というのは、私にとってまったく、無限のエネルギーを吸収してしまうブラックホールであったという気さえしているほどである。この長く続いた苦労は、1975年SSM調査の公式報告書である私の編著『日本の階層構造』(1979)を仕上げ、そのあと1980年1月にハワイで行なわれたSSRC(アメリカ社会科学研究評議会)とJSPS(日本学術振興会)の共同スポンサーによる「社会階層と社会移動」日米会議のオーガナイザーの役を果たしたところで、やっと一応の終わりに漕ぎ着けたのであった。しかしSSM調査というのは、これを今後とも10年ごとに続けていくとすると、まさに終わりのないプロジェクトである。それだけ、世代的継承が円滑に行なわれることが重要になってくる。

SSM研究が私にとってブラックホールのように感じられたのは、私が本来的に理論型の人間であって、計量的実証研究をあまり得意としないためである

う。あまり得手でないという自覚がありながらこの道に踏み込んだのは、得手でないからどこまでできるか努力してみたいという私の気質もあるが、より直接的には、指導教授であった尾高先生に協力しなければならない立場におかれたことによるのである。私が大学院に入学した1955（昭和30）年、先生はアメリカから研究費を得られて、日本における最初のSSM全国調査をオーガナイズすることに努力を傾けておられた。ところが当時、東大社会学研究室の多くの人たちがSSMはMSA（アメリカ相互安全保障法）だといって協力拒否を申し合わせたので、研究室の中で先生は孤立してしまわれた。だから先生の学生であった私としては、何とか先生をお助けする義務があったのである。さいわい、統計数理研究所の西平重喜氏が、研究所ぐるみで全面協力してくれたので、SSMプロジェクトそのものは進行した。その代わり、私は東大社会学研究室で、村ハチブ状態におかれることになった。今では、SSMは日本の社会学が世界の社会学に対して、また日本の他の社会科学に対して、誇り得る財産であると評価されている。しかしそれはあとから考えた評価であって、当時は協力した人は少なかったし、やっていた当人は外からいろいろ攻撃されて、孤独であったのである。

10年後の1965（昭和40）年、尾高先生はSSM研究を引退されたが、安田三郎氏（当時東京教育大学助教授）がプロジェクト・リーダーを引き受け、西平氏が全面協力されて、第2回SSM全国調査が行なわれた。私もメンバーとしてお手伝いしたが、この時は研究費も人手も足りなくて、残念ながら報告書を出すことができなかった。日本のSSM調査は先細りになっていくように思われ、心細かった。しかし世界的視野で見ると、SSM研究はすばらしく隆盛に向かい、しだいに計量社会学の第一線を形成するようになりつつあった。私はそれを見ていたので、ここでSSM研究の根を絶やしてはならないと考えた。

1968（昭和43）年、私は慶応イリノイ・プロジェクトに乗せていただいてイリノイ大学で1年を過ごす機会を得、イリノイではじめてコンピューター・プログラミングを勉強した。この間に安積仰也氏（当時ウィスコンシン大学助教授）の好意で、SSM研究のメッカたるウィスコンシン大学へ出かける機会があった。ここで、ハラーやトライマンなど代表的な若手SSM学者と面識を得ることができ、彼らにアメリカにおけるSSM研究の流れを教えてもらった。

ハラーは、当時ダンカンによって創始されて間もなかった経路分析（パス解析）の手法を教えてくれた。私が日本からもってきたSSMデータの形状を説明すると、ウンそれを使ってコンピューター分析すれば、大丈夫立派に経路分析ができるよと私に自信をつけてくれた。私がイリノイ大学で、コンピューター・センターに通いながら、尾高先生の還暦記念論文集のために日本語で書いた論文「社会移動の過程分析」（富永・倉沢編『地域社会と階級』中央公論社、1971：133－189）は、まさにその産物にほかならない。この論文はその後、日本で初めての経路モデルを用いた研究として評価されるようになった。

こうしてSSM研究にすこしづつ自信をつけた私は、1975（昭和50）年の第3回SSM調査のプロジェクト・リーダーをつとめる決意をした。まず先立つものは金であるから、あらかじめ科学研究費の申請実績をつくっておき、その上で文部省の科学研究費担当部局に行き事情を話し、どうしても1975年でなければならない理由を説明して、理解を得た。つぎの問題はプロジェクト・メンバーの獲得である。とはいえ、私には研究をオーガナイズできるほどの若い仲間がなかったし、日本にはまだそれほどのSSM研究者は育っていなかった。私は、当時私が指導していた東大大学院生の安藤文四郎君と今田高俊君に協力を依頼して、快諾を得た。実際この2人の献身的な熱意と、今田君のコンピューターを使いこなす能力とが軸になって、1975年SSMプロジェクトは始まったのである。調査の実査は、学生を調査員として動員することを依頼する全国ネットワークを私が組み得ない以上、専門調査機関に依頼するしかなかった。さいわい研究費が必要なだけ得られたので、世論科学協会の協力が得られた。仕事が軌道に乗り始めると、直井優君や原純輔君その他多くの人びとが協力してくれるようになり、しまいには多すぎるほどになって、プロジェクトは成功裡に達成されたのであった。

1975年SSMは、文部省の出版助成金を申請して、500ページをこえる大部な報告書『日本の階層構造』として出版することができた（東大出版会、1979）。この本には、思いがけず日本労働協会賞をいただいた。また、書評者のお名前は忘れてしまったが、日本の社会学の中にこれだけのことができる統計分析の能力の蓄積があるとはこれまで知らなかった、といったお褒めの書評もいただいた。1965年の第2回SSMが報告書が出なかったのも、この第

3回調査の出版は、日本のSSM研究にとってほんとうに起死回生の一打であったのである。

その後、1985年の第4回SSM調査は、私の手を離れて直井優君（現在大阪大学教授）がプロジェクト・リーダーになり、全4冊の報告書も出て、日本のSSM研究者の層はめだって厚くなった。これはほんとうに、素晴らしいことである。第2回調査のあと、日本のSSMは先細りになりそうだったのだから、私が第3回を頑張ったことが、日本におけるSSM研究の今日の隆盛を招いたのであると、私は自賛している。しかし、私自身はまだ自分の著書としてSSMを本にまとめていない。私はこれまで、トレンド分析と国際比較に情熱を燃やしてきたので、少なくとも1985年調査のデータまでは私にも使わせていただいて、私のSSM研究にけじめをつけるような独自の分析を行なった著書を一冊書きたいというのが、私の念願である。最近書いた論文「戦後日本の社会階層とその変動 1955-1985」（東大社会科学研究所編『現代日本社会』第6巻、東大出版会、1992：429-495）はその一環のつもりである。

（6）産業社会学ないし経営組織論

尾高先生の学問は、ほんらいは思弁的なドイツ的学風から出発していた。先生の初期の著作（出版はあとになった）『社会科学方法論序説』（春秋社、1950）を見れば、そのことがよく分かる。しかし先生はその後、戦時中の『職業社会学』（岩波書店、1941）で経験的研究に転じられ、戦後はそれがさらにアメリカからの強い影響を受けて、産業社会学に変わった。私が学生だったころの先生は、この産業社会学の推進に一生懸命であった。学生だった私は、福武先生の農村社会学と尾高先生の産業社会学とをくらべて、これからの日本はこれまでのような半農業社会ではなく高度産業社会になっていくのだから、後者のほうが将来性があるはずだと考えた。それなら、私はその後、産業社会学をなぜやらなかったのか。

じつは私は、自分では産業社会学をやってきたつもりなのである。産業社会学は、日本では尾高先生が開拓された分野であり、そして私は尾高先生の弟子

で、しかも東大では教養学部にも松島静雄先生がおられたとしても、本郷の社会学科には産業社会学の講義をする人は、尾高先生が定年になられたあとはいなかったのであるから、それを引き受ける責任が私にあると考えていた。それで私は、1964年から1984年までじつに20年間にわたって1年おきに産業社会学を講義のテーマに掲げ、これをくりかえしながら産業社会学に関する本を書こうと考えてきた（実をいうとこれは、当時、経済学部の経営学コースから産業社会学の講義をしてほしいとの注文があり、1年おきに文学部と合併で、あるいは年によっては経済学部だけを切り離して、産業社会学を講義しなければならない必要があったのである）。ところが、ふと気がついてみると、私は組織理論との関係で経営学のほうにすっかり入ってしまい（『組織の社会学的分析』経済セミナー、1979, No.297：38-47；『組織変動の理論をめざして』組織科学、Vol.22, No.3：2-14）、社会学界において産業社会学の研究グループと目されている人びと（たとえば松島静雄氏、間宏氏、石川晃弘氏など）からは離れてしまって、産業社会学をやっているとは認知されなくなってしまったようなのであった。たぶん通念によれば、産業社会学者とは、工場を頻繁に訪れて、労務管理とか職場における人間関係とかQCサークルとか労働組合とかについてたえず調査をしつづけている人のことであると考えられており、私はそういうことをあまりやらなくなったため、日本における産業社会学の流れを総括するような時などに、その中にカウントしてもらえなくなってしまったのであった。

私は助手・専任講師のころは、工場へ行ってモラル・サーベイをやったり、鉄鋼業における技術革新（ホット・ストリップ・ミルの導入）が労働者に与える影響について調査をしたり（『技術革新の中の鉄鋼労働者』エコノミスト、1960/10/11）、日本の企業における労働時間短縮の実状を調べたりしていた（『労働と余暇時間』in：『余暇と労働』高橋武・梅沢正・井上甫と共著、日本生産性本部）。そのつぎに私は、1960年代なかばごろから、産業社会学を労使関係論を軸に構成することを考え（『労使関係分析の社会学的基礎』日本労働協会雑誌、1967, No.100：5-15）、また労働者階級の形成史を実証的に調べた歴史研究『産業化と労働者』（日本労働協会雑誌、1971, No.145：2-15）を書き、さらにダンロップの労使関係システムという概念に興味

をもって、「労使関係システムの葛藤解決能力」(『季刊公企労研究』1976, No.26: 25-35)という論文を書いた。最後のものは、公共企業体における労使関係のあり方といった問題を論じたもので、労働法の石川吉衛門教授に評価していただいた。しかし、これらの仕事は社会学者の読まないような場所に発表されたためほとんど知られず、また断片的なものに終わったために、知られた場合でも何となく余技のように見られ、私自身としてもこれらに持続的に没入するまでにいたらなかった。これは私が理論の研究や社会階層の研究で忙しく、十分時間をあてられなかったためでもあったが、私がほんとうにはそれらの分野を得意としていない、との意識をもっているせいでもあった。どうも私の頭は、もう少し抽象の水準の高いことのほうが適しているように思われ、産業社会学が非常に実学的で、技術革新とか労使関係とか組織開発とか、そのときそのときのカレントトピックスを追っていかねばならない性格をもっているのが、私にはあまりうまくあわないのであった。ほんとうに内発的でないものを義務感でやろうとしても、結局は成功しない。私はしだいにそう考えるようになり、狭義の産業社会学の分野から徐々に撤退するようになった。

しかし私は、産業化(近代化・社会変動の一つ)の研究、組織理論の研究、そして経済社会学を、当時もいまも自分の専門分野であると考えており、そしてじつは、これらのテーマは産業社会学と密接に関連しているのである。だから、産業社会学を狭く限定してしまうのであれば、私は産業社会学をやっているといってもよいはずなのである。残念ながら日本の産業社会学は、工場の調査をやらないと産業社会学ではないような、狭い自己規定に向かって進んだ。そしてそうした経過の中で、私自身は、ヴェーバーやパーソンズやバーナードや高田保馬などの理論的つながりから、自分の関心領域をあらわすネーミングとして、産業社会学よりも、一方では組織理論、他方では経済社会学という語のほうを選好するようになっていった。これについて、私は、恩師である尾高先生とのあいだに多少のギャップを生ずることになってしまったことを非常に残念に思っている。しかし、独立の研究者である限り、このように研究関心が動いて行ってしまうのは、仕方がないことであろう。私としてはすでに、社会階層研究を尾高先生から発展的に受け継いできたのであるし、産業化の研究や組織理論の研究も広い意味での産業社会学に関連するテーマとしてやってい

るのであるから、尾高先生にはそういうことでご勘弁をいただけたらと思っている。

(7) 経済社会学

1991(平成3)年度、すなわち私にとって東大最後の年の講義題目に、私は「経済と社会」というテーマを選んだ。これは、私がこの題名で本を書きたいと考えており、講義ノートをそのための準備にあてようとする目的をもっていた。はじめは、「チュービンゲン講義」の時のように、講義しながら本が書けてしまうようにすることが理想であったが、ほんとうに夢中で頑張ったものの、結果はだめであった。テーマ自体が難しかったこと、および日本にいてこれをやる場合にはどうしても他の仕事がたくさん入ってきてしまうことのために、1年間の講義が終わった現在、講義は全6章(予定)のうちの第3章の途中まで、つまり半分足らずしか進まなかったのである。だから、『経済と社会』という本が出版できるまでには、どうしてもあと1年以上を要することになる。しかも東大定年後、慶応義塾大学環境情報学部(藤沢キャンパス)という新設校で、社会学科という枠があった従来とはちがう環境のもとで講義やゼミをしなければならないことを考えると、これまでと同じペースで進めることは難しいかも知れない。

経済と社会、あるいは経済社会学をテーマとして本を書くことは、非常に若いころからの、私の念願であった。パーソンズとスメルサー『経済と社会』(岩波現代叢書、上下)を1958-59年に訳し、ヴェーバー「経済行為の社会学的基礎範疇」(中央公論社・世界の名著 50)を1975年に訳したのも、そのための準備であった。1965年の私の最初の著作『社会変動の理論』には、「経済社会学的研究」という副題がつけられていた。これはもちろん、社会変動研究のためには経済発展と社会発展との関係を理論化しなければならないと私が考えていたことをあらわすもので、社会変動論がそのまますぐに経済社会学になり得ると思っていたわけではない。しかし少なくとも主観的には、私はこの当時から、経済社会学ということを考え続けてきたのであった。1971年、私はこの念願を一挙に果たしたいと思い、その最初のパートにするつもりで、かなり長大な論文「経済行動と社会行動」上下(思想、1971, No.

562 : 21 - 37 ; No.564 : 61 - 81) を書いたが、あとが続かなかった。そこで私は、経済学と社会学の両方にまたがるような仕事はもっと勉強してからでないと書けないと思い、しばらく沈潜することにした。

1972-1976年に福武直監修として刊行された全18巻の『社会学講座』には、はじめ経済社会学は入っておらず、福武先生は私に、第1巻『理論社会学』の編集を担当するようにといわれた。私は先生にお願いをして、産業社会学も政治社会学も教育社会学も入っているのでしたら、経済社会学と法社会学も入れて下さい、経済社会学は私に成案がありますから、とお願ひした。その結果、第8巻が『経済社会学』、第9巻が『法社会学』ということになった。私の腹積もりは、まだ自分がこの題で一冊の本を書くことができないから、そのための準備として多数の人の協力でまずやってみようということであった。私が全体を5部16章(章の数ははじめはもうすこし少なかったが、村上泰亮・公文俊平両氏の連名原稿が予定より大きくなったので、これを分割して章の数を増やした)の構成とする目次を立て、第1部「経済社会学の視点」、第2部「経済行動」、第3部「経済体系の構造と機能」、第4部「経済体系の構造変動」、第5章「経済社会政策論」に分けた。それらをさらに章に分割し、社会学・経済学・経営学など多方面の方がたにお願いしたところ、非常にすばらしいものができあがった。これだけの広さを1人でカバーすることは、絶対にできないであろう。ただ、全体が社会学として統一されているかということになると、もちろん執筆者の専攻は多様だから、そうは簡単に行かない。もし「経済と社会の両面にわたって十分に広範な知識をもった社会学者」というものがいて、彼が全体を1人で書けば、範囲はもっと限定されるに違いないが、社会学理論としての統一がとれたものが書けるだろう。私は、自分が編者になった『経済社会学』から多くを学んだし、とりわけ村上泰亮氏のすばらしい学識に敬意を新たにしたが、自分自身の経済社会学は、もっと領域を限定して、社会学としての筋をきちんとおすべきであると考えようになった。つまり私はもうしばらく沈潜して、自分がその「経済と社会の両面にわたって十分に広範な知識をもった社会学者」になる努力をすべきである、という結論に達したのである。

その後、SSMプロジェクトに懸命になった1時期が過ぎ、私が西ドイツで1年をすごして、やっと「理論家」としての自分を取り戻しつつあった198

4年、私のところに思いがけず中国南開大学経済学系の薛敬孝氏(当時副教授)という初対面の人があらわれ、南開大学社会学系長の蘇駝氏からの伝言をつぎのように述べた。私の編著『経済社会学』に強い関心をもっているグループが南開大学にいて、その中国語訳が、李文光氏(南開大学副教授、東大社会学科卒業、現在は日本の金融事情専攻)ほか2人によってまもなく南開大学出版社から刊行される。については南開大学社会学系大学院で、経済社会学について2ヶ月間の集中講義をしてもらいたい。講義は日本語でよく、通訳の勤まる人が向こうにいる、と。

小学校4年から中学1年までを満州の長春(当時の新京)で過ごし、それきり中国に行く機会がなくて、中国に強いノスタルジーをもっていた私が、この依頼を2つ返事で引き受けたことはいうまでもない。旅費は自弁、宿舎はキャンパス内の「専家楼」、講義は2ヶ月間、土日を除く毎日、という先方の申し出を私はすべて受け入れた。私の中国体験については、私の論文「中国社会の近代化」(永井陽之助編『20世紀の遺産』文芸春秋社、1985 : 233 - 271)に書いたから、ここには繰り返さないが、一つだけつけ加えておけば、私が指導していた東大大学院生の1人で、中国語も英語もペラペラの園田茂人君が、まったく思いがけず自発的に、私費で同行を申し出てくれたことに、私は感激した。中国人の大学院生たちは非常に人なつこくて、私はまことに楽しい2ヶ月を天津で過ごしたが、園田君の人柄と彼の中国語が、彼らと私のあいだをつないでくれたことが、私の中国初体験を成功に導いた重要な要因であったことはいうまでもない。

この時にはまだ、私の経済社会学は、書かれたものとしてはまったく存在していなかったが、頭の中ではかなり進んでいた。私は、日本から必要な文献を持参し、その頭の中に進んでいたものを自室にこもって毎日書いた。1日分ができると、私はその要約版をつくり、通訳の丁愛菊さんがその要約を中国語に訳し、園田君がそれを中国語ワープロで打って配布した。約30人の院生たちは、その配布された要約を傍らにおき、丁さんによる私の講義の逐語訳をノートにとるのであった。彼らは日本の学生より文字がうまく、漢字ばかりで書かれたノートの美しさに私は感銘を受けた。当時南開大学は、中国における社会学復活の拠点校になっており、彼らは北は黒龍江省から南は雲南省まで、全国

から集まった秀才であった。彼らは学部段階では経済学や哲学の学生であったが、中国での社会学第1世代になる意気に燃えて、知識欲にあふれていた。いま彼らは、中国の各地の大学に散って、社会学の若手教員になっており、すでに立派な著書を出版して私にくれた人もいし、アメリカに留学している人もいる。

この時の講義ノートは、ルーズリーフで膨大なものになったが、私はそれをただちに出版するつもりはなかった。私は慎重を期して、それらを暖め、1987年にもう一度南開大学で経済社会学の講義をしたさいに、改訂をした。今それらは私の机上にあり、それらは、『経済と社会』の第2章から第4章までに生かされつつある。私の経済社会学は、マルクス、デュルケム、ヴェーバー、パーソンズとその系譜をたどり得る、ほんらい西洋的なものであるが、これを中国で教えた経験から、私は、非西洋後発社会の近代化という問題と結びつけて考えるようになった。つまり、資本主義はもともと西洋人の発明したもので、東洋人はそれを文化伝播によって東洋のものにすることはできるが、その資本主義は西洋のものとはどうしても違うのではないか。経済は社会と文化の中に埋め込まれている、というボラニーのテーゼの意味が、ここにあるのではないか。ともあれ、私の経済社会学は、まだ依然として私にとって課題であり続けている。

(8) 社会指標と福祉の社会学的研究

1963年以後のアメリカは、ジョンソン政権下であって、公民権法制定、貧困撲滅戦争、社会保障拡充などの国内社会問題との取り組みを強力に展開していた。1965年以降、ベトナム戦争への介入が本格化して、軍事予算の膨張と反戦運動の激化があり、せつかくのこれらの国内社会問題との取り組みが後退してしまったのは残念であったが、ジョンソンの引退後の1969年に、彼の政策の延長線上において、保健・教育・福祉省(HEW)によって作成された、社会問題白書ともいふべき『社会報告にむけて』(Toward a Social Report)は、経済指標と対比されるものとしての社会指標(social indicator)を提唱して、世界的に大きな反響を巻き起こした。

HEWの報告書の刊行に先立って、同報告書を推進した委員会のメンバーで

あった、ダニエル・ベル(委員長)、レイモンド・パウアー、ジェームズ・コールマン、オーティス・ダドレイ・ダンカン、バートラム・グロスらの社会学者たちは、個々に社会指標のアイデアを展開した著書や論文を、さかんに発表していた。パウアー『社会指標』(Bauer, Raymond, *Social Indicators*, MIT Press, 1966. 小松崎清介訳『社会指標』産能大)、グロス『国民の状態: 社会システム会計』(Gross, Bertram, *The State of the Nation: Social System Accounting*, 1966. 酒井正三郎訳『社会システム論』同文館)、シェルドン・ムーア編『社会変動の諸指標』(Sheldon, E. B., & Moore, W. E., *Indicators of Social Change*, 1968)などはとくに有名である。私は在米中にその一部に接し、興奮してこれに飛びついた。そして帰国後、大学紛争下の大学院ゼミで、社会指標を題目に掲げた。

私がアメリカの「社会指標運動」に接した時、興奮してこれに飛びついた理由がわかっていただけるだろうか。私は、けっして単に流行だから飛びついたのではない。私にはそういう性向はむしろとぼしいのである。私が飛びついた理由は、私自身の『社会変動の理論』において、私が社会学理論上きわめて重要だと思いつつ、GNP成長のように測定できないということから遠慮がちに述べた「社会成長」という概念が、そこでまさに測定の対象になっていたからである。

その後私は、上記のアメリカ系諸文献にあきたらなくなり、それらよりもオランダの学者で国連の職員であったヤン・ドレフノフスキーが、国連出版物の中で発表している2つの論文(Drewnowski, Jan, *The Level of Living Index: New Version*, 1968; do., *Studies in the Measurement of Levels of Living and Welfare*, 1970)を発見し、このほうが実際に社会指標を構築する上ではるかに有用であることを見いだした。私は社会指標が実際に作成可能であるとの見通しをもち、一種の夢の実現にコミットする気持ちを抑えがたく、当時は周囲の人たちにたいしてずいぶんはしゃいだりしたものであった。そして私は、そのアイデアを『中央公論』誌に書いた(「社会指標と社会計画」中央公論、1971年8月号)。

まったく思いがけず、私のこの文章を読んでこれに飛びついたのが、当時東京都知事であった美濃部亮吉氏であった。美濃部氏はおそろしくせっかちで、

彼が都庁舎のスピーカーを通じて毎朝やっていた訓辞において、私のアイデアを紹介し、さっそく東京都でこれを実現したいと述べた。だから、都の全職員がこれを知った。そして彼はその日のうちに、職員を私のところに派遣してきた。私の都合も何も、あったものではない。私は同日、都知事室に呼ばれ、僅かな研究費をもらって、「東京都福祉指標」をつくることを依頼された。もちろん、これは私1人でできることではない。東大に戻って協議の結果、大学院で一緒に社会指標について勉強した、直井優・安藤文四郎・盛山和夫の諸君の協力が得られることになったので、われわれは社会指標の作成に乗り出すことにした。彼の意図したものが何であったかは、彼が私の面前で職員に、「僕が知事になってから業績が急上昇した指標を選ぶんだよ」と指示したことによって明かであった。その浅ましさに私は権力の本質のようなものを見て鼻白みながらも、とにかくやってみることにした。

われわれがつくった富永・直井・安藤・盛山『二基準点方式による福祉指標作成のこころみ』（東京都企画調整局、1972）の成果について、ここで詳細に解説することを省略するが、その要点だけを記しておこう。まず、社会指標の諸領域を10×3のマトリックスにまとめ、それら30の各セルごとに複数の指標を用意する。指標は全部で180ほどに達した。つぎに、単位のマチマチなそれらの指標を、「二基準点方式」により0と100とをきめて、標準化するのである。「二基準点方式」というのは、われわれがドレフノフスキー論文から学んで適宜修正したアイデアで、この命名は直井氏による。時系列データの収集については、都庁の職員の全面的な協力を得た。最後に、指標の総合化は、エキスパートを対象にしたアンケート調査から引き出したウェイトを用いて、ウェイトつき平均をとった。そのあらましは、私の論文「社会発展と福祉水準」（江見康一・加藤寛・木下和夫編『福祉社会日本の条件』中央経済社、1974）にも書いた。しかし、これは共同作業によるものだから、私は個人の著書にすることを控えた。今でも残念に思っているのは、この時これを4人の著書として刊行しておかなかったことである。この作業終了後まもなく、第一次石油危機がおこって、社会指標ブームはけしとんでしまった。

現在、当時の社会指標ブームから20年を隔てて、「豊かさとは何か」が再度問われるようになってきた。労働組合ナショナルセンターのシンクタンクで

ある連合総研の依頼により、われわれのグループは、新しい世代の人びとを入れて、2度目の社会指標作成の作業に取り組んでいる。今度こそ、その成果を本にしたいものである。また社会指標の問題は、目下進行中の私の著書『経済と社会』でも取り上げている。

社会指標がブームになった1960年代末から1973年ころまでは、公害問題の表面化があり、これにともなう高度経済成長への反省があった。この反省は、「経済」にたいする「社会」の再発見を呼び起こし（「経済開発」にたいする「社会開発」のように）、その点で社会学に出番がまわってきた。経済企画庁の「国民選好度調査」もその一つであり、また同庁が作成に乗り出した社会指標もその一つであった。私もそれらに呼び出されて、はじめのうちは一種の使命意識から、他のことを犠牲にしてでも頑張らなければならないなどと考えていたのであるが、役所のやり方がわかってくると、いくら精を出しても何にもならないことを思い知るようになった。たとえば、私が一生懸命書いた報告書は役人が序文を書いて官庁出版物になるだけのことで、誰もそれを読まないし、読んだところで誰の書いたものかわからないし、評価されることもない。それらに一生懸命になって忙しくしているうち、気がついてみたら何も最近では業績が出ていないという目で見られるのがオチである。私はしだいに熱がさめて、そういうところにあまり出て行かなくなってしまった。

他方、社会指標が一つの機縁になって、福祉とか社会保障に関する社会的アプローチが、私の研究領域の一つに加わった。これについては、まだ私個人の研究成果は乏しいが、社会保障研究所の共同プロジェクトで、私が主査をつとめた「社会保障発展パターンの国際比較」を、あげることができる。これは、社会保障の国際比較のデータを集めてデータベースをつくり、これを使って、平岡公一・三重野卓・武川正吾・下平好博と私の5人がそれぞれ独立論文を書いたものであり、『季刊社会保障研究』（1986 - 87, Vol.22, No.4 - Vol.23, No.1）に特集としてまとめられている。また私自身の論文は、『日本産業社会の転機』（東大出版会、1988）に収録されている。

3. 戦後日本の社会学について考える

1955（昭和30）年に大学を出た私は、戦後日本の経済・社会の発展と、自己の研究の発展とがちょうど平行して進んだような気がしている。すなわち、1955年から60年代にいたる高度成長期を自分の青年期に対応させ、石油ショックとともに到来した経済危機を克服していく試練期としての1970年代を自分の壮年期に対応させ、そして日本が成熟社会に達したといわれるようになった1980年代半ば以後を自分の成熟期に対応させることができそうである。

1人の研究者としての私は、1980年代半ばから、やっと成熟期に入ったと自分で思っている。それは、『現代の社会学者』以後、「一冊の本」のかたちをとったものが急にふえ始めた時期にあたっている。著作リストを見ていただければわかるように、私は1956（昭和31）年いらい35年間、営々として毎年著書・論文を書き続けてきたが、1970年代まではほとんどが論文ばかりであって、著書は『社会変動の理論』しかなかった（『新しい産業社会』は社会変動理論の一般向け版であるし、『産業社会の動態』は論文集である）。そのことへの言い訳として、研究の第一線は、論文のかたちで形成されるものであると私は自分に言い聞かせてきた。しかし、やや大きな構想でプランを立てて書き始めると、途中で行き詰まってしまう自分が悲しかった。ところが、50歳をこえたころから、私は急に「書ける自分」を発見したのである。これを私は、上述のように成熟期への到達と呼んでいいのだろうと、自分で思っているのである。

それにしても、この成熟期への到達は、遅すぎた。『社会変動の理論』の思いがけない成功のあと、私に本を書くようにと好意的に勧めにきてくれていた編集者たちは、いつまで待っても書けない私にあきれて四散してしまった。編集者たちの私に対する評価はがた落ちになった。この間私は、編著で『経営と社会』『経済社会学』『日本の階層構造』を出しており、それらのプランづくりは結構たいへんで、それなりに私のノウハウとして評価してもらいたいのものもあったのだが、世間はそうは見てくれなかった。それらにかなりの時間とエネ

ルギーがかかったことが、私にとって一種の代償満足のようなものをつくりだしてしまったと思う。1980年代、私の50歳台になってやっと、私は多年の宿題であった『現代の社会学者』と『社会学原理』を書くことができたが、これらがもし40歳台の後半に書いていたら、私は編集者たちに、こんなに見捨てられないですんだであろう。そうすれば、私がいま手がけている『経済と社会』や『社会階層の趨勢と比較』を、東大の定年までに仕上げることができ、そのことはそれらの本の売れ行きにもたぶんプラスしたであろうし、あとがずっと余裕ができたであろう。しかしそれはできなかったのだから、いっても仕方がない。要するに私は、遅すぎたとはいえ、50歳台に入ってようやく、自分の学問——といえるほどのものかどうかはわからないが——の確立の手答えを得たのである。

しかし、私にとって気がかりなことが一つある。それは、私がそうやって何とか確立することができたと思うようになった「自分の学問」の内容は、自分個人としては一つの成熟の帰結であると思っているが、日本の社会学全体から見ると、どうもあまり流れにうまく乗っていないらしい、ということに私が気づいた、ということである。ここで、ニーチェが彼の著書の題名に用いた *unzeitgemäß* 《（「反時代的」あるいは「時代はずれな」）という言葉をはきあいにはだすのは大げさであるように思われ、また自分をニーチェのような大思想家に引きくらべることは不遜のようにも思われて、ためらいを感ずるのではあるが、ニーチェも『悲劇の誕生』を書いていたころは自分を時代はずれとは思っていなかったにもかかわらず、ある段階から急に周囲の人びとの態度が変わって、自分が環境に対してうまく適応できない、すなわち *unzeitgemäß* 《だと感じ始めたということであるとすれば、物を書くものには誰にでもそういう実感がおこることはありうることはないか。以下、この問題について考えるために、「物を書く」人間としての私にとって直接の環境である、日本の社会学界のことを、やや批判的に考えてみたい。以下この問題を、

- (1) 戦後日本の社会学の量的発展
- (2) 戦後日本の社会学の専門分化とこれにともなう問題
- (3) 戦後日本の社会学における社会学固有の思想の蒸発

という3項目に分けて論ずることにしよう。

(1) 戦後日本の社会学における量的発展

私が社会学を学びはじめてから現在までの40年間は、日本の社会学にとっての大きな発展期にあたっていた。戦前の日本の社会学は、現在にくらべれば、まだごく小さな世界であった。太平洋戦争が始まる直前の1939(昭和14)年度の日本社会学会の名簿が事務局に残っているが、それによるとこの年の会員数は550人であった。とはいえその中には、法律学者や経済学者や政治学者など他分野の人がかなり入っていると見受けられるので、プロパーの社会学者の数はそれよりかなり少なかったと見てよいだろう。戦後もしばらくはこの戦前パターンが続いたと思われる。

日本社会学会に私が入会したのは、大学を卒業して大学院に進学した1955(昭和30)年のことである。その少し前、1949(昭和24)年に戦後の学制改革によって新制大学が発足し、このころから社会学の量的拡大が始まったとされている。これは、新制大学の発足とともに大学数が飛躍的にふえ、そして各大学の教養課程に社会学が科目として置かれるようになったからである。さらにその4年後から新制大学院がスタートしたので、社会学を学ぶ若い世代の数がふえ、日本の社会学の量的拡大の傾向がいっそう強まり始めたと思われる。この前後の会員数は、残念ながら学会事務局に聞いても記録がなくて判らないのであるが、まだ1000人に達していなかったことは確実である。日本社会学会の会員数が、はじめて1200人に達したのは1968(昭和43)年であり、そしてそれから10年後にはそれが1850人になり、さらに10年後にはそれが2108人になったということが、学会事務局の記録によってわかっている。現在(1991年度)の会員数は2369人である。

社会学者の数の膨張は、もちろん外面的指標にすぎない。しかし、ここに戦後日本における社会学の発展の基礎条件があったことはたしかである。この基礎条件の上に、社会学者の多方面にわたる研究活動が展開され、それらをつうじて社会学の中から多くの人材が育った。このことによって、出版上における社会学の地位が上がったことはあきらかである。大学紛争当時、ふつうは研究室というコンパートメントに仕切られていて、他学科の先生方と接触の乏しい

東大文学部で、一時的に交流が進んだ時期があった。その時の雑談で、ある年輩の文学部他学科の教授が私にこういわれたことがある。「社会学科というのは、いったいつから、出来る学生が集まるようになったんです? 私たちのころには、社会学科というのはダメな学科で、あそこから人材が出てくる可能性などはない、というのが通り相場だったんですがねえ」と。まことに率直な話で、そのとおりであったのであろう。たしかに1960年代あたりから、東大において、社会学科に進学する学生の質が上がり始めた。他の大学でも、おそらく同じことがあったであろう。それは、一つの時代の流れだったのであろう。たぶん、戦後日本の社会学の学問内容における発展が、このころから目立ち始めたのであろう。

私の尊敬する日本農村社会学の父・鈴木栄太郎は、戦後になってから、戦前の日本社会学を回顧してこう書いている。「日本農村社会学の初期の開拓者たちはもちろんのこと、その後の研究者たちも、さまざまな他の近縁科学に近づき、ミイラ取りのミイラになった人も多かったと思う。当時の日本の農村社会学はいわば学問の世界の孤児だったからである。ある人は人文地理学に、ある人は農政学に、ある人は史学に、民族学に、農業経済学や民俗学に深入りして行った。社会学そのものの貧困がそうさせたのである」(「わが国農村社会学の回顧と展望」著作集IV、未来社、1970: 327)。当時の恵まれない環境のもとで、苦労を重ねながらすばらしい仕事を残した、鈴木栄太郎のような碩学があったからこそ、社会学の現在があるのだということを、いまジャーナリズムの寵児になっている若い社会学者たちも、忘れるべきでない。

たしかに、社会学は戦後に発展をとげた。ではその発展の中味は、これをどのように特徴づければよいであろうか。ここに戦後日本の社会学における発展を基本的に特徴づけていると思われる2つの方向性をあげて、この問いに答えてみよう。ただし、私はこれを発展と呼んだが、発展というのはニュートラルな言葉で、いいことばかりであるとは限らない。そしてこの発展における2つの方向性は、相互に独立ではなく、密接に関連しあっているということが重要である。そのことの中に、戦後日本の社会学の問題性もまた、潜んでいると私は思う。第1は、社会学者の研究活動の外延的拡大である。第2は、これと相関的に生じた、社会学それ自体の内包的希薄化である。

(2) 戦後日本の社会学の専門分化とこれにともなう問題

まず第1の、社会学の外延的拡大から考えて行こう。かつて日本社会学会第50回大会(1977年11月)において「日本社会学の展開」と題するシンポジウムが行なわれたさい、報告者の一人であった戦前派世代の長老小山隆氏は、戦前日本の社会学の全盛期を、日華事変の始まる前の1933(昭和8)年から1935(昭和10)年とし、この当時から戦時にかけての日本社会学の見取図をつぎのように描いた。大正期の理論社会学の中心であった高田保馬は、ドイツの学風を身につけ、本質学としての社会学と事実学としての社会学を区別して、みずからは本質学的観照によって社会の本質的連関をとらえることをめざした。その成果が『社会関係の研究』(1926)である。これに対して戸田貞三は、アメリカのシカゴ学派の影響を受け、「天才の本質直観に対する平凡者の経験的認識」といいつつ、事実学的実証を重んじたが、理論においては高田とごく近いドイツ的な思考をとった。のち松本潤一郎と蔵内数太と新明正道がこれに加わり、形式社会学から文化社会学へ、さらに現象学的社会学へと、ドイツ社会学自体の変化のあとをたどった。他方、昭和7、8年頃から日本社会についての実証研究が注目されはじめ、家族・村落・都市の3部門がその中心を形成した。家族研究は戸田貞三(『家族構成』1937)が中心で、のち清水盛光(『支那家族の構造』1942)、牧野巽(『支那家族研究』1944)、および岡田謙(『未開社会の家族』1942)が加わった。村落は鈴木栄太郎(『日本農村社会学原理』1940)と有賀喜左衛門(『日本家族制度と小作制度』1943)、都市は奥井復太郎(『現代大都市論』1940)。以上のほかに、民族、階級、社会意識、社会変動、そして職業の研究(尾高邦雄『職業社会学』1941)をあげることができる、と(小山隆「社会学における理論と実証」社会学評論、1978, Vol.21, No.1: 2-10)。

以上は戦前の場合であるが、戦後日本の社会学について、こうした見取図を描くことは可能であろうか。以下この問題を、順を追って考えてみよう。

まず第1に、理論については、戦前のドイツ社会学がナチスによって崩壊させられ、戦後は無から出発しなければならなかったのに代わって、パーソンズ、ホーマンズ、マートン、ブラウなどのアメリカ社会学からの強い影響が主流に

なった。さらに1970年代以後になると、アメリカ社会学の世代交代が進んで、シュッツの影響によって広がった現象学的社会学、ミードを始祖と見なすシンボリック相互行為主義、ガーフィンケルにはじまるエスノメソドロジー、ウォラーステインの世界システム論などが優勢になり、日本にもそれらが入ってきた。他方、1980年代あたりから、社会学の理論的定式化に数学モデルを使う人たちがふえるようになり、数理社会学の本格的な発展が始まった。これらは、数理社会学を例外とすれば、だいたい西洋の文献紹介として始まっている。つまりこのようにして、つぎの世代は、前の世代によって輸入されたものを国内で継承して日本の社会学に根付くように育てていく代わりに、前のものを捨てて新しいものの輸入に精出してきたのであった。

第2に、実証研究については、社会調査の広範な普及と、社会学の研究領域の外延的拡大をあげることができる。前者については、コンピューター使用の普及があつて、社会学的データの解析における計量分析の手法が広く普及し始めた。これはもちろん、自力による日本社会についてのデータ分析の産出だから、大いに意義のあることである。後者については、戦前からの家族・村落・都市の3部門にとどまらず、非常に多くの「連字符社会学」が発展してきた。このことを、まず福武直・日高六郎・高橋徹編『講座社会学』(全9巻、東大出版会、1957-58)の構成によって見ると、第1巻から第3巻までが個人・社会・文化という構成で理論を扱ったあと、第4巻に「家族・村落・都市」が一括され、第5巻に「民族と国家」が入り、第6巻に「階級と組合」として産業・労働社会学が社会学の講座で初めて一巻を占めた。第7巻は「大衆社会」、第8巻は「社会体制と社会変動」となっている。

それから15年をへだてて刊行された福武直監修『社会学講座』(東大出版会、全18巻、1972-76)の巻別構成で見ると、連字符社会学はもっといっそうふえている。すなわち、第1巻・第2巻で理論が扱われたあと、第3巻「家族社会学」、第4巻「農村社会学」、第5巻「都市社会学」が戦前いろいろの実証領域を扱い、そのあと第6巻「産業社会学」、第7巻「政治社会学」、第8巻「経済社会学」、第9巻「法社会学」、第10巻「教育社会学」がより新しく発展した連字符社会学を扱い、さらに第11巻「知識社会学」、第12巻「社会意識論」、第13巻「現代社会論」、第14巻「社会開発論」、第15巻「社会

福祉学」、第16巻「社会病理学」、第17巻「数理社会学」が、より多様な×社会学ないしカレント・トピックスを追加している。また同講座には入れられていないが、近年ではさらに、宗教社会学、医療社会学、国際社会学なども、急速に発展をとげつつある。他方、小山が戦前における新しい発展の分野としてあげたもので、上記の諸巻の題名として登場していないものについて述べれば、階級論は戦後は社会階層論と呼ばれることが多くなって、計量社会学的研究の第一線を形成しているし、民族はエスニシティという名でカレント・トピックスになっているし、また社会変動論は、近代化論および発展途上国の研究というかたちをとって、1960年代いらい社会学の有力な研究部門になっているのである。

社会学のこのような外延的拡大は、しかしけっして問題のないものではなかった。そのような外延的拡大は、はたしてどこまでがほんとうに社会学の研究分野として見なされ得るものなのか。またそれらの拡大された新しい研究領域が、社会学が真に貢献し得る分野として、多くの人びとによって公認されたのちでも、それを専攻する若い世代が育ってくるまでは、けっして本当には社会学内部に根付いたとはいえない。一つの具体的な例をあげよう。戦後初期に刊行された講座である田辺寿利編『社会学大系』（石泉社、全15巻、1948-55）を見ると、全体の構成は、第1巻「家族」、第2巻「都市と村落」、第3巻「国家と階級」、第4巻「人口と民族」、第5巻「職業と組合」、第6巻「宗教と神話」、第7巻「習俗と道徳」、第8巻「科学と技術」、第9巻「思想と言語」、第10巻「文学と芸術」、第11巻「経済と交通」、第12巻「世論と政治」、第13巻「法律と犯罪」、第14巻「教育」、第15巻「補遺」となっていて、一般理論部分がなく、社会学がすべて連字符社会学に解消されているのが特徴である。しかし、これだけの範囲のものがすべて社会学の境界の内部にあると果たしていえるだろうか。また、社会学の境界の中にあるということが公認されている部門についても、それらの分野を扱う専門研究者は社会学内部にほんとうに育っているのか。

この講座の場合、たとえば第11巻の「経済と交通」は全部が経済学者によって書かれており、第13巻「法律と犯罪」もまた全部が法律学者によって書かれている。経済および法律を入れた理由が、それぞれ経済社会学および法社会

学の観点からそれらを扱うことであるならば、それは社会学者によって、あるいは少なくとも社会学者と経済学者・法律学者の協力によって、書かれるべきであろう。また交通社会学というようなものは聞いたことがないが、それはほんとうに社会学に入れられるべき分野なのであるか。さらに、第8巻「科学と技術」、第9巻「思想と言語」、第1巻「文学と芸術」などについては、たしかに科学社会学・技術社会学、知識社会学・言語社会学、文学社会学・芸術社会学といった連字符社会学は公認のものであるといえるにしても、それらの研究者は社会学の中に十分育っていないので、多くの執筆者が社会学外にもとめられている。出版の場合はそれでもすむとしても、大学での教育においては、そうはいかないであろう。社会学の範囲をこんなに広げて考えるよりも、社会学の内包をきちんと固めることのほうが先決なのではないか。

上述した福武直監修『社会学講座』の段階になると、田辺寿利編『社会学大系』の段階から4半世紀を経て、戦後世代の層が社会学内部にかなり厚くなったことが、その実績をもって示されている。何よりも、『社会学講座』全18巻、1巻あたり平均300ページたらずとして実に5000ページに達する出版が、『社会学大系』の場合のように外部の人にほとんど頼ることなく（私の編集した『経済社会学』のように、経済学者や経営学者に頼ってやっと出来た巻もあることはあるが）完成した事実は、日本の社会学のおどろくべき成長を物語っている。しかし、その内部に立ち入ってみると、それらは一貫しているとはいいがたい。上記の諸社会学講座、およびリーディングス『日本の社会学』（全20巻、東大出版会、1985- 未完結）の各巻を参考にしつつ、小山が戦前の社会学について行なったような見取り図を、戦後について描いてみよう。

まず戦後日本の社会学理論は、構造-機能理論とマルクス主義の2本立てでやってきたということができる。現在では、これに現象学的社会学やシンボリック相互行為主義が入ってくる一方、マルクス主義はいっそうの多様化を示している。構造-機能理論は、はじめパーソンズ理論の輸入として始まり、その後日本社会学に独自のさまざまな展開が試みられるようになった。またマルクス主義も、これまで哲学・経済学の分野で行なわれてきたマルクス研究に社会学者による貢献が加えられるようになったほか、唯物史観や階級論や社会体制論や疎外論や社会運動論など、多方面において発展してきた。

つぎに連字符社会学は、あまりに数が多くて全部をレビューしきれないし、ここではその必要もないので、家族社会学・農村社会学・都市社会学・産業社会学の4つだけについて、戦後日本社会学の発展を批判的にコメントしてみよう。

(a) 戦後日本の家族研究は、伝統家族の研究と近代家族の研究に分かれる。伝統家族の研究では、親族(同族)研究の占める比重が高く、この面では有賀喜左衛門の提唱した日本の特殊性論の影響が強かったので、社会学理論との関係は切れていた。喜多野清一の同族理論には、ヴェーバーの支配社会学(家産制理論)が援用され、理論的視野が含まれていたのであるが、有賀にくらべて影響力が小さかった。近代家族の研究に関しては、研究をリードした森岡清美が国際派であったので、アメリカの家族研究者との交流があって、日本の特殊性論に凝り固まるようなことはなかったが、家族研究者が家族研究者だけで固まる傾向が強くなり、このため企業と家族とか、社会階層と家族とかいうような、社会学の他の研究部門との交流をうながすような問題設定はなされてこなかった。

(b) 戦後日本の農村社会学においては、福武直とその門下による、日本農村の変化を主題とするモノグラフ的調査研究が主流の位置を占め続けてきたので、学問自体が日本の現実に密着した性格をもつようになり、一般社会学との交流による理論的視野や、諸外国の農村研究との関連といった比較分析的視野は育たなかった。理論としては、講座派や労農派のマルクス主義経済学に主として依存し、鈴木栄太郎のエコロジー理論のようなアプローチは福武によってその意義を否定されて、継承されなかった。そのため農村社会学には、マルクス経済学を導入した本人たる福武自身が「経済学的偏向」と呼んだような、マルクス経済学と区別のつかない学風が形成されるようになった。しかしながらじつは、戦後日本の農村においては、地主支配は農地改革によって解体していたのであるから、講座派・労農派の時代はもうとくに去っていたのである。同様のことは、同族研究に焦点をおく有賀学派についてもいえる。それらは、戦前日本についての農村史研究においては有用であり得るが、戦後についてはもはやそうではなかった。こうして、講座派・労農派と同族理論中心に展開してきた戦後日本の農村社会学は、ある段階から現実発言力を失ってしまった。その意義はせいぜい、高度経済成長の過程を経て、縮小し解体しつつある農村の問題点を描き出す、時事解説にとどまる。今後、日本の農村

社会学が存続し得るためには、それは根本的につくりなおされねばならないであろう。

(c) 戦後日本の都市社会学は、農村社会学と対照的に、日本社会の急速な都市化が進んだことによって、現実面から発展が要請され、恵まれた条件下におかれた。日本の都市社会学は、1940年の奥井復太郎『現代大都市論』に始まるとされるが、戦後は磯村英一『都市社会学』(有斐閣、1953)、鈴木栄太郎『都市社会学原理』(有斐閣、1957)、矢崎武夫『日本都市の発展過程』(弘文堂、1962)などが出て、研究の発展に向けてのコアが形成された。磯村はシカゴ学派のエコロジー説から出発して都市の病理学的側面の解明に向かい、鈴木は都市結節機関説を提出して都市社会学の理論の中核をつくり、矢崎はやはりシカゴ学派のエコロジー説から出発したが日本の都市発達史に目を向けた。それ以後の都市社会学の発展は、都市の分類論、都市的生活様式の研究、住民意識の研究、地域権力構造論、日本の地域組織としての町内会の研究など、多方面にわたる。ただこれまでは、都市社会学は家族社会学や農村社会学の場合と似て、都市社会学者だけで固まって一つの専門領域を形成してきたけれども、都市というのは今日ではもはや部分社会というよりは全体社会そのものであって、都市化は全体社会の社会変動にほかならない。この意味で、都市化はマクロ社会学そのものに限りなく一致していく。だから、これからは、マクロ社会学としての理論的視野をそなえた、一般社会学そのもののような都市論の出現が待望される。

(d) 産業社会学は、以上3つの連字符社会学のどれよりも新しく、まったく戦後のものである。またそれは、都市社会学に似て、戦後日本社会の急速な産業化の進行により、現実面からの要請を背負って発展してきた。日本における産業社会学の創始者は尾高邦雄で、尾高は『産業における人間関係の科学』(有斐閣、1953)を書き、アメリカのホーソン工場実験から始まった経営管理理論としての人間関係論を拠り所としつつ、職場集団におけるモラル(志気)の測定や、労働者の企業と組合に対する帰属意識の調査などを具体的な内容とする産業社会学を構築した。のち彼はその視野を広げて、労使関係、労働者の経営参加、職場の自主管理制度などに関心を向け、また日本の経営の特質を論じた。産業社会学が研究対象とするのは企業という集団であり組織であって、

近代産業社会においては企業は家族とともに人びとの生活の2つの中心拠点をなしている。その意味で産業社会学は、現代社会を研究する社会学にとっての重要な焦点の一つである。ただ現実には、産業社会学はモラルや意識の研究の面では産業心理学と競合し、組織の研究の面では経営学と競合するため、研究者のひろがり意外に伸びていない。この制約を克服するためには、社会学独自の強みを生かすことができるように、ミクロおよびマクロの両面で一般社会学との連携を深めていく必要があるのではなからうか。

さて以上のように連字符社会学の問題を考えていくと、われわれはどうしても、社会学のあり方という古くて新しい問題について、再考しなければならなくなってくる。社会学の領域拡大につれて連字符社会学がたくさんできたとしても、社会学者たちがそれらの各領域に共通する統一的な社会学ディシプリンというものを確立しているのであれば、結果はせっかくできた個別連字符社会学の事実上の立ち枯れということになっていくのではないか。たとえば、産業社会学というのは経営学とどう違い、政治社会学というのは政治学とどう違うのかということを、社会学者ははっきり理論的に明らかにし得るのではないか。また、法社会学・経済社会学・教育社会学などの場合には、それぞれ独立の学会があり、それらは社会学者よりも法律学者・経済学者・教育学者などによって担われているほうが多いのであるが、そういう場合にも、社会学の理論がしっかりしていて、それらが正しく各領域ごとに貫徹しているのであれば、社会学は愛想をつかされてしまうであらう。

私が学生であった当時、私の恩師・尾高先生は、産業社会学という新しい連字符社会学の領域を開こうと懸命であった。私の理解では、これは企業というそれまで社会学者が扱ってこなかった対象に社会学ディシプリンを適用しようというもので、画期的な着眼であったと思う。しかしそのさい、先生は、社会学が企業を扱うのは、家族や村落や都市を扱うのとは違って、すでに経営学や労働経済学や労働法学が扱っている対象の中にあとから入っていくことを意味するのだから、社会学的研究の主題が明確になっていなければならないとし、職場の人間関係とかインフォーマル組織とかをそれとしてあげられた。この規定はしかし、アメリカでのホーソーン工場実験から始まった「人間関係管理」ないし「ヒューマン・リレーションズ運動」というカレント・トピックに乗り

すぎたきらいがあり、それらのものが企業における労務管理方式として流行していた1950年代まではよかったが、その流行が去ってからは時代に合わなくなっていく。それで先生は、1960年代以後は、人間関係という語に代えて「人間適及的視点」という語を用いるようになられた。

尾高先生の教えを受けた影響で、私も社会学ディシプリンをはっきりさせねばならないという気持ちをもち続けてきた。ところが、尾高先生は産業社会学という特定領域の中にもってしまわれ、『社会学の本質と課題』（有斐閣、上、1949）からあと、一般社会学について発言されなくなった。これと違って、私は、一方では近代化論や社会階層や経済社会学などいくつかの個別領域を手がけながら、他方であくまで一般社会学体系をつくらうとする努力を捨てず、それがやっと『社会学原理』に結実した。私としては、連字符社会学の諸領域を貫徹している一般理論のようなものをもしつかんだと評価されるのであれば、私の生涯を通じての努力にも意味はあったと考えたい。しかしどうもそれが、いまの社会学界に対して *unzeitgemäß* 《であるように感じられるとすれば、私のやったことはあまり意味のないことであつたかも知れないのである。もし後者であるとすれば、それはなにゆえにそうであるのか、私としても考えて見ないわけにはいかない。これがさきほど第2の問題としてあげた、社会学の外延的拡大と相関的に生じた、社会学それ自体の内包的希薄化ということである。項をあらためて、この問題について考えよう。

（3）戦後日本の社会学における社会学固有の思想の蒸発

戦後の日本の社会学はたしかに外延的に発展を遂げてきたが、そのような外延的發展がかえって社会学の内包的希薄化を結果したのではないかというのが、ここで私が考えてみたいと思う問いである。

この点において、社会学は、発展ではなく逆に退歩してしまったのではないか。戦前世代の何人かのすぐれた社会学者たちに比べて、戦後世代の社会学者たちは、かえって社会学そのものを見失ってしまっているのではなからうか。そうなった理由は、社会学の「連字符社会学」への専門分化が進んだために、存在しているのはみんな「××社会学者」ばかりであって、××のつかないただの社会学者がいなくなりつつあるためなのではなからうか。1986年に私

が『社会学原理』を書いた時、私はこういうふうの問題を立て、社会学の個別領域と対話しつつ、それらに共通する一般社会学の内包的原理といったものを考えようとしたのであった。

こんにち、いろいろの分野に社会学者がいるが、それらいろいろの分野の社会学者は、共通の理論枠組をもたないだけでなく、用いている言語さえ共通でなくなりつつある。私の『社会学原理』に対して、ある第一線の若い社会学者が、「われわれの世代にはこういうものを書ける人はもういません」と述べた。これは一面では賞賛の言葉であるともとれるが、他面では、われわれの世代では専門分化が進んでいて、その内部で競争が激しいから、もはやあなたのようなことをやってはいられないのですという趣旨の、批判の言葉であるともとれる。少なくとも、私のようなやり方をとる後継者といったものは、つぎの世代からは出てきそうにない。

現在、社会学の理論という時、「一つの理論」というものはなくて、たくさんのあれやこれやの「諸」理論がある。機能主義理論、交換理論、コンフリクト理論、現象学、シンボリック相互行為主義、エスノメソドロジー、マルクス主義、批判理論……。それはかまわないとしても、私が問題だと思うのは、それらがお互いの悪口を言い合い、互いに他を否定する意識が強すぎることで、流行のサイクルが短くて、あるものが流行するとみんながそれにのびついて特定のスターができるが、しばらくすると流行が変わって（特定グループがファッションのように意図的に流行を操作しているきらいもある）、かくして研究がいつこうに蓄積されて行かないように思われることである。このような状況は、あるいは競争社会のよくない面、すなわち競争の逆機能であるのだろうか。

私が卒業論文にパーソンズの学説研究を扱ったころ、誰もがパーソンズを読んだ。当時において、パーソンズもそのような流行の一つにすぎなかったであろうか。私より上の世代の方々の中には、そう思って苦々しい想いで見ておられた人も多かったであろうが、私の考えはそうではなかった。パーソンズはヴェーバーとデュルケームのすぐれた研究家であったことから、パーソンズを学ぶことはヴェーバー研究およびデュルケーム研究へとつながる。さらに、ヴェーバーはテンニェスにつながり、デュルケームはコントとスペンサーにつながる。コントはサンジモンを介してフランス啓蒙思想につながり、スペンサーとテン

ニェスはイギリス啓蒙思想につながる。テンニェスはまた、マルクスにもつながる……。こうして私は、パーソンズから出発しつつ、社会学思想の流れをたどって、自分なりの思想史的展望をもつことができたのであった。

ところが、1970年代ころからアメリカで若い新左翼の社会学者のあいだにパーソンズ排斥の運動がおこり、やがて反パーソンズの運動が世界的規模で社会学界を覆うようになった。それが日本にも連動して、ひいてはパーソンズに対する偏見が広まり、私までもが被害を受けることになった。もちろん私自身にも、パーソンズに対する批判的意見はある。それは、私の社会変動理論がパーソンズ理論の修正として定式化されているのである以上、当然である。しかし私は、パーソンズ理論にはいろいろ有用なアイディアが含まれていると思っているから、これを全否定する気は全然ない。ところが新左翼的パーソンズ批判者の批判のやり方を見てみると、まったくイデオロギー的であって、パーソンズのよいところも足りないところも識別する用意がなく、ただ外在的に全否定してしまう。そもそも私は、自分の理論をつくるためにパーソンズ理論を用いたのであって、パーソンズ理論の単なる紹介論文を書いたことは、ほとんどない。にもかかわらず、私が書いた理論はパーソンズの本に書いてあることの受け売りであるかのように思った人が多いらしく、私が独自にいろいろ工夫したことは正しく認知してもらえずに、パーソンズ否定の風潮がただちに私への否定に直結してしまったのである。私にとって、これほどくやしいことはなかった。

このことについては、私のやり方にもたしかに不適切なところがあったと思う。私は1950年代の後半から1960年代にかけてのころ、構造-機能理論では社会変動を分析することができない、というようなことをいう人が多かったので、そんなことはない、構造-機能理論は、これをつくりかえることによって、社会変動の理論を構築することのできるような、いいアイディアを含んでいると考えたのであった。これが、私が『社会変動の理論』を書こうと意気込んだ理由である。しかし、そのさい私は、自分自身の方法をあらわす特別のラベルを新造することを考えず、パーソンズのつくった「構造-機能理論」という名称をそのまま踏襲した。これは、戦略としてたいへん損なやりかただったと、ずっとあとになってから気がついた。ルーマンなどは、構造と機能をひっ

くり返しただけで、パーソンズとは違った独自の理論をつくったとあんなに問題にされたのだ。私も違ったラベリングを工夫して、自分の独自性をもっと強力に押し出せばよかったのである。ところが私は、そうすることを考えず、パーソンズに対する強い尊敬から、自分自身の理論的着眼を含んだ展開を、ところどころにパーソンズを引用しながら述べたのだった。そこで、パーソンズの本と私の本の両方をちゃんと読みくらべている人（そんな人はきわめて少ないにきまっている）以外は、私が単にパーソンズの受け売りをしていると受け取ってしまったのだと思う。

それにしても、社会学——日本の社会学だけでなくアメリカはもっとそうであるように思われるが——はどうしてこのように他派を攻撃することばかりに熱心で、互いに脚を引っ張り合い、全体としての共通点を中心に理論を大きくまとめていくことを考えないのであろうか。新左翼がパーソンズを否定したのは、これは「左翼」としての職能上、当然だろう。マルクス主義が、非マルクス主義の諸潮流を否定するのも、イデオロギーとして当然であらう。問題は、ほんらいパーソンズ理論と親近関係にあるはずの、シンボリック相互行為主義や現象学的社会学が、なぜパーソンズ理論に対して否定的態度をとり、全体を大きくまとめていこうとする許容的態度をとらないのか、ということにある。

シンボリック相互行為主義を例にとろう。かつて私が修論のテーマを行動理論にきめたときの意図は、マクロ社会学を本格的にやるのに先立って、そのためのミクロ的基礎といったようなことについて、自分の知識を確立しておきたいということであった。しかし、私が修論でミードを論じた1956年当時、ミクロ社会学はなお未発達の状態にあって、私の力ではミクロ理論を十分に自分のものとして構築することはできなかった。その後まもなく、ブルーマーやローズなどの努力によって、シンボリック相互行為主義が一つの思想潮流として発展するようになり、ミードがこの潮流の学祖として仰がれたことからいえば、当時私がミードにとりついたことは間違っていなかったことになる。しかし、シンボリック相互行為論は、1960年代以降にその姿をあらわすようになるにつれて、ミード理論を反パーソンズ主義として位置づけるようになっていった。これは、1950年代に修士論文でパーソンズとミードを並べて扱った私の考えからは、非常に遠いものであった。だから私は、そのようなミードの使われ

方に疑問をもちつづけてきたのである。

私にとってミードとは、何よりもプラグマティズムの哲学者であり、そしてプラグマティズムの哲学が心理学とわかちがたく結びついている限りにおいての心理学者であって、社会学の何か特定の学派の祖といったものではなく、社会学と心理学の共通の基礎的部分として、社会学にたいしてミクロ的な補完的知識を提供するものであった。私がミードから学んだことは、人間の心理（精神あるいは意識）と生理にかかわる内面と、人間の外側にある社会とを関係づけるメカニズムについての知識であった。たとえば、パーソンズは社会学者だから、行為者の外側にある価値や規範が社会化によって内面化されると説くけれども、そのさい、行為者の心理と生理のあいだに何があるかというようなことを分析してみせることはやっていない。ところがミードを読むと、意識の内部でおこることと、中枢神経系でおこることとのパラレルな過程といった考え方が説かれている。私はなるほどこれが、ミクロ理論の基礎というようなものなのだと考えた。そういう知識は、パーソンズ理論に対立するといったような性質のものではなく、あくまで補完するものであるはずなのである。

私は世界の社会学の中に、ヴェーバーに対すると同様、パーソンズに対する再評価の機運が生まれてくることを希求する。パーソンズの理論は、デュルケムやヴェーバーやパレトなど社会学固有の財産と、イギリスの功利主義やドイツの観念論哲学など社会学外部の思想潮流とを結合し、マートンおよび初期のホーマンズの理論とともに、機能主義という共通の思想をつくりだした。それは、第2次大戦以後の社会学が生みだした、社会学に固有の思想潮流であったといえる。われわれはここに、19世紀末から20世紀初頭にかけて、テンニエス、デュルケム、ジンメル、ヴェーバー、パレトが、現代の社会学がそれに依存している重要な財産を生み出しているの、ひさびさに社会学がもつことのできた財産を見いだすのである。

社会学の世界的な動向を見ると、これまで社会学は、マルクス主義、歴史主義、精神分析、現象学、システム理論、論理実証主義、批判的合理主義、構造主義、ポスト構造主義など、社会学の外に生まれた諸思想を、その都度貪欲に取り入れてきた。そのことは、もちろん必要なことであり、社会学の成長のためによいことである。問題は、そうした努力の結果として、社会学の内部にやっ

と何か固有のものが育ってきた時に、そういうものを大事にせず、それを否定してしまうことにある。そうやって、中にあるものを否定してしまえば、またもや外からの輸入に頼らざるを得ない。これは、無限の悪循環である。こんなことを繰り返しているようでは、社会学はいつまでたっても成熟できない。こうして、とりわけ1980年代以降の世界の社会学界において、社会学はしだいに、これまでせっかく蓄積してきた固有のものを喪失して解体へとむかい、何か「現代思想一般」というようなものの一部に解消しつつあるように思われるのである。私が、「社会学に固有な思想の蒸発」と呼んだものがこれである。

たとえばイギリスでいま一番人気のある社会学者として、ギデンズの名をあげることができようが、彼の人気は、特定の固有の理論を生み出したことによっているのではなく、フランスの構造主義をはじめ、多くの現代思想にコミットメントを示し、それらを取り入れたことによっていると思われる。構造主義は、社会学に固有の思想ではない。社会学に固有の思想でなくとも、それをうまく加工して社会学化して行けば、その中から、社会学に固有のものが形成されてくるであろう。ところが、ギデンズをはじめ、日本の多くの社会学者がいまやっていることは、そういうものを取り入れてそれを社会学化するところまでいかず、哲学者や思想史家がやっているのとおなじように、ただそれらを紹介するだけなので、社会学内部にそういう人がふえればふえるほど、社会学の固有の実体は希薄なものになって行くのである。後期ヴィトゲンシュタインの流行や、ブーコーの流行についても同様のことがいえるのではないか。どうも社会学はいつまでたっても後進国根性で、よそから取り入れることにばかり熱心である一方、自分の固有の思想的財産を大事にしない傾向があるように思われる。私がここで後進国根性といったのは、「何かすばらしいものは社会学の外にある。社会学の中にあるものはろくなものではないから壊してしまえ」という考え方である。こうして、社会学の内部にせっかく何かかたちのあるものが生まれると、みんなで悪口をいって引きずりおろしてしまうので、内部はいつも混沌としており、他方、外に対して社会学内部で生まれた思想を押し出していく、つまり外に対して輸出することによって影響力を行使する、という着眼がない。そもそも、社会学内部で大事にされていないような思想を、外の人が高く評価してくれるなどということはもちろんあり得ない。

私は、パーソンズ理論が、社会学にとってのそのような大事な財産の一つであると主張してきたのであるが、しかし実際には、私自身もしだいにパーソンズを卒業しつつあるので、たとえば彼の境界相互交換の図式のようなものは、そのままではかつてのように大きな関心の対象ではなくなってきている。もともと私がパーソンズ理論にとりついたのは、デュルケームやヴェーバーを取り込んだ彼の包括的な理論に期待したためであり、そしてそれが社会変動という問題を自分なりに理論化する上で拠り所になると考えたからであった。いま私自身の歩みが、『社会変動の理論』から『社会学原理』を経て『日本の近代化と社会変動』にまで進んできた以上、私にとってのつぎなる関心の対象は、21世紀に向けての日本社会の運命とか、またアジア諸国の近代化の動向とか、そういうことになる。ただ、そのように視野は大きいとしても、現実には私は一介の社会科学研究者にすぎず、そしてその社会科学は学問分業によって細かく分かれているのであるから、私はあくまで社会学をつうじてそういう問題を追求していくことになる。

そういう意味で、私たちは自分の世界である社会学というものを大事にしようではないか。社会学を粗末にしたり、社会学に対して無責任な態度をとったりすることは、天に向かって唾するようなもので、必ず自分にその結果がふりかかってくるのである。社会学を大事にするということは、現存するあれやこれやの社会学の諸理論を大事にすることである。社会学は、私たちにとって、「職業としての学問」なのである。私たちが世の中に何かを貢献し得るとすれば、それは社会学を通じてである。

教師根性で、最後はお説教のようになったが、じつはこれはお説教ではなく、自分に言い聞かせているのである。60歳になって別のことをやろうと思っても、大したことは出来ないでしょう。私は、これからも、死ぬまで社会学を続けるでしょう。社会学万歳！

1992年3月6日

「社会学とともに」 (非売品)

発行日 1992年3月6日

編集 富 永 健 一
富永健一先生の新しい門出を祝う会

製 版 (有)ハーベスト社

印刷・製本 (株)昭和工業写真社

構成・レイアウト 若林直樹
第IV章翻訳担当 園田茂人 恩田守雄
織田輝哉